

紀元 2000 年紀の紅河平原域無釉陶器編年

西村 昌也

1. 編年確立のための基本方針

ヴェトナム語において、いわゆる陶磁器には *đồ sứ* と *đồ sành* という 2 語の民俗分類語が頻用される。前者は施釉陶器を指し、後者は無釉陶器を指している。

ところで、ヴェトナム考古学における無釉陶器の研究は施釉陶器に比べ著しく遅れている。この原因は幾つか挙げることができるが、窯址遺跡の発掘や精緻な遺物研究が進んでいなかったことが最大の原因であろう。筆者が 1997 年にバクコック遺跡群で小規模発掘調査を開始したときには、無釉陶器の年代的な位置づけになるものは、若干の日本出土資料と若干の分布調査等で共伴可能性が指摘されているものにとどまっており、暗中模索の状態であった。

周知の通り、日本の博多、太宰府、鎌倉、大阪、堺、江戸などの各都市遺跡研究は各種陶磁器の大消費地という性格を利用して、輸入陶磁器を含む様々な生産地の陶磁器群の精緻な編年を編み出してきた（山本 2000、東京大学埋蔵文化財調査室 1998）。その成功の最大要因は共伴アセンブリッジ抽出と在出土器・陶器分類編年からの検証であろう。特に、生産地での編年（前後関係）がほとんど明らかにならないままに、組み立てられた日本での中国陶磁編年は、世界最先端の時間軸の物差しとして活躍しており、東南アジア考古学もその恩恵を多分に被っている。もちろんヴェトナムもその例外に漏れないわけであるが、ヴェトナムの諸遺跡において、中国陶磁は決して主体をなす遺物ではなく、量的にはヴェトナム陶磁が圧倒し、さらには施釉陶器よりも無釉陶器が圧倒的に多い現象が普遍的である。従って、ヴェトナム考古学の健全な発展のためには無釉陶器の研究が急務である。

そうした状況下、バクコック遺跡群の居住遺跡研究（西村 2011）において、様々な年代資料を含み、年代分布の純質性が低い遺物群を、施釉陶器と共に、前後関係や共伴関係を確認し、分類を行った経験は本研究の大きな基盤となっている。

そして、バクニン省のドウオンサー窯址遺跡

（Nishimura&Bùi M.T.2004）の発掘と遺物研究によって、10 世紀を前後とするヴェトナム陶磁器の具体的形態、製作方法、さらには変遷過程などの定点を明らかにすることができた。さらにはハイズオン省窯址遺跡群での発掘に筆者も参加しているが、その時の資料もこうした編年体系を作る上での重要な基礎を提出している。また、幾つかの遺跡でのまとまりのある表採資料も分類・編年案を組み立てる上での検証資料となっている。

さらに、2001 年と 2003 年に行ったハノイ市郊外のキムラン社バイハムゾン遺跡（西村 2011）の発掘でも各種遺構の出土遺物から、陶磁器編年の基礎資料を抽出することができ、これまでの編年観の検証を行うこともできた。

本研究では、これまでの筆者の調査・研究経験から、遺構や層位の共伴関係と型式分類から、各種無釉陶器の変遷過程を読みとり、時期的変遷が近年明らかになりつつあるヴェトナム陶磁あるいは中国陶磁や建設時期の明らかな建築遺跡などを年代理解のための定点資料とする。特にヴェトナムの施釉陶器については、近年の一括資料や窯址資料に基づく活発な型式変遷研究（Bùi M.T. 2001, Nishino 2002, Nishimura&Nishino 2003, Nishimura&Bùi M.T.2004, Nishimura&Nishino 2004）により、一世紀単位はおろか、場合によっては一世紀を 3 分あるいは 4 分して論じることが可能となってきた。これは、バクコック遺跡群、キムラン・バイハムゾン遺跡などの居住時期の長い遺跡の資料を、重ね焼き技法と高台形態に着目して分類研究を行い、全体の器形がわからずとも、ある程度正確な年代的な位置づけが行えるよう、出土遺物の一括分類を行ってきたことが好影響をもたらしている。特に 13-17 世紀に関しては細かい細分型式の前後関係や、暦年代との比定という問題は残すものの、全体の陶磁器変遷把握としては、かなりが理解されてきたといつてよい。本論では、施釉陶器碗皿類に関しては、10 世紀から 20 世紀にわたる包括的編年案（西村・西野 2006）を提出しており、本論の施釉碗皿の年代観も全てそれにもとづいているため、いちいち施釉陶器編年側の説明はあえて行わな

い。

行論の手続きとしては、包括的なバックコック分類とキムラン分類を提出し、各世紀単位で位置づけることの可能なまとまりの良い遺物群を、バックコック分類とキムラン分類と比較しながら、内容を叙述し、10世紀から20世紀までの分類・編年案を提出する。そして、最後に紀元2000年紀を通じた無釉陶器の特徴をまとめることとする。また、バックコック遺跡群やキムラン・バイナムゾン遺跡などの場合、多量に出土した資料を共通の分類枠で分類しているため、全ての出土資料を図面化しているわけではなく、器形残存のいい資料を選んで図面化している。

取り上げる無釉陶器の器種分類名称と胎質分類名称については、バックコックでの調査研究の経験から応用発展をさせている。器形に応じた統一呼称を行う。なお、器種分類に当たっては東京大学埋蔵文化財調査室(1998)の江戸時代の陶磁器・土器分類枠を参考にした。

2. 器種分類(括弧内はヴェトナム語呼称と分類上の略号)

バックコック分類(Fig.21～40)とキムラン分類(Fig.41～51)では、多少分類用語の使用範囲に違いがあるが、基本的には普遍的に類出する無釉陶器類を対象として、以下の器種概念で分類してある。(分類記号として括弧内右側のアルファベット記号を用いる。)

無頸壺 (Vò không cổ : VO) : 口がすぼまり膨らんだ胴部を持つ容器。頸部を有さない。

壺 (Vò : VO) : 口がすぼまり膨らんだ胴部を持つ容器。頸部を有する。

短胴壺 (Vò tháp det : VO) : 口がすぼまり、膨らんだ胴部を持つ。底部にいくほど幅が広がる鏡餅型である。短い頸部を有する。

桶 (Vại : VA) : 円筒型の容器。口縁部に若干のくびれを有す。

内湾口縁鉢 (Âu:AU) : 器形全体では、上方が開口するものの、口縁が内湾する鉢。

平鉢 (Chậu det : CHD) : 上方が開口する、もしくは上方がすぼまらない平型の容器。たらい型。

鉢 (Chậu : CH) : 上方が開口する桶型の容器。短く頸部を作る。器面に縄蓆文が施文されているものを、縄蓆文鉢 (Chậu văn thừng : NVT) とする

縄蓆文鉢 (Chậu : CH) : 上方が開口する幅広の鐙的口縁を有す。体部は縄蓆文で施文。

釜 (Nồi : NO) : 口がすぼまり膨らんだ胴部を持つ煮炊き具。日本の”釜”とは形態的にはやや違うが、中国考古学の分類呼称でも採用されており、機能的にも重なり合う部分が多く、同じ煮炊き具の”鍋”とは機能的に違うと考え、釜を採用した。器面に縄蓆文が施文されているものを、縄蓆文釜 (Nồi văn thừng : NVT) とする

長頸瓶 (Bình cổ cao : BI) : 強くすぼまる頸部と、膨らんだ胴部をもつ。長い頸部を有する。(全体として細長いので、「壺」と呼ばず「瓶」と呼ぶ。)

球形瓶 (Bình hình cầu : BI) : 比較的長い頸部と球形の体部をもつもの。

3. 胎質の特徴

陶器の硬度、胎土や混和剤の素材や精粗、色調など、化粧土や釉以外の陶器質を総称する言葉として”胎質”を使う。

施釉陶器と違い、無釉陶器の場合は、胎質と、器種あるいはより細分した型式間にある程度の相関関係を認めることができる。もちろん、この相関関係は決して、明確な線引きの可能なものではなく、しばしば中間的なものが存在する漸移的なものではある。また、ドゥオンサー窯の研究経験では同一窯址内資料においても、焼成条件などにより硬度や色調にかなりの違いが生じることがわかっており、細かい胎質分類は不適当と考え、汎用性をもたせるため以下の3分類とした。

- 硬質粘質土陶 : 粘土などのきめの細かい土を基本とし、硬質で比重が重く、緻密で割れ口が非常に鋭い場合が多い。暗褐色、灰褐色、暗赤褐色を呈する場合が多い。

- 硬質混砂陶 : 粘土質の土に、砂を混和剤としている。砂は比較的粒度の粗い場合が多い。硬度は硬質粘質土陶より、劣る場合が多い。灰褐色、赤褐色、黄橙色を呈している。

上記二者、硬質粘質土陶と硬質混砂陶を併せて、ヴェトナムの民間では đồ sành (無釉陶器) と呼ばれているものにほぼ相当する。また英語で stoneware と呼んでいるものが、これらに最も重なる範疇であろうし、日本では、いわゆる「焼き締めもの」という一般呼称に重なる。

- 軟質混砂陶 : 先史時代土器に非常に近い胎質のものも含み、胎質は、軟質でやや粗密度に差があり、一般的に褐色、黄色を帯びた灰白色を呈している。

砂を混和剤としている。これらの胎質のものは民間で, đố gốm と呼ばれているものにほぼ相当する。この範疇の陶器といわゆる先史土器の違いは、色調において均質性がみられ、胎質もより緻密で精粗の差が少ないことが挙げられる。その理由を筆者は恒久的な焼成施設を利用したより集約的、分業的生産に起因し、野焼き焼成を基本とした先史土器（正確にはゴームン期以前）と一線を画していると考え、生産遺跡での確認がないため断言はできない。

4. バッコック分類 (Fig.1 ~ 20)

4.1 釜 (NO)

NO1 類 (Fig.1-1) は、胎質が砂混じりの単純外反口縁である。NO2 類 (Fig.1-2) は、口縁内面上部に段差が作出されている。NO3 類 (Fig.1-3) は口縁端部が上方に尖出したもので、胎質は軟質混砂陶である。NO4 ~ 14 類 (Fig.1-4 ~ 25) は砂粒が多く混じる軟質の土器質のもので、灰褐色、褐色、明褐色をしているものが多い。張り出した口縁部の内面に、整形痕から生じる沈線が生じている。NO4 ~ 7 類 (Fig.1-4 ~ 12) には、底部あるいは全体に粗い縄蓆文が粗い間隔で施されているのが普通だが、NO4 ~ 7 類以外は底部も削られて無文と考えられる。口縁形態で細分してある。NO15 ~ 20 類 (Fig.1-26 ~ 2-5) は、多量の砂粒が混じり橙色、白橙色を呈し、焼成は前出類よりやや硬質なものであるが、他の高火度焼成陶ほど硬質ではない。前出類の 15 類のように口縁が外側に折りかえされ、上端に沈線が深く入るものや、肥厚外反口縁、16 ~ 19 類 (Fig.1-28 ~ 22-4)、肥厚外反口縁の内面に沈線のはいるもの (NO20 類: Fig.2-5) などがある。NO21 ~ 26 類 (Fig.2-6 ~ 3-11) は、砂粒が混じる土器質のもので、灰褐色、明褐色浅黄橙色などを呈している。器体が薄手で、口縁部が鋭角に外反しているのが特徴で、一部は粗い間隔での縄蓆文が器体全面あるいは底部に施文されている。口縁形態で細分してある。NO27 ~ 30 類 (Fig.3-12-18) も、砂粒混じりの土器質に近いものだが、灰白色あるいは白橙色を呈している。全体に器体が厚手で、口縁部も前出類ほど鋭角には外反しない。NO31 ~ 45 類 (Fig.3-19 ~ 5-2) は砂粒混じりで硬質な焼成のもので、ろくろ整形による水挽き痕が明確に残されている。明褐色、灰褐色、赤褐色などをしている場合が多い。口縁の造作で細分して

あるが、外反口縁で口縁内側に凹面、段差などが作出されている。NO45 (Fig.5-1,2) 類のみ耳が付けられている。NO46 ~ 52 類 (Fig.5-3 ~ 6-3) は、前出類同様、砂粒混じりで硬質な焼成のものである。口縁内面は比較的平坦で、外面側が肥厚するのが特徴。NO53 ~ 54 類 (Fig.6-4 ~ 6) は、砂粒混じりの厚手のもので、比較的硬質な焼成である。単純に外反するもの。NO55 ~ 57 類 (Fig.6-7 ~ 13) は、前出類に形態的に類似するが、硬質ではなく、土器質あるいは少し硬質な程度である。NO58 ~ 62 類 (Fig.6-14 ~ 19) は、砂粒混じりの硬質な焼成のものである。外反度合いがきつい。NO63 ~ 72 類 (Fig.6-20 ~ 7-6) は、砂粒混じりの土器質に近い軟質なもので、灰褐色、白灰色を呈しているものが多い。胴部に比して口縁部をかなりすぼめたもの (NO67,69 ~ 72 類: Fig.6-26,28 ~ 7-6) と、そうでないもの (NO63 ~ 66,70 ~ 71 類: Fig.6-20 ~ 6-25,26-29,7-3 ~ 7-5) がある。NO73 ~ 85 類 (Fig.7-7 ~ 8-3) は砂粒混じりの硬質焼成のものである。単純な口縁内面に段差、あるいは沈線があるのが特徴である。NO86 ~ 97 類 (Fig.8-4 ~ 8-28) は、前出類同様、砂混じりの硬質焼成のもの。口縁が丸く肥厚し、頸部内側に段差があるのが特徴。NO98 ~ 103 類 (Fig.8-29 ~ 9-7) も、砂混じりの硬質焼成のもの。単純な鋭角に外反する口縁だが、頸部内側が尖出したり、頸部外面あるいは肩部上部に沈線が入るなどの特徴がある。NO104 ~ 107 類 (Fig.9-8 ~ 9-15) は、頸部から口縁にかけて湾曲しながら外反するものである。口縁形態で細分してある。NO108 類 (Fig.9-16,17) は、砂混じりで硬質な単純な厚手の外反口縁である。NO109 類 (Fig.9-18,19) は、小型品で、口縁先端は丸く肥厚したものである。

4.2 桶 (VA)

VA1 ~ 4 類 (Fig.9-20 ~ 25)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質である。VO-22 類に類似した口縁部と肩部を有し、肩部から口縁がややすぼまるように胴部より径が小さくなっているのが共通した特徴である。VA1 (Fig.9-20) 類例以外は条痕状回転断続削り文(回転する器面に工具をあて、縦長の波状面を作る文様)は施されず、一部は口縁下に並行波状沈線が施されている。口縁断面形態で細分している。

VA5 ~ 9 類 (Fig.10-1 ~ 29)

これらは口縁部が、前類ほどではないが、きつく内

側にすぼまるように内反しているもの。条痕状回転断続削り文が施文された率が高くなっている。口縁下に並行（波状）沈線が施文された場合もある。

VA10～21類 (Fig.10-30～12-12)

これらは口縁部が上方に鋭利に尖りだし、内側へのすぼまりもないものである。また、大半に条痕状回転断続削り文が施文されている。これらの分類の中には、VA10 (Fig.10-30) 類などのように背の低い、口縁径が器高より小さいものを含む。器種的には細分すべきかもしれないが、胴部上半のみの破片では、器形判定が困難な場合が多く、敢えて細分対象としなかった。

VA22～24類 (Fig.12-13～26)

これらは、口縁先端は鋭く尖り出さず、先細りながらもやや丸みを帯びている。口縁外側は膨らみを持ち、内側は平坦に作出されている。

VA25類 (Fig.12-27～31)

無紋で小型のもののみである。口縁形態は前掲のVA20～VA22類 (Fig.12-5～14) に類似している。

VA26～32類 (Fig.12-1～10)

これらは口縁先端部が丸みを帯びたものである。断面形態で細分を行っている。

VA33～34類 (Fig.12-11,12)

口縁先端部が平坦で、先端部が下端部より大きいものである。口縁内側下部と胴部の境には明確な突状帯は無い。

VA35類 (Fig.12-14)

口縁先端部がやや膨らみ、カギ状に内湾したものの。

VA36類～37類 (Fig.12-15～18)

口縁先端部が平坦で、口縁部全体では内反しつつも、外縁に若干の突帯が作出されている。無紋が主と考えられる。

VA38類、VA41類 (Fig.13-19～13-23)

口縁と胴部の間にくびれがあるもの。口縁断面は胴部より膨らんでいる。器面は条痕状回転断続削り文と無紋のものがある。

VA39類～40類 (Fig.13-20～21)

口縁の上端が平坦で、器体自身は直立しているもの。無紋が主と考えられる。

4.3 平鉢 (CHD)

CHD1類 (Fig.13-24) は、平底にやや開口する短銅部を接着した物である。

CHD2類 (Fig.13-25～28) と CHD3類 (Fig.13-29～36) は、桶と成型法・施文法が全く同じである。

CHD4類 (Fig.13-37) は、口縁外縁に若干のくびれが存在する。

4.4 鉢 (CH)

CH1～2類 (Fig.14-1～14-3)

共に灰白色の胎土で、軟質な土器に近い焼成である。口縁部が内反し、胴部上半が湾曲し、下半がすぼまるのが特徴。

CH3～10類 (Fig.14-4～14-17)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質である。外面は無紋あるいは沈線のみのものである。口縁部は基本的に外反尖出しているのが特徴で、その口縁形態により細分を行った。

CH11～30類 (Fig.14-18～16-4)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質で、外面は条痕状回転断続削り文が施文されているのが一般的である。ただし、一部には外面が無紋や沈線文の場合があるが、同器形あるいは類似器形で、外面に条痕状回転断続削り文が施文されているものを対象としている。

CH31～32類 (Fig.16-5～16-7)

これらは上述のものと胎質は変わらないが、器形がやや深めで、条痕状回転断続削り文を有さず、無紋、沈線文で装飾されているのが特徴である。31類は内面に斜交沈線が施されており、播り鉢的な使用も考えられる。

CH33～34類 (Fig.16-8～16-10)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質で、口縁部が太く膨らみ、胴部がかなり絞り込まれているのが特徴である。

CH35類 (Fig.16-11)

破片で唯一例なため、器形が鉢であることは断定できない資料である。口縁下部の内湾がきついのが特徴である。

4.5 壺 (VO)

VO1～2類 (Fig.16-12～16-13)

やや孔質な胎質で、後出のものに比べ焼きしまりの良くないものである。1類は尖出した口縁、2類は膨らみを持った直立した口縁である。耳が付いている。

VO3～6類 (Fig.16-14～16-18)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質である。背の低い細めの口縁で、若干外反する程度である。先端部形態で細分してある。肩部から胴部にかけて膨らみをもつ器形である。耳が付いている。

VO7～10 類 (Fig.16-19～17-4)

胎質は前類と同じ。口縁は、先端部が均衡はとれていないものの、内外両方向に張り出すもの。肩部は前類に比べ、すぼまりの度合いが小さくなっている。四耳あるいは六耳の耳が、機能を果たせないような非対称形であるのも特徴。

VO11～16 類 (Fig.17-5～17-19)

胎質は前類と同じ。口縁先端部が外反するもの。内側への張り出しはない。ほとんどが耳付きのものだが、無耳も存在する。また、並行沈線文を有すものもある。

VO17 類 (Fig.17-20,21)

口縁が直立し、胴部が鏡餅形をした短胴壺。

VO18～26 類 (Fig.17-22～18-10)

口縁が尖り出すように外反するもの。該当分類に入る器形は短胴壺が主であるが、胴長の壺も含まれている可能性がある。また、耳の付いたものがないのも特徴である。肩部に並行沈線文様があるものもあるが、それら以外は無文である。

VO27～33,42,43,52,53,55 類 (Fig.18-11～18-33,39-10,11,20,21,23)

短い口縁がほぼ直立し、肩部が張り出すもの。口縁上端外縁は外反する場合が多い。

VO34～38,44～51,54 類 (Fig.19-1～19-6,12～19-19,22)

膨らんだ口縁部が特徴で、口縁部が短く、肩部と口縁部の形態的境界があまりはっきりしないのも特徴である。

VO56 類 (Fig.19-24) は、口縁が、やや長めで直立に近いもの。丸まった体部が想像される。

4.6 瓶 (BI)

BI1～8,25 類 (Fig.19-25～14,34)

口縁は比較的長く直立しており、胴部も長細くなっているのが特徴である。胴部には条痕状回転断続削り文が施文されている場合が多い。口縁上端部は外側に張り出していることが多く、断面形態で細分してある。

BI13～18,20,21,26,27,28 類 (Fig.20-20～26,28,29,35,36,37)

口縁は長く、上端が大きく外反したものの。胴部は球形あるいはそれに近いものが多いようだ。器種を細分するなら、球形壺と呼称すべきものである。

BI11,12 類 (Fig.20-17,18)

短い口縁が大きく外反したものの。肩部も大きく張り出しており、胴部全体は球形に近い形と推察される。

BI9,10,19 類 (Fig.20-15,16,27)

直立する口縁で、上端外縁が膨らむものだが、全体器形の想像が不可能である。可能性としては球形あるいはそれに近いものであろう。

BI22～23 類 (Fig.20-30～32)

胎質は、緻密さに欠けるざらつきの多いもので、やや多孔質である。口縁は直立に近く、上端が外縁がやや張り出している。

BI24 類 (Fig.20-33)

胎質は緻密かつ硬質。器表、器芯ともに褐色で、現在、中国茶の飲器に用いられる褐色無釉磨研陶器に胎質が酷似し、他類と全く違う起源であることを思わせる。中国製の可能性が高いのではないかと。口縁は短く、上端が外側に折れ曲がり、胴部は長い。

5. キムラン分類

分類時にバックコックでの分類を、そのままあてはめべきかとも考えた。しかし、無釉陶器がかなり地元で製作されている可能性が高いのではないかという想定に基づいた場合、共通分類とするとバックコックとキムランという地理的距離から生じる地域差を理解する妨げになる可能性もあり、敢えて共通分類とはしなかった。

5.1 縄蓆文釜 (NVT)

NVT1～6 類 (Fig.21-1～21-8) は、砂を混和した高火度焼成のもので、灰色の器体面をしていることが多い。器体全面に縄蓆文が施されているが、底部はなで消されている場合もある。口縁端部、特に先端部の形態で細分してある。

NVT7～13 類 (Fig.21-9～22-3) は、前類ほどの硬質焼成ではなく、土器より若干よい程度の焼成で、全体が均等に焼成されている。NVT7～9 類 (Fig.21-9～12) は褐色の器面、胎質で形態もやや、器高に比して、器幅が広めになるようだ。NVT10～13 類 (Fig.21-13～22-3) は器面が灰白色を呈しているものが多い。この類型に属するものは、口縁先端内面に段差や沈線をもつのがほとんどである。

NVT14～15C 類 (Fig.22-4～8) は口縁が肥厚し、器高に対し器幅の大きい形態のものである。口縁内面中央付近に沈線あるいは段差がある。縄蓆文は口縁以外全面に施されているものと (Fig.22-6) 底部のみに施されているもの (Fig.22-5) がある。焼成は先史土

器より若干よいかあるいは同等である。胎質は砂混じり。

NVT16～18類 (Fig.22-9～23-2) は、胎質は砂混じりのやや軟質な焼成のもので、口縁が比較的均等な厚さで、内面の中央か下部に、沈線あるいは折り返し成形による沈線状痕跡が残っている。器表の施文は、頸部から底部まで全面に縄蓆文施文されているものと、底部のみに縄蓆文が施文されているもの、方角文が施文されているものなどがある。一部には、かなり目の粗い縄蓆文もある (Fig.22-9 など)。

NVT19類 (Fig.23-3) は、前出類に類似するが、砂混じりでざらつく軟質な白灰色の胎質が異なり、器表も波打つように整形されている。当類は、底部接続例が確認されていないが、同様な胎質の底部片に縄蓆文施文例があるので、縄蓆文釜に含めた。

5.2 釜 (NO)

NO1～3類 (Fig.23-10～23-13) は、口縁を肥厚化させ、外側に折り返すようにして、上面に凹線が入ったもの。胎質は砂混じりの明褐色土で、土器質と高火度焼成陶の中間的なものである。

NO4類 (Fig.23-14) と 22類 (Fig.24-22) は、砂混じりで、かなり硬質な焼成で、口縁部断面が方形に整形されている。NO5類 (Fig.23-15,16) は、単純な外反口縁で、口縁内面中央に沈線が入る。肩部にも沈線が入っている。

NO18,20類 (Fig.24-18,20) は NO4類同様、単純な外反口縁で、18類は口縁基部を絞りこんでおり、20類は器面中央がやや外湾し、肩部に2重突帯が付せられている。胎質は砂混じりで、かなり硬質な焼成である。

NO6～7類 (Fig.24-1～3) は、口縁が肥厚し、口縁内面に凹状線が作り出されたものである。胎質は砂混じりで硬質の焼成である。NO8～9類 (Fig.24-4～24-5) は口縁が角張るように肥厚化したもの。NO10～15B類 (Fig.24-6～24-14) は外反口縁で、口縁内面の造作の違いなどで細分してある。胎質は砂混じりで、比較的硬質な焼成である。胴部は丸みを帯びる場合と寸胴に近い場合の両方があるが、底は平底である。

NO16類 (Fig.24-15) は、口縁内面上端にわずかな段差が作られている。胎質は、砂混じりで、やや軟質な焼成である。

NO16B類 (Fig.24-16) は、16類同様、口縁内面上端に段差が作られているが、頸部がよりくびれている。胎質は、砂混じりで、やや軟質な焼成である。

NO17類 (Fig.24-17) ,21類 (Fig.24-21) は、口縁部が大きく外湾したものである。

NO19類 (Fig.24-19) は、単純な外反口縁だが、胴部がろくろ回転を利用した鋸歯状工具による表面整形されている。砂混じりで、かなり硬質な焼成である。

また、こうした一般的な釜以外に、底を意図的に抜いた、底なしの釜が3型式 (NOKD1-3: Fig.23-5～9) 確認された。胎質は全て砂混じりのやや軟質なものである。

5.3 内湾口縁鉢 (AU)

器高が比較的高い逆台形のもので、口縁先端部がわずかに内湾したものの。口縁形態により細分してある (AU1～AU5類: Fig.25-6～12)。

5.4 平鉢 (CHD)

器高の低い断面逆台形のもの。硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質 (硬質粘質土陶) である。CHD1類 (Fig.25-13) は、口縁が外反している。CHD2～3類 (Fig.25-14～26-1) は口縁が内反したものである。

CHD3B～7類 (Fig.26-2～7) は、前述類とは全く違うもので、明確な頸部形成が行われておらず、器体全体の外反の度合いも、小さい。口縁形態により、細分してある。

5.5 内湾口縁平鉢 (AUD)

AUD1類 (Fig.26-8) は非常に背の低い器体で、内反口縁が特徴である。胎質は砂の混和の少ないものだが、器面は明褐色で、焼成は高火度焼成品ほど、硬質にはなっていない。

5.6 縄蓆文浅鉢 (CHVT)

肩部以下に縄蓆文が施されているもので、縄蓆文釜同様、土器より若干焼成レベルのよいもの (CHVT5,6類: Fig.26-15,16)、高火度焼成品 (CHVT1～4,7,8類: Fig.26-11～14,17,18) に分けられる。口縁形態も縄蓆文釜と同形態で、同じ脈略で製作されていることが理解できる。

5.7 鉢 (CHCC)

口縁が外反し、明瞭な頸部を形成しているもの。底部径は口縁部径より小さいが、大きな差があるわけではない。口縁形態で細分してある。

CHCC1類 (Fig.27-19) は、外湾した口縁で、先端

が尖出している。

CHCC1B,1C,2,3,4 類 (Fig.27-20 ~ 24) は、口縁が水平方向に外反したもので、一部は尖出している。器面調整もまだ粗く、和積み痕なども明瞭に残っているものも多い。

CHCC4B,5,5B,5C 類 (Fig.27-1 ~ 4) は、口縁がやや、下方向まで外湾したもので、平滑な器面調整が行われており、粘土紐の輪積み痕などもほとんど残されていない。器面は無文が主体である。

CHCC6,6B,7 類 (Fig.27-5 ~ 7) は、条痕状回転断続削り文を有しているものと無文のものがある。

CHCC8,8B (Fig.27-8,9) は、沈線あるいは突帯が付されている。

CHCC9,10,11 類 (Fig.27-10 ~ 12) は、口縁が水平方向に外反し、平滑な器面をもつもの。

CHCC12 類 (Fig.27-13) は、砂混じりの胎質で、器体も厚手で、他類とは大きく異なっている。

5.8 瓶 (BI)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質（硬質粘質土陶）である。

BI1 類 (Fig.27-14) は口縁先端部のみであるが、その形態から瓶と判断した。

BI2,3 類 (Fig.27-15, 16) は高い頸部に一回り大きい胴部が特徴で、条痕状回転断続削り文が施されている。

BI4 類 (Fig.27-17) は無文でやや太めの口縁先端部と口縁下の沈線が特徴である。肩部以下は沈線があるのみの無文である。灰色、あるいは褐色を帯びた器面・胎質で他の高火度焼成無釉陶器とは出自の違いを思わせる。

BI5 類 (Fig.27-18) は、肩部以下に、BI2,3 類同様、条痕状回転断続削り文が施されている可能性がある。

BI6 類 (Fig.27-19) は、外湾する口縁部が特徴で、胴部も他類ほど長胴ではない可能性がある。

5.9 桶 (VA)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質（硬質粘質土陶）である。VA1,2,2B 類は KL01-239 (Fig.27-20,21) , (Fig.28-5,6,7) のように、四耳壺の耳が退化器官化したものが付けられているものとなないものがある。VA1B,1D 類 (Fig.28-1,2) , (Fig.28-4) は地文が無文であるが、一部、波状並行沈線文が施されているものがある。条痕状回転断続削り文と無文が両方確認できるものは、L1,2 類と L3 類以降の各類である。VA1B,1C

類 (Fig.28-3) ,1D,2,2D 類 (Fig.28-4,5,6,9) は口縁部が肩部に比べ若干窄まっているのが特徴である。VA2C 類 (Fig.28-8) は肩部が胴部よりやや窄まるのが特徴である。VA3 ~ 5B 類 (Fig.28-10 ~ Fig.29-3) は、口縁径と底部径に大きな差がなく、口縁部内側の出っ張りも小さくなっているものが主である。口縁先端部は尖りだしている。地文が条痕状回転断続削り文であるものが圧倒的に多くなる。また VA2D 類から VA5B 類にかけては、器高の低い平鉢形のものも含まれている場合もあり、独立した分類にする必要性もある。しかし、口縁部のみの破片だと、桶か平鉢か判断が困難な場合が多々あり、独立分類としていない。

VA6 類 (Fig.29-4) は、口縁が尖り出さずにやや外反している。

VA7 ~ 9B 類 (Fig.29-5 ~ 29-10) のうち、VA7 類は、口縁先端部が丸く、口縁と胴部の区切りが前述類に比べ明瞭でなく、口縁内側下方に段差がある。VA10 ~ 11 類 (Fig.29-11 ~ 29-12) は口縁部先端が平らで、断面形が方形に近い形状になっているのが特徴である。

5.10 壺 (VO)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質（硬質粘質土陶）である。

VOVT1 類 (Fig.29-13) は縄蓆文を施文された壺の唯一類である。胎質は口縁が同形態で、同時期の VO7 類などと変わらない。

VO1 ~ 2B 類 (Fig. 29-14 ~ 18) は、砂粒含みの胎質で対称形の四耳あるいは六耳を持つ。

VO3 ~ 7 類 (Fig.30-1 ~ 8) は耳が付されているが、前述類ほど対称形になっていない。器形も器幅に対して器高があまり高くないずんぐりしたものが中心である。また、並行波状沈線が付されているものがある。口縁先端部などの形態により細分してある。胎質も前述類のように砂の混じりは多くなく、後出高火度焼成品の緻密かつ混じりのない胎質に近い。

VO8 ~ 11 類 (Fig.30-9 ~ 14) は、耳が実質的に機能できないほど退化器官化している。口縁径は、胴部径に対しやや小さいくらいで、相対的に寸胴化している。口縁断面形は、前述類ほどに造作は施されていない単純な外反口縁である。特に、VO10B 類 (Fig.30-13)、11 類 (Fig. 30-14) は、肩部と呼べるような胴部上位の曲線部もない、寸胴形である。

VO12 ~ 12E 類 (Fig.30-15 ~ 51-2) は耳のないものがほとんどで、前述類ほど器面調整が粗くなく、粘土

紐輪積み痕なども見えなくなっている。肩部と呼べる張り出しを持ち、口縁は外側に肥厚したものとなっている。

VO13～14類 (Fig.31-3～8) は、器形は、口がすぼまり膨らんだ胴部を持つ。底部にいくほど幅が広がる。鏡餅型で短胴壺と呼べるものである。一部に地文に条痕状回転断続削り文が施されている。並行波状沈線が施されているものもある。

VO15類 (Fig.31-9) は、厚手の口縁で角張った短い口縁である。

VO18類 (Fig.31-12) は、厚手の口縁で、先端に少し突帯状膨らみが作出されている。

VO17,20,22類 (Fig.31-11, 13, 15) は、口縁がきつく外反したものの。

VO16,21,24類 (Fig.3 1-10, 14, 16) は、小型品である。胎質は他の高火度焼成品と同じである。

VO25類 (Fig.31-17,18) は、高火度焼成品ではなく、明褐色の混じりの少ない胎質のものである。肩部に沈線がある。

VO26類 (Fig.31-19～21) は、直立した口縁で、先端がやや角張るように膨らむもの。胴部は長胴で、肩部で最も幅広い。突帯装飾がつくようだ。

VO26B類 (Fig.31-22,23) は、VO26類と同器形だが、口縁先端が丸まって膨らんでいるもの。

VO27類 (Fig.31-24) は、小型の無頸の球形壺である。胎質はやや軟質のもので、他の壺類とは異質である。

このほかキムランでは、碗、小碗や甌 (Fig.25-1～5) など器種も確認されたが、量的、時間的にも非常に限られた存在である。

6. 年代比定

6.1 発掘・一括採集資料からの編年定点

各遺跡例とバックコック分類とキムラン分類を基礎に、各分類の時期判定を行う。考察の方法論としては、各遺跡の遺溝単位での共伴関係 (Table 1-7)、層位上の出土傾向、型式的変遷、異器種間の共通性などから、総合的に判断しているが、全ての各分類がそれらの考察条件を併せ持っているわけではない。

6.2 10世紀基準資料

ドウオンサー窯址編年の1-3期を9世紀末かあるいは10世紀前半から10世紀後半に位置づけられる。編

年根拠は窯址の切り合い関係と陶磁器の形態変化を基本としている実年代決定資料は共伴越州窯系陶器に依っている (Nishimura&Bùi M.T. 2004)。1-3期の間で形態変化が序列よく看取される。同様の型式のものが、968年から1009年にかけて都であったニンビン省の華閭 (ホアルー) 都城遺跡で大量に出土している (Tông T.T. et al. 1999)。

6.3 11世紀基準資料

キムラン・バイナムズン R2 資料

ドウオンサー窯址群の第1期から3期と並行する資料を含む遺物群が、キムラン・バイナムズン遺跡 01年度調査の R2 遺構 (KL01-R2 と略称) である。ただし当遺構は建築基礎の役割を果たした溝状遺構で、基礎強化のために陶器や瓦片を多量に混入させてある。そして、その中の一部の遺物群がドウオンサー窯址群の第1期から3期に同定可能で、それら以外の遺物は時間的に前後する遺物と考えられる。従って R2 資料からドウオンサー 1-3 期資料を引き算した残りを、型式学的前後関係や共伴中国陶磁から考察すれば、ドウオンサー 1-3 期に前後する無釉陶磁器群とその時間的範囲が明らかとなる。(ドウオンサー 1～3 期については、Nishimura&Bùi M.T.2004 参照)

まず、縄蓆文釜 (NVT) の NVT1 類から 4 類まではドウオンサー 1-3 期に対応する。また NVT5 類は、口縁先端内側にかえりのない、やや尖りだしたもので、ドウオンサー 1 期以前のものとする。

NVT 7,8,10～13 類 (Fig.41-42 参照) は頸部が丸みをもつもので、土器質のもので、これまでのサイン質のものとは全く異なる。この中で NVT8 類あるいは NVT11 類を、ドウオンサー 3 期の後に接続するものと考え、その次が NVT10 類、それから NVT12 類、13 類、さらに NVT7 類へと変化していく図式を想定したい。NVT10 類は量的にも多い。

内湾口縁鉢 (AU) は、AU1-4 類 (Fig.45 参照) が出土しているが、DX1-3 期に位置づけられるのは AU3 類である。AU1, 2 類は先行型式と判断され、口縁がさらに尖出して外面の段差がはっきりしない AU 4 類が、最も後出のものとして判断される。

平鉢 (CHD) も CHD2B, 3, 4, 5 類 (Fig.45.46 参照) が出土しているが、CHD2B, 3, 5 類が DX1-3 期に位置づけられ、CHD4 類が、後出型式と判断される。

縄蓆文鉢 (CHVT) は、CHVT1, 2, 3, 5, 6 類 (Fig.46 参照) が出土している。その中で、CHVT1, 3, 5, 6

類が、DX1-3 期並行と判断され、CHVT2 類が後出型式と判断される。

鉢 (CH) は CH2、3 類が出土している。DX1-3 期例と比較すると類似はしているが、同型式とは言えない。その後の型式変遷を考えれば、これらは DX1-3 期より後出するものと判断される。

壺 (VO) は、VO1～7 類 (Fig.49,50 参照) が出土しているが、1、2 類は DX1-3 期以前のもので、3～6 類は DX1-3 期に位置づけられる。7 類のみが後出する型式と判断される。

施釉陶器資料には、玉縁口縁を特徴とする白磁と陽刻の蓮弁文を外面に持つ白磁碗は太宰府編年の X-XI 期 (10 世紀末から 11 世紀第 3 四半期) の標準輸入陶磁 (山本 2000) が含まれる。

越州窯系青磁碗には、A (II 類)、B1 (I -2a ウ)、B2 (III I-2B)、B3 (I-2a)、C (I-2a)、D (III -1a、III -1b)、E1 (I-2a エ)、E2 類 (対応分類なし)、E3 類 (対応分類なし) など当遺跡に出土した越州窯系青磁の大半の型式が出土している (括弧内の記号は太宰府編年での分類記号である)。この中でドウオンサー 1-3 期に確認されるものは、A、B2、D 類であり、太宰府編年では 9 世紀末から 11 世紀の間に納まっている。また E2 類、E3 類に関しては、対応する型式が太宰府分類に見あたらないが、E2 類は玉縁上の口縁を有しており、共伴している玉縁口縁の白磁と時期的に近いものと考え、上述の越州窯系碗より遅い年代を想定したい。

さらに、広東・ヴェトナム系の点状釉剥ぎ碗に関してはドウオンサー 1-3 期に共伴したものと、それ以前と考えられる型式がある。これらは全て、実芯高台あるいは実芯高台裏面に輪状の削り込みを入れたもので、広東省と北部ヴェトナム各窯で共通している。ところが若干例、胎質、釉質共にこれらと共通しながら、削り出しにより高台を作出しているものがある。また、体部の残存部には、団子状の土トチンをかませる釉剥ぎが観察され、その配置具合は通例の 4、5 カ所ではなく、越州窯の一部例のように、さらに数が多いことを予想させる。筆者は当例を広東・ヴェトナム系の点状釉剥ぎ碗の最終期のものとする。

ドウオンサー系の自然釉碗に関しては、A 類がドウオンサー窯 1-3 期に含まれている。B 類はより、明確に高台部が作出され器形も越州窯系の碗形に近いものになっている。C 類は体部下半が、若干膨らみ、器壁も全体に薄手になっている。また、やや細身の高台が作出され、灰色がかった透明釉が、全面に均質に及ん

でおり、自然釉でない可能性もある。B 類に関しては、ドウオンサー 1-3 期のものと同様にあたるかどうか判断は難しいが、C 類に関しては明らかに、形態的・技術的違いから、より後出のものと考えたい。

以上、無釉陶器、白磁碗、越州窯系碗、広東・ヴェトナム系点状釉剥ぎ碗、ドウオンサー窯系碗全てに関して、ドウオンサー 1-3 期には存在せず、後出すると考えられる型式があることから、この遺溝の形成時期をドウオンサー 3 期以降、実年代では 11 世紀の初頭前後に納まるものとする。

6.4 12 世紀基準資料

ドウオンサー 3 地点資料

ドウオンサー窯址第 3 地点での窯址資料である。

窯址を部分的に確認するために掘った時の資料で、器種としては四耳のある長胴壺と縄蓆文釜のみである。長胴壺の四耳はドウオンサー 1-3 期と比べ、対称形ではなく、耳としての機能はしていないと考えられる。器形的に全体に長細くなり、口縁断面はやや外反している。縄蓆文釜はやや厚めの口縁で、縄蓆文自体が太く粗くなっている。器形的には、ドウオンサー 3 期との直結する連続性を看取できないが、長胴壺の耳や器形的変化から、ドウオンサー 3 期以降、つまり発掘資料の中ではドウオンサー 4 期と位置づけ可能である (Nishimura & Bui M. T. 2004)。当初、この四耳壺や縄蓆文釜を 11 世紀のものと考えていたが、今回の資料の見直しで、BC 分類の VO30 類 (Fig.18 参照) に最も類似し、KL の VO10B 類と VO12 類 (Fig.30 参照) あるいは VA1 類 (Fig.27 参照) の中間くらいに位置づけられる資料と考えた。理由は器面調整が丁寧なこと、耳が退化器官化していること、また、肩部の張りが減少し、器体が寸胴化していることなどである。形態的進化から 12 世紀後半あるいは 13 世紀後半まで下げて考えるようになった。

バックコック遺跡群ズオンライゴアイ地点 (DLN) の最下層部資料

ズオンライゴアイ (Dương Lai Ngoài) 地点では、下層部 (第 9-10 レヴェル) で、ある程度のまとまりある陶磁器資料が出土している。特に、最下層部に相当する南土坑 (HPN) の場合、中国六朝並行期まで遡る磚が出土した以外は、比較的年代のまとまりもよい。施釉陶器に関しては、12 世紀か 11 世紀後半と比定可能な、高くて細い高台を貼り付けた単色透明釉碗 2 点

(西村・西野 2006) が共伴している。無釉陶器では、四耳あるいは六耳長胴壺 (VO11 類の DLN-62 と DLN-61:Fig.17 参照) と、軟質混砂陶の釜が確認されている。四耳あるいは六耳の長胴壺の口縁部は、外端が下方に尖出し、口縁器体がやや長めのものである。

釜の口縁部は外端が膨らむのが特徴で、長く外反するもの (NO4 類の DLN-60, NO6 類の DLN-106:Fig.21 参照) と、短く外反するもの (DLN-107, NO9 類の DLN-58:Fig.21) がある。胴部は、器高が低いものと高いものがあり、後者の場合、底部に粗い間隔で縄蓆文が施文されている。

また HPN 以外の第 10 レベルでは、四耳壺の VO10 類 (DLN-118:Fig.17-2)、11 類、釜の NO9、10、11 類 (Fig.21 参照) が出土しており、若干の時間差を表している。施釉陶器の最晩期例は 13 世紀である。

さらに、第 9 レベルで出土しているものには、VO13 類の DLN-101 (Fig.17-13) 例、VO18 類の DLN-52 (Fig.17-22) 例や NO25 類 DLN-56 (Fig.2-28) 例のように、新しいタイプが出現している。

キムラン・バイナムゾン遺跡 F54, F85 遺溝資料

ハノイ市キムラン・バイナムゾン遺跡の F54 と F85 は構造的にも同じ方形炉遺溝である (Nishimura&Nishino 2004)。F85 では同タイプの四耳壺 2 点 (VO8B 類の KL03-1:Fig.50-10, KL03-10)、縄蓆文釜 (NVT15 類の KL03-142 と 143:Fig.22-6) が共伴している。そして F54 では 12 世紀に比定される高足淡色透明釉碗 2 点と、無釉陶器類は F85 と同類の縄蓆文釜 (NVT15BC 類)、無文釜 (NO2:Fig.23-11 参照)、短頸壺 (VO21 類の KL03-7:Fig.31-14) が共伴している。施釉陶器と短頸壺、無文釜などから、F54 は時期的に少し遅れるかもしれない。また、両遺溝で李朝に典型的な瓦が共伴している。

デンカオトゥー遺跡

バックザン省 Lục Ngạn 県 Phượng Sơn 社のデンカオトゥー遺跡は李朝後期と考えられる建築遺跡 (Trình H.H.2009) で、そこから出土する陶磁器群 (Fig.31-25 ~ 30) は、後代のものも非常に少なく極めてまとまりがよい。BCVO8、9、11 類と同類の四耳壺が確認できる。Fig.31-28 の釜は、KLNO15 類に近いものである。

ヌイ・イエンヴェト採集資料

1996 年 12 月にバックニン省の Gia Lương (ザールオン) 県をサーベイした際にイエンヴェト山 (Núi Yên Việt: NYV3) の麓で、地元住民が一括して掘り出した資料である (Fig. 32-1 ~ 5: &Phạm M.H.1998)。出土状況から判断すれば墓である可能性が高い。

4 個体分の施釉陶器と四耳を持つ長胴壺 1 点が確認された。施釉陶器は水注、器蓋があったと考えられる高足の鉢、短頸の四耳壺、蓮花と草葉を削り出しにより刻文した器蓋の中央部らしき破片などである。それぞれ透明のやや黄みがかかった貫入の多い釉がかかっていた。こうした各種の施釉陶器は文様、器形 (特に高台部のつくり) から陳朝期を想定することはできず、12 世紀あるいはそれ以前と考えている。長胴四耳壺は明瞭な輪積み痕を残すもので、四耳部はドウオンサーの 1-3 期に比べ、対称形ではなくなり、器体本体との空間も縮まり、耳本体としての機能が果たせないような形態になっている。KL 分類の VO10B 類に最も類似する。同様の四耳壺を陶磁器埋葬した墓例がハータイ省の Chua Gio (チュアゾー) でも発掘されており、李朝期と判断されている (Bui M.T.2003)。

6.5 13 世紀基準資料

コンチエー・コンティン遺跡資料

1999 年 11 月に筆者らが、ナムディン省 Mỹ Lộc (ミーロック) 県でコンチエー・コンティン窯址遺跡で調査した資料である。13 世紀から 15 世紀までの遺物が認められる遺跡だが、99 年調査のコンティン 1 地点は、13 世紀に比定可能な施釉陶器の窯址遺跡で、確認のため窯址からの直接資料採取を行った。この時の施釉陶器資料については、その技術・分類上の位置づけが既に行われている (Fig. 32-6 ~ 10: Nishino&Nishimura 2001、Nishino 2002、西野・西村 2008)。今回は、99 年調査時の窯址からの直接採取資料で、13 世紀施釉碗と共に採集された資料を中心に扱う。CT1L3-1 (Fig.32-6) は逆 C 字状の角張った口縁を持つ長胴鉢である。外面の口縁直下には、12 世紀長胴形四耳壺に典型的な退化した耳が付けられており、長胴壺 (VO) から長胴鉢 (VA) への過渡的型式であることが理解できる。櫛歯状工具による波状沈線と並行沈線が施文されている。BC 分類の VO16 類 (Fig.17 参照) に最も類似し、VA5 類 (Fig.10 参照) にも類似する。CT1L3-2 (Fig.32-7) も、前例と似たような口縁形態を有しているが、形状がより寸詰まりとなり、口縁下半の器体内側への張り出しが小さくなって

いる。BC 分類の VA5 類 (Fig.30 参照) に同形態を見いだせる。CT1L3-3 (Fig.32-8) は平鉢で、口縁形態は、外側に伸び出す口縁上半と内側にややすぼまる口縁下半を特徴としている。体部に条痕状回転断続削り文が施されている。BC 分類の CH6 類、11 類 (Fig.14 参照) に最も類似する。KL 分類の CH6 類、6B 類にも近い。CT1L3-4 (Fig.32-9) は口縁下半がかなり内側にすぼまり、上半が再び外側に尖りだしたものである。BC 分類の NO17 類が最も形態的に類似している。CT1L3-5 (Fig.32-10) は鏡餅の形に近い短頸短銅壺で、口縁部が分厚く膨らみ、先端が外側にわずかに反り返ったものである。BC 分類の VO25 類 (Fig.18 参照) に最も近く、VO23 類、24 類 (Fig.18 参照) に、さらには KL 分類の VO14 類 (Fig.21 参照) にも類似する。これにより、先行型式と判断される BC 分類の VO17 類 (Fig.17 参照) が、13 世紀以前に遡ることが理解できる。

コンチェー採集の資料も、同じく 13 世紀の施釉陶器資料群と共伴する無釉陶器資料で、先述のコンティン資料群とはほぼ同型式の桶、鉢などが含まれている。その中に、口縁が玉縁状に外側に膨らんだ釜 MT-5 (Fig.32-15) は BC 分類の NO15 類 (Fig.1 参照) が最も近い形態である。口縁が大きく外反する釜 MT-3 (Fig.32-13) は BC 分類の NO9 (Fig.1 参照) に形態的に近いが、全く同じではない。

ちなみに、BC 分類の釜 NO15 類の DLT-86 (Fig.1-27) は、ズオンライションの H14 土坑 (他にもあり) から、12-13 世紀の施釉陶器に共伴して出土している。

キムラン・バイナム遺跡 2 号炉

キムラン・バイナムの 01 年度調査 2 号炉 (KL01-Lo2) は 13 世紀の施釉陶器が施釉陶器の最末期資料として共伴している。

無釉陶器では、KL 分類の縄蓆文釜 (NVT15 類 :Fig.22-5)、四耳壺 (VO4 類 :Fig.30-3 参照、VO9 類 :Fig.30-11 参照)、蓋 (NP2A 類) が出土している。そのなかで、VO4 類はドウオンサー期のもものと判断されるが、VO9 類 (KL01-187,214) と NVT15 類 (KL01-10:Fig.22-5) は Rānh2 遺溝からは出土しておらず、2 号炉遺溝の時期に最も近い遺物と判断される。特に KL01-10 は、完形に近い形態で出土しており、使用後そのまま遺棄された可能性が高く、遺溝機能最終年代に最も近いと考える。VO9 類は外反口縁の内側に段差を有し、四耳壺も非対称形化し、耳としての機能もほとんど果たさなくなっていたと考えられる。

NVT15 類は体部が楕円に近い形をしたもので、口縁が内側に折り込まれて段差を作っている。底部に粗い間隔の縄蓆文が施されている。F85 と F54 に共伴した同類のものとは、口縁内側の段差がより低位になり、鋭角な外反に変化していることから、口縁形態が異なっており、NVT15C、16、17C (Fig.22-8,9,13 参照) などに接続する後出型式と判断する。KL01-Lo 2 自身は、F85 より少し遅れる年代があてはまりそうで、つまり 13 世紀と考えるとよいと推定する。

6.6 14 世紀基準資料

バッコック遺跡群ソム・ベング 1 地点 R1 資料とソム・ベング 2 地点 R2 資料

1,2 地点と分けているが、実際は 1m 程度しか離れていない同じ敷地内の発掘で確認された、廃棄遺物群である。共伴施釉陶器の最新年代が、下層部が 14 世紀半ばまでに納まる。かなり多量の無釉陶器が共伴している。XBN1 地点の細長い土坑 (R1) に廃棄された遺物群は 1 層 (R1-1) から 9 層 (R1-9) にまで分層されているが、共伴施釉陶器の年代からそのうち 9 層から 4 層までが 14 世紀、3 層から 1 層までが 15 世紀に廃棄されたと判断される。XBN2 地点の L4 層がやはり R1-4 から R1-9 までと同じ時期に納まる。

該当層位からの出土例で、前出のバッコック各遺溝出土例、コンチェー・コンティン例を差し引くと、以下のようなものが残る。桶は BC 分類の VA1、2、6、9、13、15、19、20、23、24、25 類 (Fig.9 ~ 12 参照) である。鉢は CH10、23、31 類 (Fig.14 ~ 16 参照)、壺は VO19、22、29 類 (Fig.17 ~ 18 参照) がある。釜は最もヴァリエーションが多く、NO18、20、23、24、26、27、28、35、36、38、40、42、44 類 (Fig.22 ~ 24 参照) にのぼっている。ただし、NO42、44 類は R1-4 層で若干点のみが出土しているのみで、R1-3 の遺物の取り残しの可能性もあり、他例は全てより上層での出土のため、この時期の遺物ではなく、上層部の時期の可能性もある。

ナムディン省天長府遺跡群のバイナム遺跡

当資料は、ナムディン省博物館 (Nguyễn Q.H. et al.1996) が緊急調査した資料 (Fig.32-16 ~ 22) だが、船着き場のような低湿地から出土した遺物群で、年代的に非常にまとまりがよいことが指摘されていた。当遺跡の施釉陶器資料に関しては、西野 (2001) が詳しく分析をしており、その年代幅は、若干の 15 世紀

初頭の遺物を除いて、13世紀後半から14世紀半ばまでに納まると考えられる。BHL95-S1 (Fig.32-16)はBC分類のVA14類 (Fig.11)、BHL95-S2 (Fig.32-17)がVA5類 (Fig.10)に対応する。BHL95-H1-S6 (Fig.32-20)は形態的にBC分類のCH32 (Fig.16参照)に近く外面文様も共通している。内面に交叉沈線を施文し、すり鉢機能を付しているのはCH31と共通する。また、BHL95-H1-S7 (Fig.32-21)はBC分類のVO27 (Fig.18)に対応させられる。

キムラン・バイナム遺跡 01年度と03年度調査 R1、03年度調査 H5資料

2001年の調査でR1という長い溝状遺溝を確認し、川の水流で破壊されかけている部分を発掘した。この溝に関してはその性格は悪天候下の発掘のため理解できなかったが、2003年の継続調査で完掘し、それは壁などの建築のための基礎(地業)であることが判明した。この遺溝の中には大量の陶磁器や瓦類が混入されていた。砂利代わりに使ったものであろう。また、同時に発掘したH5地点でも、土地の地盤造成のための盛り土が確認されたが、R1遺溝の遺物と接合する資料や同時期の陶磁器が大量に確認されたことから、両者の造成年代がほぼ同じと考えられる。すでに、R1資料に関しては2001年調査分を報告してあるが(Nishimura&Nishino 2003)、最も新しい遺物が14世紀の末に位置づけることが可能な遺物群である。

前出の11-13世紀初頭に位置づけられる遺溝から出土している型式類を除くと以下の型式が残る。縄蓆文釜はKL分類のNVT8、9、10、11、14、16、17、17B、17C、18、19類 (Fig.21～23参照)、無文釜はNO1、2 B、5、6、7、9、10、10B、11、12、14、15、16 B、17、21類 (Fig.23～24参照)が出土している。壺はVO8、10B、11、12、12C、13、13 C、13D、14、16、24、25類 (Fig.30～31参照)が出土している。鉢はCHC1C、5、6、8、8B、10類 (Fig.26～27参照)である。桶は、VA1、1B、1D、2、2B、2C、3、4、4B、5、5B類 (Fig.28,29参照)が出土している。

6.7 15世紀基準資料

胡朝城採集、発掘資料

胡朝の創始者Hô Quý Ly (胡季犛)が1398年に建設したNhà Hồ (胡朝)城(タインホア省 Vinh Lộc: ヴィンロック県)は、陳朝滅亡(1400年)により都とされた。しかし、胡朝自身が明の侵略で滅ぼされ(1407

年)、侵略した明も黎朝創始者 Lê Lợi (レロイ)に撃退され(1427年)、都は再び昇竜(現ハノイ)に戻ったため、使用期間が非常に短い城郭遺跡である。筆者が行った二度のサーベイで採集した資料 (Fig.33-1～4)、城内で発掘された資料 (Fig.34-5～14)では、施釉陶器はわずかの16世紀資料を除き、全てが14世紀末から15世紀初頭に位置づけが可能である(Nishimura &Nishino 2003)。この遺物群中に確認された無釉陶器が、短頸長胴壺、桶、釜である。桶 TH01-20 (Fig.33-3)、TH01-21 (Fig.33-4)の口縁形態は、外側に張り出す形態でBC分類のVA24例などと類似するが、より丸みを帯びている。むしろVA26、27類に対応するものと判断される。BCVA22類 KLVA7類の桶と同類のもの (Fig.33-12、Fig.33-9)もある。長胴短頸壺 TH01-22 (Fig.33-2)も口縁の上端部の張り出しが、KL分類のVO26B類 (KL03-69:Fig.31-23等)に比べ、若干変化している。BCVO28B類と同類の長胴短頸壺 (Fig.33-6)などもある。釜の口縁、TH01-23 (Fig.33-1)はBC分類のNO46類 (Fig.5参照)に同形態を見ることができ、Fig.33-13、14はBCNO40類と同類である。

Xương Giang (昌江)城

バックザン市西郊のXương Giang (昌江)城は属明期(1407-1427年)の中国・明軍の拠点であり、直前・直後の時期の遺構・遺物もなく時期的限定が行いやすい。出土陶磁器群はFig.33-15～19である。BCNO42類とBCNO49類の釜、BCVA25類、28類の桶などが同類として確認できる。全体的に胡朝城との型式的近接性をみせている。BCVO28B類と同類の長胴短頸壺 (Fig.33-19)もある。

バックック遺跡群ソムベング1,2地点

ソムベング1地点のR1のレベル1から3までの資料とR2の資料、さらに、ソムベング2地点のL3層以上の資料は、施釉陶器資料の下限年代が15世紀である。

バックック遺跡群ソム・ベング1地点 (XBN1)のR1資料の3層から1層まで、R2資料、同じくソム・ベング2地点 (XBN2)の上層部資料(2層、3層)とともに下層部の陳朝期あるいはそれ以前の陶磁器資料と15世紀の資料が混じって出土している。従って、陳朝期以前の資料を差し引けば15世紀の資料が浮かび上がる。具体的には、釜はNO43-47類 (XBN1-398:Fig.4-28, XBN1-424:Fig.4-33, XBN2-112:Fig.5-1、

XBN2-117:Fig.5-13 など) が、下層部と比べて新出型式である。桶は VA26 ~ 28 類 (XBN2-25:Fig.13-1, XBN2-24:Fig.13-2, XBN2-27:Fig.13-4) が、新出の型式である。

瓶 (BI) は当遺溝の下層部や並行時期の各遺跡では全く出土していないので、15 世紀以降 (後黎朝成立以降の可能性あり) の新出器形と理解できる。当遺溝上層部で出土している BI1 ~ 5 類 (XBN2-203:Fig.19-28, XBN1-201:Fig.20-1, XBN1-208:Fig.20-8, XBN2-100:Fig.20-10, XBN2-97:Fig.20-11) が 15 世紀のものだと判断される。

Hội An(ホイアン)沖沈船資料

2000 年に引き揚げられたホイアン沖沈船は輸出向けのヴェトナム陶磁を満載していた。積載品の殆どは青花などの施釉陶器であるが、無釉陶器も若干含まれている (Butterfields 2000)。積載品の年代は、船の沈没年代以上に下がることはなく、出土数に対してヴァリエーション的に限られていることから、無釉陶器自体は容器として使われたと考えられる。長頸瓶、桶、釜が確認される (Fig.34-1 ~ 3)。釜は BC 分類の NO42 類 (Fig.4 参照)、長頸瓶は同じく BC 分類の BI1 類 (Fig.19 参照) に最も近い。この沈船の積載物年代は 15 世紀後半に位置づけるのが妥当であろう (西村・西野 2005)。

Ngói(ゴイ)窯址遺跡

ゴイ窯址遺跡はハイズオン省ビンザン県 Sat(サット)川沿いの窯址群の一つで、15 世紀から 16 世紀にかけての施釉陶器生産遺跡である。1999 年 3 月に当遺跡を試掘した際第 3 地点で、15 世紀前半 (おそらく第 2 四半期) の施釉陶器群 (西村・西野 2005) に無釉陶器 (釜) が 2 点共伴した (Fig.33-20,21)。TS3-L4-1 (Fig.33-20) は BC 分類の NO46、47 類 (Fig.5 参照) に、口縁形態が最も類似する。TS3-L4-2 (Fig.33-20) は BC 分類の NO42 類 (Fig.4 参照) に近く、KL 分類の NO10 (Fig.24 参照) にも近い。

この BC 分類 NO42 類 (Fig.4 参照) と類似型式の时期的位置づけは微妙なので、ここで整理をしておきたい。共伴事例として最も確実性の高い KL 分類では、NO10 類のように口縁先端部内面に若干の段差を生じているものが、年代下限が 14 世紀末である R1、H 5 などから多く出土している。NO11 類 (Fig.24 参照) も口縁先端が尖出しながらも、口縁内面に大きく段差をもつ型式だが、これも H5 で出土している。また口縁

内面に明確な段差はないものの、類似形態とできる NO12 類も R1、H5 に共伴している。

KL 分類の NO10、12 類 (Fig.24 参照) にほぼ対応する BC 分類の 38、40 類 (Fig.4 参照) は XBN1 の R1-4 層以下、あるいは XBN 2 の L4 層で出現しており、これらを 14 世紀に位置づけるのは問題ない。問題は、BC 分類の NO42-44 類 (Fig.4) である。42 類のなかに、XBN1-363:Fig.24-23, XBN1-405:Fig.24-26 などのように、KL 分類の NO11 類に類似した形態が存在する。また、ゴイ出土例の TS3-L4-2 (Fig.33-21) 例は、BC 分類のなかに完全対応する形態は見つけどせ得ないが、敢えて最類似形態とするなら NO42 類となる。これはナムディン省とハイズオン省間の地域的違いにもよるかもしれない。また、前述したように KL 分類の NO10 類と最も近いわけだが、口縁断面形態の先端部外縁や頸部内面などで、違いがあり、全く同型式とも言えない。キムラン・バイナムソン遺跡では 15 世紀の資料が非常にわずかしか出土しておらず、TS3-L4-2 例により近い型式や、15 世紀に位置づけられる BC 分類の NO46 類 (Fig.5) 対応の型式が見られないのも納得ができる。またホイアン沈船でも BC 分類の NO42 類 (Fig.4) 相当、あるいはそれに近いものが出土している (Fig.34-1 Butterfields 2000)。

また、形態的進化の流れとしては、BC 分類 NO40 類から、42 類、さらに 43 類や 44 類、そして、後出するような NO73-75 類 (Fig.7) へといった型式変遷を想定している。

従って、出土状況と形態変化の流れを考え合わせるなら BC 分類の NO40 類、KL 分類の NO10、11 類が 14 世紀後半、BC 分類の 42 類の一部が 14 世紀末、大半が 15 世紀、同じく NO43、44 類が 15 世紀と判断しておきたい。

6.8 15 世紀後半から 16 世紀基準資料

チューダウ窯址資料

チューダウ窯址は 15 世紀から 16 世紀にかけて施釉陶器が生産された遺跡である。2002 年調査時に、第 3 坑の下層部から出土した釜 CD02-H3L3C 例 (Fig.33-22) や CD02H3L4 例 (Fig.33-23) は、共伴施釉陶器から 15 世紀後半以降のものだと判断される。前者は BC 分類の NO44 類 (Fig.4) に最も近い。第 1 号窯から出土した桶 CD02-Lo1 (Fig.33-24) 例も同様である。BC 分類の VA29 類 (Fig.13) に最も類似する。CD02-TS1L2a (Fig.33-25) 例は上層部出土であるため、前出例より

遅れると判断できる。BC分類のVA34類(Fig.13)、KL分類のVA8B類(Fig.29)にも近いが、先端部断面外側の張り出し具合などに差があり、全く同時期とはできないと考えている。

6.9 16世紀基準資料

Chùa Đệ Tú(チュアデートゥー)採集資料

1999年のナムディン市、ミーロック県サーベイの際、Đệ Tú(デートゥー)寺の敷地辺縁で、露頭していた建築遺構より採集した一括遺物(Fig.34-4~6)。16世紀前半の青花陶器に3点の無釉陶器が共伴していた。無釉陶器は砂混じりの釜で、2種類の口縁形態が確認できた。CDT-ST1(Fig.34-7)は、KL分類のNO15B類に類似する。BC分類のNO38にも類似するが、外反度合いなどが異なり、同時期とは判断しない。CDT-ST2(Fig.34-5)はBC分類のNO50類に類似するし、KL分類のNO22類にも近い。

バッコック遺跡群ソムB(XB)地点の最下層部出土資料

ソムB地点の最下層第5層出土施釉陶器は16世紀と若干の14世紀のもので、釜3点、BC分類のNO74-76類(XB-50,63,66;Fig.7-9,8,11)は、形態的にも、ホイアン沈線例につながる口縁形態をもつものと見られ、16世紀のものとして判断される。

ニャーバウ(Nhà Bầu)城表採資料

Tuyên Quang省Tuyên Quang市郊外のAn Khang社Tân Thành村に位置する城郭遺跡で、莫氏政権に抵抗する土豪が1530-1560年代に建設・利用した城跡とされており、表採陶磁器群(Fig.34-7~15)のまとまりも非常によい。BCNO44類BCNO73類の釜、KLVA8B、KLVA8C類、KLVA33類の桶などが確認できる。

BC分類、KL分類には出現しないが、Fig.34-12のような瓶も、特徴的な型式と考えられる。

ズオンキン(Dương Kinh)遺跡出土資料

1527年から1592年にかけて、黎朝より政権を簞奪した莫氏の故地であり、陽京と呼ばれた第2首府的性格の遺跡である。2004年にベトナム歴史博物館により調査された発掘資料に含まれていた無釉陶器類である(Fig.34-16~29)。共伴する施釉陶磁器からも出土陶磁器群が16世紀の中に納まると考えられる非常にまとまりのよい資料である。BCNO73類の釜、KLVA11

類の桶などが確認できる。BC分類、KL分類には出現しないが、Fig.34-24,25のような瓶も、特徴的な型式と考えられる。

6.10 17世紀基準資料

バッコック遺跡群ソムB(XB)地点の下層部出土資料

ソムB地点の下層部出土資料もいくつかの編年基準を提供している。共伴施釉陶器から、第4-4層が17世紀、第4-3層までは17世紀後半から18世紀の文化層と判断され(Nishino et al. 2000, 西村・西野2006)、共伴する無釉陶器の年代下限としてよい。L4-5、4-4層からは釜にはBC分類のNO59類のXB-84(Fig.6-15)、NO60類のXB-86(Fig.6-17)、NO81類のXB-80(Fig.7-20)、XB-69(Fig.7-19)、NO78類のXB-65(Fig.7-13)、NO80類のXB-88(Fig.7-15)、NO90類のXB-5(Fig.8-12)、がある。有頸壺にはVO31類のXB-24(Fig.8-31)、VO33類のXB-18(Fig.8-32)、長頸瓶にはBI7類のXB-17(Fig.20-13)、BI10類のXB-28(Fig.20-16)、球形壺にはBI13類のXB-32(Fig.20-20)、桶VA35類(Fig.13-14)のXB-74が出土している。また、L4-3層からは、NO82類のXB-89(Fig.7-25)、NO66類のXB-126(Fig.6-25)、NO67類のXB-14(Fig.6-26)、有頸壺BI9類のXB-111(Fig.20-15)、球形壺BI12類のXB-53(Fig.20-18)が出土している。

バッコック遺跡群のズオンライチョン(Dương Lai Trong)地点H11土坑出土資料

ズオンライチョン地点の下層部で確認された土坑は、瓦を意図的に配置し、その上に施釉陶器や無釉陶器を意図的に埋置していた遺構である。儀礼・祭祀的行為を行った遺溝と判断している。この中に遺棄された施釉陶磁器群は、16世紀末から17世紀初頭と考えられるもので、無釉陶器には釜BC分類のNO51類(DLT-36,DLT-37;Fig.6-1,2)や桶のVA34類(DLT-2;Fig.13-12)、有頸球形壺BI15類(DLT-25;Fig.23-23)などが含まれている。

キムラン・バイナムズン遺跡

キムラン・バイナムズン遺跡2001年度調査のH1坑と炉(Lo1)の資料は、施釉陶器の年代下限が17世紀後半で、無釉陶器もその年代枠に納まるであろう。それ以前の遺溝から出土している型式のものを除いて、遺溝共伴型式を以下列挙する。

長頸瓶はBI2類(KL01-228;Fig.27-15)、BI3(KL01-

229:Fig.27-16)、桶は VA10 類 (KL01-1:Fig.29-11)、VA11 (KL01-259:Fig.29-12 参照)、釜は NO8 類 (KL01-158:Fig.24-4)、16 類 (KL01-320:Fig.27-15)、19 類 (KL01-160:Fig.27-19)、20 類 (KL01-318:Fig.24-20) などが挙げられる。

ところで、日本ではヴェトナム無釉陶器は大阪、堺、長崎で出土している時間的定点を与える資料となっているが、北部産のものは考古学的脈略での出土例がまだない。

6.11 18 世紀

バッコック遺跡群ズオンライチョン地点住居委床埋納陶器 (YB1 と YB2)

確実な事例として、バッコック遺跡群のズオンライチョン地点 (DLT) の住居床面下 2 カ所出土した、地鎮のための埋納陶器群 (YB1 と YB2) を挙げるができる (西村他 2000)。18 世紀と判断可能な施釉陶器皿と共伴して、VO39 類の無頸壺 DLT-64(Fig.19-7) と有頸壺 VO42 類の DLT-65(Fig.19-10) が出土している。

バッコック遺跡群ソム B(XB) 地点の第 4-2 層から 3 層

ソム B 地点の第 4-2 層から第 3 層までは、共伴施釉陶器から 18 世紀が遺物年代の下限と考えられる。共伴する無釉陶器には、釜には NO70 類の XB-42(Fig.6-29)、NO89 類の XB-48(Fig.8-11)、NO93 類の XB-25(Fig.8-19)、NO95 類の XB-46(Fig.8-24)、NO97 類の XB-47(Fig.8-27)、NO98 類の XB-85(Fig.8-29)、NO107 類の XB-115(Fig.9-15)、NO109 類の XB-122(Fig.9-18)、無頸壺 VO35 類の XB-19(Fig.19-3)、XB-60(Fig.19-2)、VO34 類の XB-26(Fig.19-1)、有頸球形壺 VO32 類の XB-15(Fig.18-31)、有頸壺 VO43 類の XB-16(Fig.19-11) など、球形壺 BI20 類の XB-31(Fig.20-28) がある。

ヴィンフック省 Hương Canh(フオンカイン) 採集資料

ヴィンフック省フオンカインは現在も無釉陶器の生産を行う有名な窯業集落である。1999 年 11 月に当集落を訪れた際、集落南はずれの Cau Lo (カウロー) 川の脇で、以前窯があったと伝えられる古村地点で無釉陶器の灰原を確認し、施釉陶器と、当集落で生産されていたと思われる無釉陶器片 (Fig.35-1 ~ 13) を採集した。施釉陶器は瓦質白化粧碗で、18 世紀のものと判断され、無釉陶器もその年代に近いものであろう。

CDLC-1 (Fig.35-1) は平鉢で、口縁断面は T 字に近い形をしており、内側がやや厚みを持ち、外端は尖出

している。CDLC-3 (Fig.35-3) は平鉢と考えられ、外側に直角に張り出した口縁が特徴である。口縁先端わずかに上方に尖出している。両者とも他遺跡にはまだ類例を見いだしていない。CDLC-2 (Fig.35-2) は釜で、背の高い外湾する口縁を有す。これは BC 分類の NO101 類 (Fig.8-34 参照) が最類似例と考えられる。CDLC-5 (Fig.35-5) も釜で、口縁は外反し、頸部の内側が尖出しているのが特徴である。BC 分類の NO104 類 (Fig.29 参照) が最類似形態例であろう。CDLC-4 (Fig.35-4) は短銅桶で、口縁部が少し外側にめくり返されている。体部に、条痕状回転断続削り文が施文されている。CDLC-12 (Fig.35-12) は、短銅鉢あるいは瓶類の蓋と分類可能なものである。口縁にくびれが生じているのが特徴。口縁形態が、BC 分類の VA36 類 (Fig.13 参照) に類似する。CDLC-6 (Fig.35-6) は、桶で口縁部が、少しすぼまっている。口縁はわずかに厚みを増し、外側に段差が作出されている。体部中央に波状沈線文が施されている。口縁形態は、BC 分類の VA37 類に類似する。CDLC-8 (Fig.35-8) も桶と判断される。口縁は、先端が少し内反し、外側に段差を作るように口縁下端部が張り出しているのが特徴である。口縁部直下に波状沈線が施されている。この沈線文は BI16 類の DLN-139(Fig.20-24) 例とよく類似する。口縁形態は BC 分類の VA35(Fig.13) にやや類似するが同類とまではいえない。CDLC-13 (Fig.35-13) も桶である。口縁形態は、BC 分類の VA36 類 (Fig.13) に類似する。CDLC-7 (Fig.35-7) は、瓶の頸部である。頸部の内側に成形時 (おそらく接合か粘土紐の貼りつけ) の張り出しが残されているのが特徴である。櫛歯状工具による波状沈線と並行沈線が施されている。BC 分類の BI16 類の DLN-139(Fig.20-24) 例と文様が類似する。CDLC-9 (Fig.35-9) は瓶の頸部と考えられる。口縁部が少し外反している。条痕状回転断続削り文が体部下半に施されている。CDLC-10 (Fig.35-10) は、長頸壺で、口縁が丸く外反し、やや長めの頸部を有している。頸部直下に櫛歯状工具による並行沈線が施されている。CDLC-11 (Fig.35-11) は、蓋であるが、つまみ部が欠損している。

バッコック遺跡群ソム C サンカオ (Xóm C Sân Cao) 地点下層遺物群

1997 年発掘のソム C サンカオ地点 (西村他 1998) では、施釉陶器には 16 世紀末の印花碗、18 世紀の中国青花碗、17-18 世紀のヴェトナム淡色透明釉碗など

が共伴しており、堆積の最終年代が18世紀と考えられる。注目すべきは最下層部(L22-23)で、長頸壺BI18類のXC-4(Fig.40-26)、BI17類のXC-3(Fig.20-25)、桶VA37類のXC-1(Fig.13-16)、XC-2(Fig.13-17)、釜NO70類のXC-36、XC-35、XC-58、XC-59、XC-80(Fig.6,27)、高坏など9点が、ほぼ完形あるいは大きな破片として、集中出土している。これらは、当地を埋め立てる際に、非常に短期間に廃棄されたもので、一括性が高い遺物と考える。

また層位的にはL23-L22、L21-L20、L19-L15という3層に分層可能であるが、各層中の施釉陶器の年代分布は16世紀から18世紀までで、各層間の違いを示すには至っておらず、L23からL15までは、18世紀の盛り土層としてまとめて判断される。従って無釉陶器も18世紀を年代下限として、16から17世紀のものを含む可能性があるものとして考慮しなくてはならない。盛り土層からは、釜NO81類のXC-10(Fig.7-18)、NO82類のXC-8(Fig.7-24)、NO84類のXC-78(Fig.7-31)など、NO85類のXC-77(Fig.8-1)、NO91類のXC-49(Fig.8-14)、NO92類のXC-50(Fig.8-17)、NO94類のXC-43(Fig.8-21)など、NO100類のXC-53(Fig.8-33)、桶VA36類のXC-5(Fig.13-15)が出土している。桶VA36類はフオンカイン採集資料にもある。このうち、NO81、82類(Fig.7)は、XBの17世紀相当層位からも出土しているので、それら以外を18世紀の可能性のあるものと判断しておく。

6.12 19世紀と20世紀基準資料

研究の未発展

紀元2000年紀の編年の時期比定において、もっとも細別が難しい時期である。

その理由は19世紀と20世紀の分別のための、時間軸上の基準資料が伴うまとまりある遺物群が少ないことである。そもそも当該期の施釉陶器の編年認識がきちんとできあがってないことも、大きくこの問題に影響している。従ってバッコック遺跡群出土資料から、前後の18世紀と近年20世紀末の現代の資料を差し引いた残りから編年を組み立てなくてはいけないのが現状である。

バッコック遺跡群ズオンライゴアイ地点住居基礎内遺物群

バッコック遺跡群ズオンライゴアイ地点(DLN)の上層部で確認された建築基礎(DLN-TMN)である。

当遺溝を建設時に、砂利代わりに混入されていた陶磁器群は、20世紀前半かそれ以前の資料を含むと判断される(西村他1998)。ただし、注意する必要があるのは、砂利代わりに集められたものであるから、14世紀の施釉碗が共伴していることからわかるように、かなり幅の広い時間幅を有していることである。釜にはNO71類のDLN-133(Fig.7-4)、NO83類のDLN-134(Fig.7-28)、NO97類のDLN-135(Fig.8-28)、NO102類のDLN-131(Fig.9-1)、DLN-115(Fig.9-5)、NO105類のDLN-132(Fig.9-1)が出土している。

無頸壺にはVO40類のDLN-130(Fig.19-8)、VO44類のDLN-127(Fig.19-12)、VO45類のDLN-129(Fig.19-13)、VO47類のDLN-137(Fig.19-15)、VO48類のDLN-122(Fig.19-16)、VO51類のDLN-136(Fig.19-19)、有頸壺にはVO52類のDLN-145(Fig.19-20)、VO53類のDLN-125(Fig.19-21)、長頸瓶BI23類のDLN-138(Fig.20-32)、BI24類のDLN-117(Fig.20-33)、球形壺BI16類のDLN-139(Fig.40-24)がある。桶にはVA41類のDLN-141(Fig.13-23)がある。BI24類は胎質や形態の特性がその他の無釉陶器類と全く異なり、中国製と考える。

NO97類のDLN-135(Fig.8-28)は、前述のXB18世紀相当層位で出土しているので除外する。

バッコック遺跡群フーコック地点1-2層出土遺物群

フーコック地点(PC)の上層部で確認された盛り土層(L1,CG1-4)に廃棄されていた陶磁器群である。聞き取りにより、1954年以前に住んでいた人の生活に使用されたものが、短期間に廃棄された結果と考えられことから、前述のズオンライゴアイ地点住居基礎内遺物群より、時間的にまとまりがよい。また、釜、無頸壺、桶といった普遍的器種以外に、臼、甌、水注のついた球形瓶など、新出の器種も多い。

釜にはNO102類のPC-1、PC-4、PC-37、PC-36(Fig.8,9)、NO105類のPC-34、PC-13、PC-38(Fig.8)、NO71類のPC-39(Fig.7-5)、NO72類のPC-77(Fig.7-6)がある。無頸壺にはVO37類のPC-22(Fig.19-5)、VO46類のPC-20(Fig.19-14)、VO49類のPC-23(Fig.19-17)、VO50類のPC-116(Fig.19-18)、VO54類のPC-21(Fig.19-22)がある。桶にはVA40類のPC-78(Fig.13-21)、VA41類のPC-76(Fig.13-22)、VA38類のPC-75(Fig.13-19)がある。このうちNO71類、NO102類、NO105類、VA41類はズオンライゴアイ地点住居基礎内遺物群からも出土している。

6.13 20 世紀末の製品との比較

フーコック地点 1-2 層出土遺物群やズオンライゴアイ地点住居基礎内遺物群を中心とするバックコックの出土遺物には、北部ヴェトナムの 20 世紀末時点で生産されていたものと形態的に近く、後者は前者を継承していると思われるものを挙げる事ができる。バックニン省フーラン生産品（西野 2005、西野私信）に形態的に近いものに有頸壺 VO53 類 (Fig.19)、鉢 CH33 類 (Fig.16)、釜 NO105 類 (Fig.19) があり、またフーラン製品の桶の口縁形態は VO44、46 類 (Fig.19) に近い。同じくバックニン省のトーハー窯（1984 年まで生産）に類似するものとして、桶 VA41 類 (Fig.13)、ゲアン省生産品に類似する釜 NO71 類などがある (Fig.7)。

7. 編年案

各層・遺溝での型式別出土を表したのが、Table 1-7 である。●は、バックコックとキムランの場合、その型式の出土を表しており、その他の遺跡例はバックコックとキムラン分類に最も近い型式である。○はその層・遺溝で出土しているが、それ以前の層・遺溝で出土していたり、型式の変遷から明らかに遺構形成期以前の時期と考えられるものである。▲は、類似するものの、相違点もある程度認められるものである。

この出土関係表と型式の変遷を鑑みて作成したのが Fig.54 ~ 59 の編年案である。

ただし、これらの編年案は厳密には、それぞれの器種単位の細かな変遷をたどれるようなものには至っていない場合も多い。なぜなら、各器種の時間単位（細かければ 1 世紀を 3 区分、粗ければ 1 世紀単位）において、そこに同定可能な器種羅列を基礎に、そこから形態変化の流れ上矛盾なきものを補完的に埋めたものであり、器種や時間単位によっては、まだまだ前後関係を考証できる資料が不足している場合が多いからである。

8. 新認識

8.1 釜

釜はその多くの外面などにすすが付着しており、炊飯などの煮炊きの主要器種であったと考えられる。口縁を中心とした細部での時間軸上の変化は、今回の編年作業である程度明らかにできたが、その編年を通じて理解できることは、口縁が外反し、胴部が丸みを帯

びつつ膨らむ基本形は変化していない。このことは、紀元前 2000 年紀のみならず先史時代（後期新石器時代あるいは金属器時代以降）から、20 世紀までを通じて指摘できることである。

縄蓆文釜は先史時代から連綿と続いてきた長い伝統の器種であるが、それも 14 世紀までには途絶えるようだ。これは単に縄蓆文で地紋を装飾する伝統が途絶えるばかりではなく、叩き成形の土器・陶器製作伝統が途絶えることを意味しているようだ。

また、16 世紀ころから、口径部幅が胴部幅に対して相対的に小さく、背の低い薄手で土器質の釜が出現する。これは現在までに続いている器種で、無釉硬質陶 (Sanh) の伝統とはまた違ったもので、現在のティンホアやゲアン省の製作事例から理解するなら、別所で製作された全く異なる土器製作伝統と考えて良い。器形的違いも明らかであることから、機能も違うと考えられる。

8.2 桶

桶形容器は四耳壺や六耳壺から変形して、13 世紀にはその寸胴器形が成立し、現在まで続いている器形である。

また、壺の器形変化と桶の出現がおきる 13 世紀とそれ以前においては、器面の処理方法が異なっている。その一つは条痕状回転断続削り文の出現である。当方法はヴィンフック省フオンカイン窯において筆者が実見した方法だが、竹などの空芯の材料の一長辺をそぎ落とし、鋭い刃部を作出する。そして、対象とする器体をろくろに載せて、回転させながら、施文具の筒状工具を回転しているものの器面を削るようにあてる。従って、器体の表面がわずかに波打つような縦方向の文様が連続して施されることになる。この方法自体ろくろの回転を利用しないと実現できない方法だが、これ以外にも、12 世紀から 13 世紀にかけて、多くの実例において、器体の表裏面の仕上げ程度が異なっていることが指摘できる。つまり 12 世紀までのものは、粘土ひもの積み上げ痕を明らかに残すものが多く、表裏面の仕上げも、凹凸が多く、平らではない。それが、13 世紀以降はほとんど観察されなくなるのである。これもろくろ回転を利用した成形・調整法が 13 世紀以降定着したことによるものだろう。特に、器形全体をろくろ成形（水引き整形）で行っている可能性が高く、それ以前の段階とは大きな技術的違いである。

8.3 壺

11-12 世紀に位置づけた長胴の四耳壺類が、機能退化した耳部がなくなり、独立した頸部をもち、さらに膨らみのある胴部をもつようになるのが 13 世紀と考えられる。これは前述した四耳壺が桶に器形変化する過程と並行しておきた現象であろう。つまり、12 世紀から 13 世紀にかけて器種分化が生じている。また、壺の器形変化にあたっては、前述したように、ろくろ成形の汎用が大きく影響していると判断される。

17 世紀あるいは 18 世紀までには、頸部に若干のくびれを残し、胴部が膨らんだ無頸壺が出現する。この器種には、器高が高いものと相対的に低いものがあるようで、前者は大型で甕ともよべるものである。また、頸部が高く、かつくびれた長頸壺も 17 世紀までには出現している。17 世紀あたりに再び、器種分化あるいは器種の増加があったことが読みとれる。これは施釉陶器が 17 世紀頃に、輸入品に押されて低品質化し、単純化していく現象（西村・西野 2005）と表裏一体の現象かもしれない。

8.4 長頸瓶

壺の頸部が長大化して、器形全体が細長になり、長頸瓶化するのが 15 世紀である。当分類案では 18 世紀まで存在し、さらに、器種は頸部と胴部の境が不明瞭になりつつも、フオンカインなどで、生産が続いていた可能性がある。

8.5 鉢

鉢も口縁の変化が著しいが、口径部が開放的で、下方に向かって器体がすぼまる基本形態は変わっていない。明確な時期比定は難しいが、15 世紀には消滅し、19-20 世紀に再び出現した可能性が高い。これは 15 世紀以降、施釉陶器の鉢が活発に生産され、やがて Phù Lãng（フーラン）製などの安価な施釉鉢が市場に普及し、無釉陶器の鉢への需要が無くなったことなどを意味しているようだ。ただし 18 世紀と考えられるフオンカイン窯一括採集品には鉢が含まれており、フーラン製品が出回らないところで、無釉陶器製のものが作り続けられた可能性もある。

8.6 生産構造

施釉陶器の編年議論で李朝とそれ以前では、大きく異なることを述べたが（西村・西野 2006）、無釉陶器に関しては、器形上の変化は認められるものの、製作

技術面においては、それほど大きな格差はない。また、陳朝から胡朝・黎朝にかけての施釉陶器の製作技術変化にも大きなものがあるが、無釉陶器に関しては、器面調整が丁寧となり、輪積み痕などが丁寧に消され、条痕状断続削り文（いわゆる縄簾）が施されることが、李朝期から陳朝期にかけて大きな変化となる可能性がある以外、文種の減少等はあるものの、製作技術には大きな変化はない。

このことは施釉陶器と無釉陶器が別所・別体系のもとで生産されたことを傍証するものだろう。王朝権力が生産に大きく関与していることがあった施釉陶器の場合と違い、無釉陶器は日常の生活品として、権力の関与に関係なく、各地で生産されたことを意味している。

さらに、施釉陶器が単純化し、無釉陶器が器種増加する 17 世紀あるいはそれ以降というものは、ヴェトナム陶磁のみで考えれば、低品質、低価格の陶磁器生産に力を注ぐようになったと考えられる。経済の内旋的状況を想定しやすいが、輸入品である中国陶磁や日本陶磁を高級品として捉えれば、輸入品を上質品とした陶磁器の品質が階層化し、器種分化や製品の多様化も進んだとも考えられよう。さすれば、そこに経済生活の発展や多様化を見いだすことも可能になる。

8.7 金属器との関係

釜にはある時期から明らかに金属器が出現しているはずだ。なぜなら現在伝世する 100-200 年程度前の青銅器資料には腹部が丸まった、あるいは折腹形のややぐんぐりした釜が見られる。本分類体系でも NO65、66、67、70、71 類などにその類似形を見ることができる。ただし、この問題は今後具体的比較を通じての言明を目指したい。また、釜以外には具体的金属器例と比較できる資料が見あたらないのも書きとめておきたい。

参考文献

- JSEAA *Journal of the Southeast Asian Archaeology*, Tokyo
 KCH *Khảo cổ học*, Hà Nội
 NPH *năm Những phát hiện mới về khảo cổ học Việt Nam năm...*, Hà Nội
 Bùi Minh Trí 2003 *Về niên đại và chủ thể nhân những ngôi mộ đất ở di chỉ chùa Gio (Hà Tây)*. NPH 2002: 475-477.
 Butterfields 2000 *Treasures from the Hoi An hoard*. 2 vols. Butterfields. JSEAA No:22:81-106. 2003
 Nguyễn Quốc Hội, Nguyễn Xuân Nam và Trần Đăng Ngọc 1996 *Đào*

- thám sát bãi Hạ Lan, xã Lộc Vương, ngoại thành Nam Định. *NPH* 1995: 415-416.
- Nishimura Masanari and Nishino Noriko 2003 Chronological sequence for late 14th to Early 15th century Vietnamese ceramics from Bãi Hàm Rồng, Kim Lan and Hồ Citadel. *JSEAA* No. 23: 145- 163.
- Nishimura Masanari and Bùi Minh Trí 2004 Excavation of Duong Xa kiln site, Bac Ninh Province, Vietnam. *JSEAA* No. 24: 91- 131.
- Nishimura Masanari and Phạm Minh Huyền 1998 Những tư liệu khảo cổ mới sau văn hóa Đông Sơn tại huyện Thuận Thành và Gia Lương, tỉnh Bắc Ninh. *NPH* 1997: 637- 641.
- Nishino Noriko và Nishimura Masanari 2001 Niên đại, kỹ thuật và vai trò gốm sứ ở di chỉ Cồn Chè, Cồn Thịnh, huyện Mỹ Lộc, tỉnh Nam Định. *NPH* 2000: 552- 558.
- Tống Trung Tín, Trần Anh Dũng, Lê Thị Liên và Bùi Xuân Quang 1999 Kết quả thám sát và khai quật di tích cổ đô Hoa Lư (Ninh Bình) năm 1998. *KCH* số 2: 44- 61.
- Trịnh H.H. 2009 *Báo cáo kết quả khai quật khảo cổ học nam địa điểm Đền Cao Tú 1 Đền Cao Tú 2, thôn Cao Từ, xã Phượng Sơn, huyện Lục Ngạn, tỉnh Bắc Giang.*
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1998『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (1)』東京大学埋蔵文化財調査室
- 西野範子 2001『陳朝期ナムディン省出土碗皿の製作技法による分類』2000 年度金沢大学大学院提出修士論文
- 西野範子 2005「フーラン村における窯業の生産・流通システムの変遷 -1930 年代から 2003 年まで-」『ベトナムの社会と文化』第 5 号 :3-53
- 西野範子, チンホアンヒエップ. 2006. 「Xóm B 地点の試掘概報」『百穀社通信』12 : 43-47. ベトナム村落研究会.
- 西野範子・西村昌也 2008「ヴェトナム・ナムディン省コンティン・コンチエー遺跡の位置づけ」『東南アジア考古学』28 号 :87-97.
- 西村昌也 2006「Phu Coc 地点の試掘概報、ならびにバッコックと周辺の居住史に関する覚え書き」『百穀社通信』第 12 号 :30-41
- 西村昌也 2011『ベトナムの考古・古代学』同成社
- 西村昌也・西野範子 2005「ヴェトナム施釉陶器の技術・形態的視点からの分類と編年 -10 世紀から 20 世紀の碗皿資料を中心として」『上智アジア学』第 23 号 :81-122
- 西村昌也、西野範子、平野裕子、チン・ホアン・ヒエップ、向井互 2000「1998 年度と 1999 年度の夏期考古学調査の概報」『百穀社通信』第 10 号 :95-145、
- 山本信夫 2000『太宰府条坊跡 XV- 陶磁器分類編 -』太宰府市教育委員会

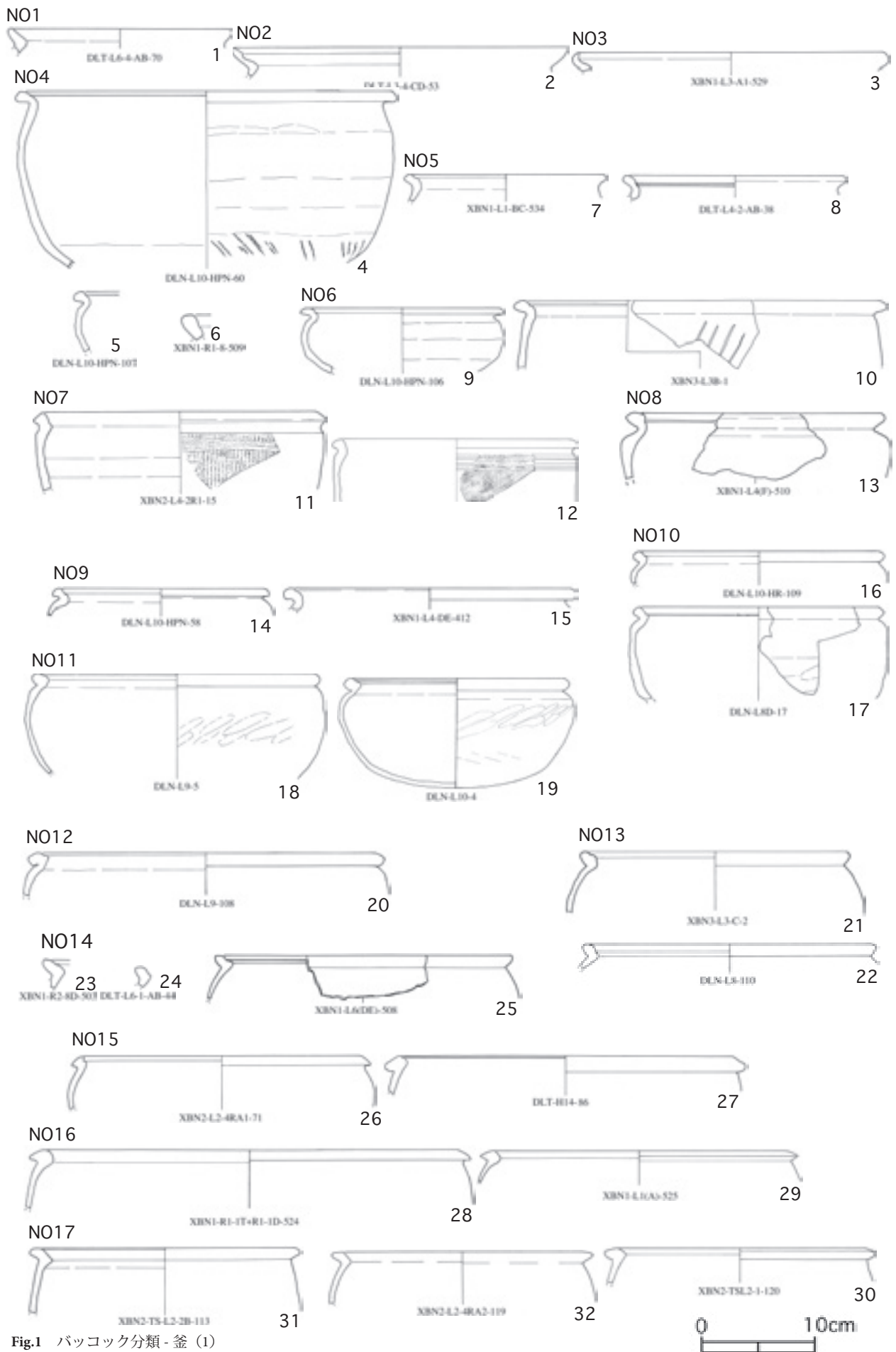


Fig.1 バッコク分類 - 釜 (1)

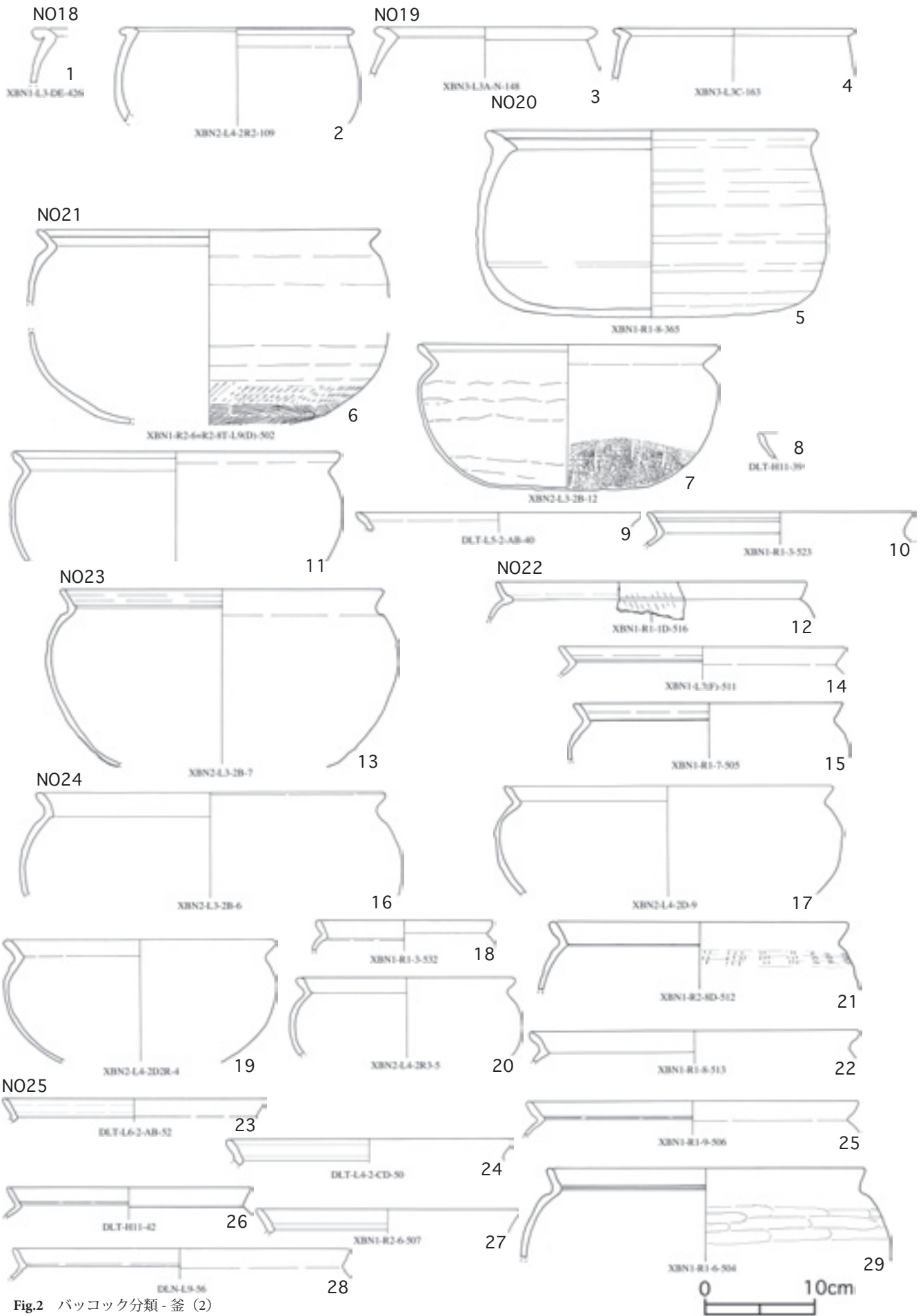


Fig.2 バッコック分類 - 釜 (2)

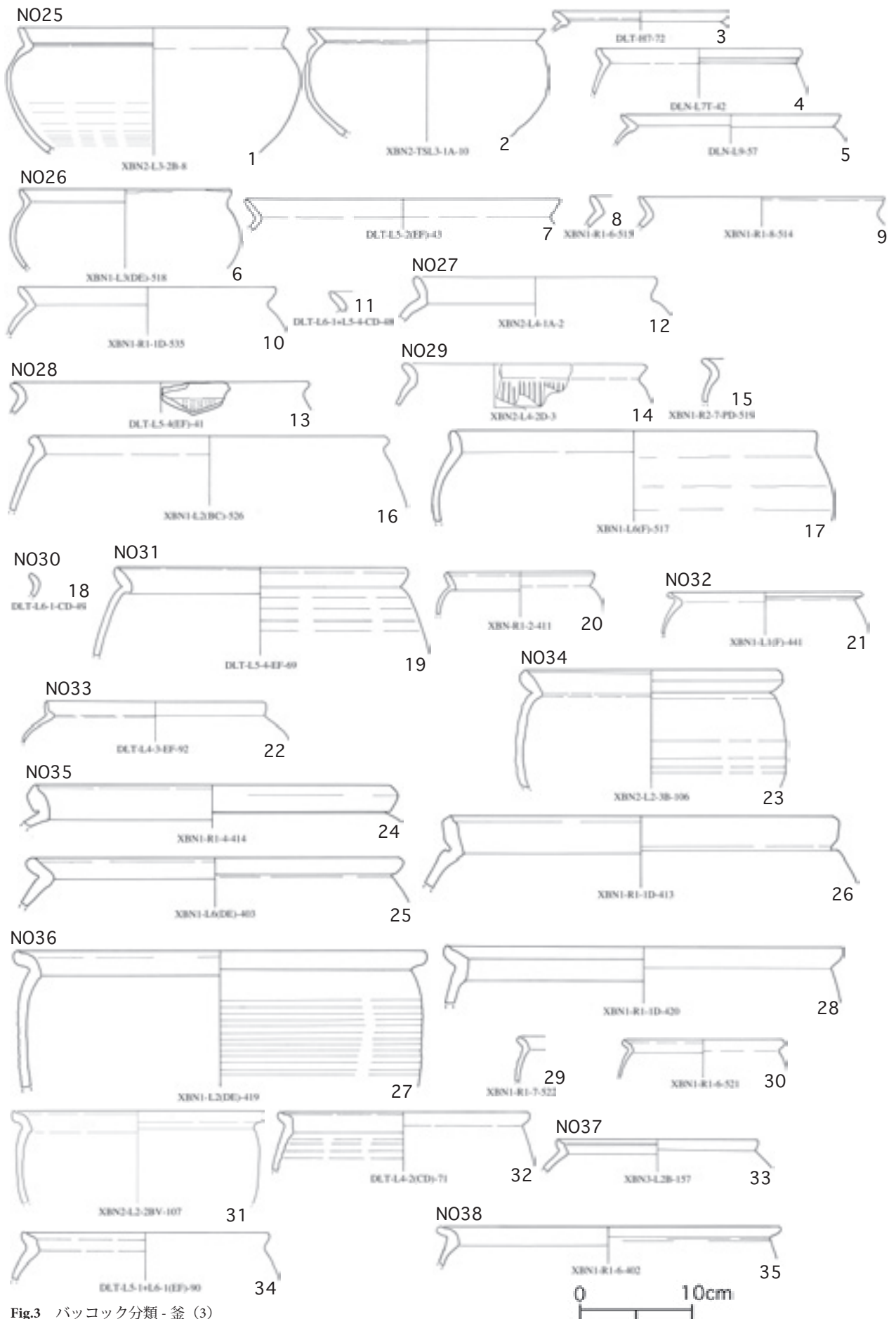


Fig.3 バッコク分類 - 釜 (3)

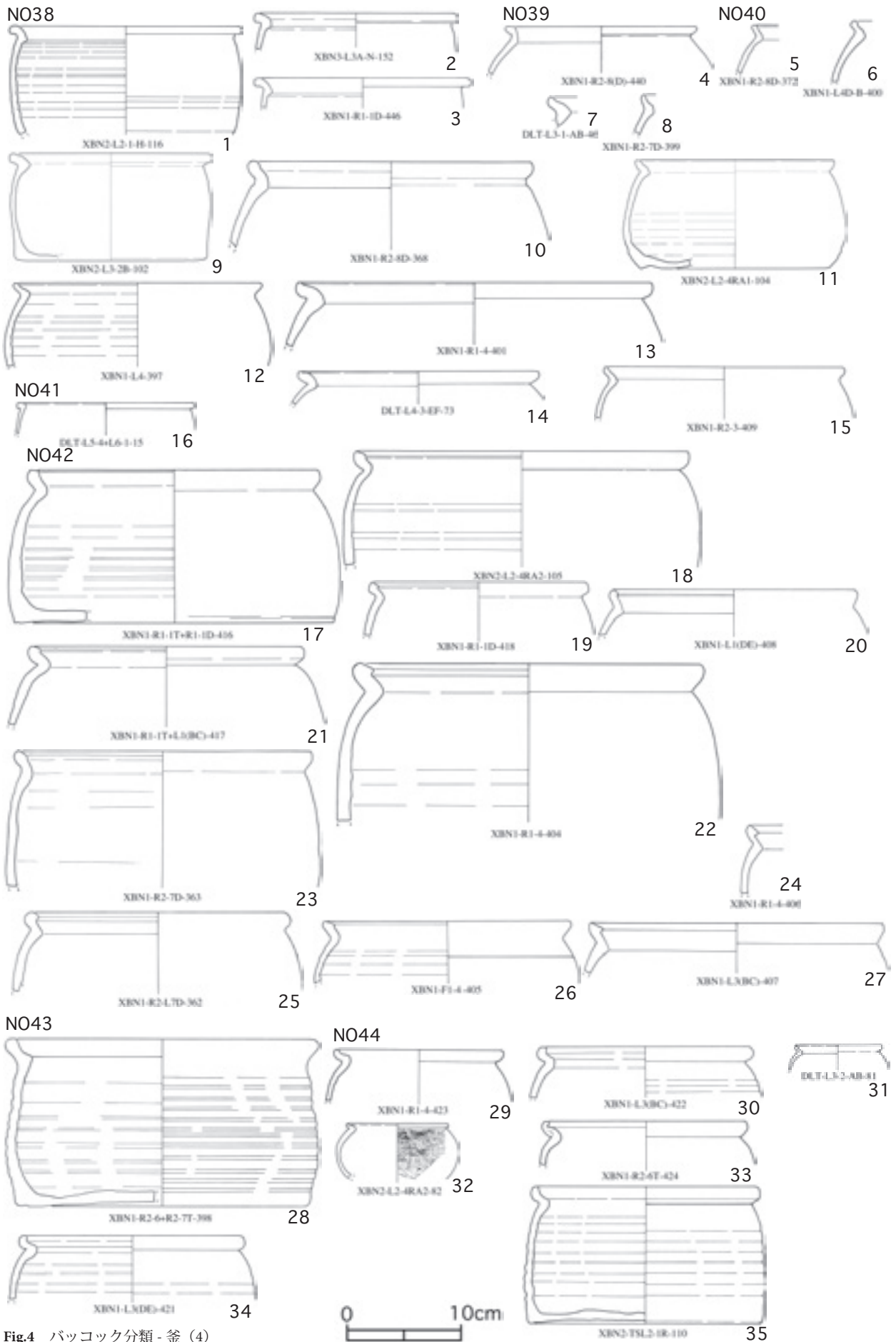


Fig.4 バッコク分類-釜 (4)

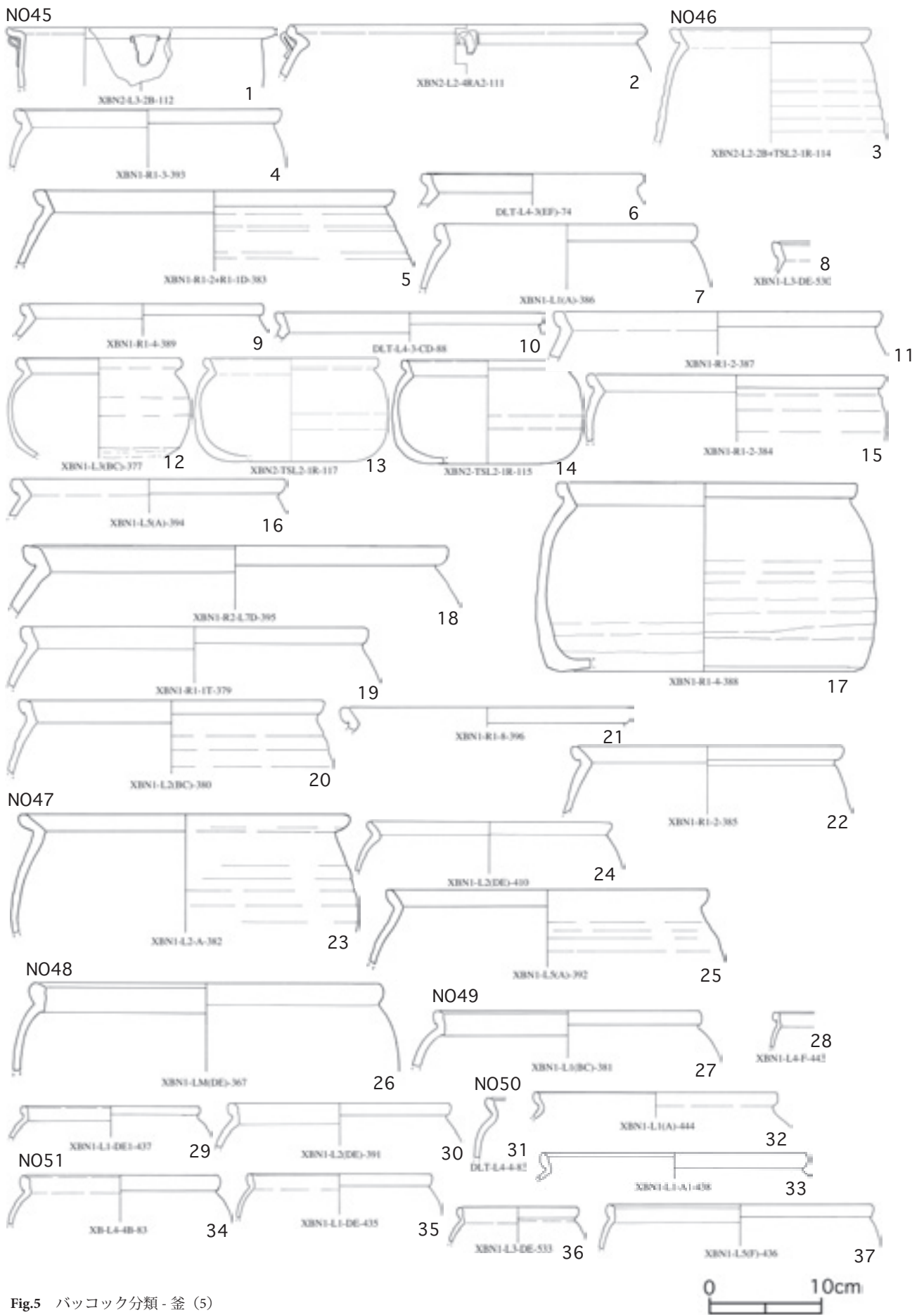


Fig.5 バッコック分類 - 釜 (5)

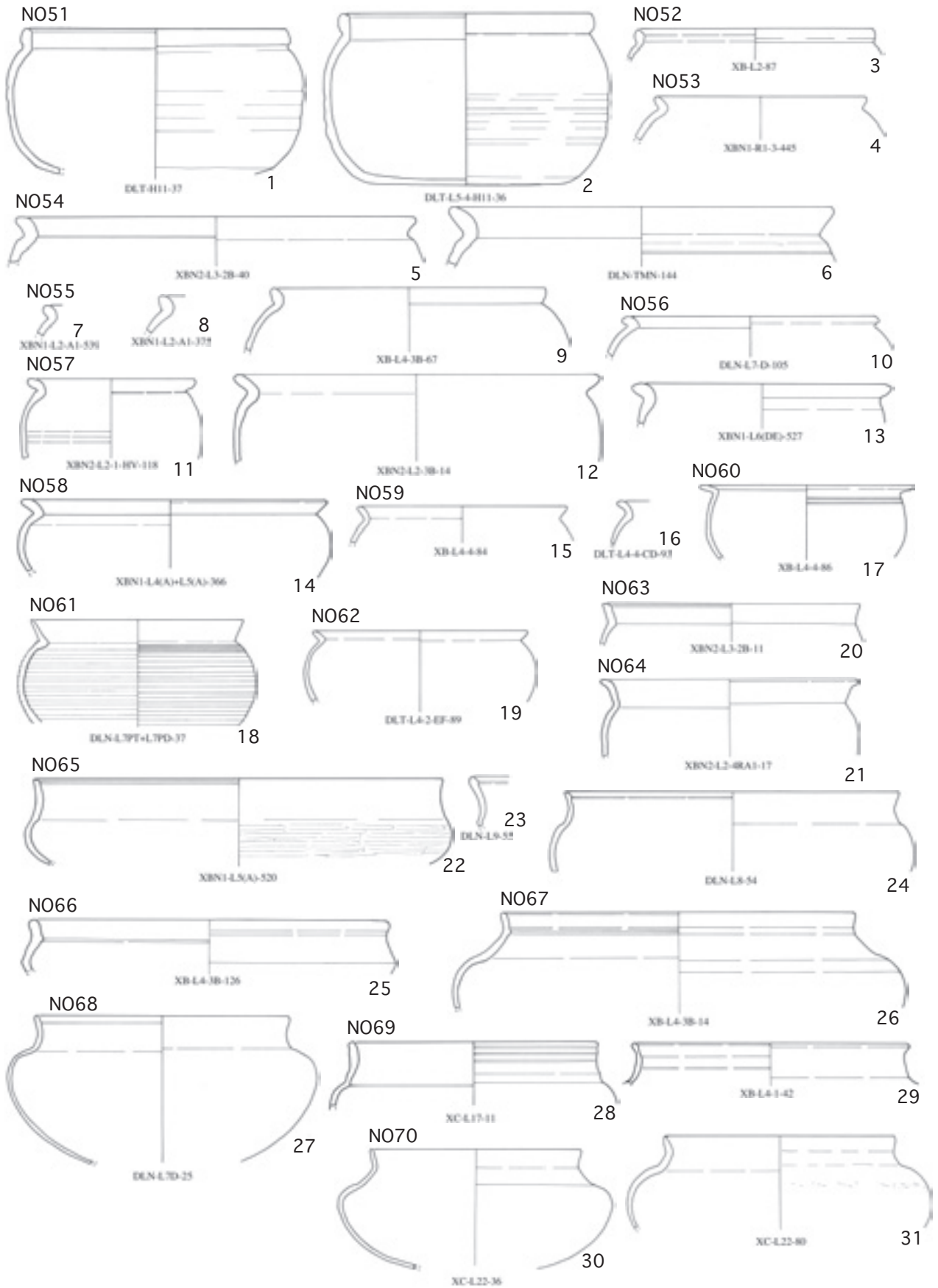
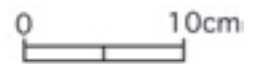


Fig.6 バッコック分類 - 釜 (6)



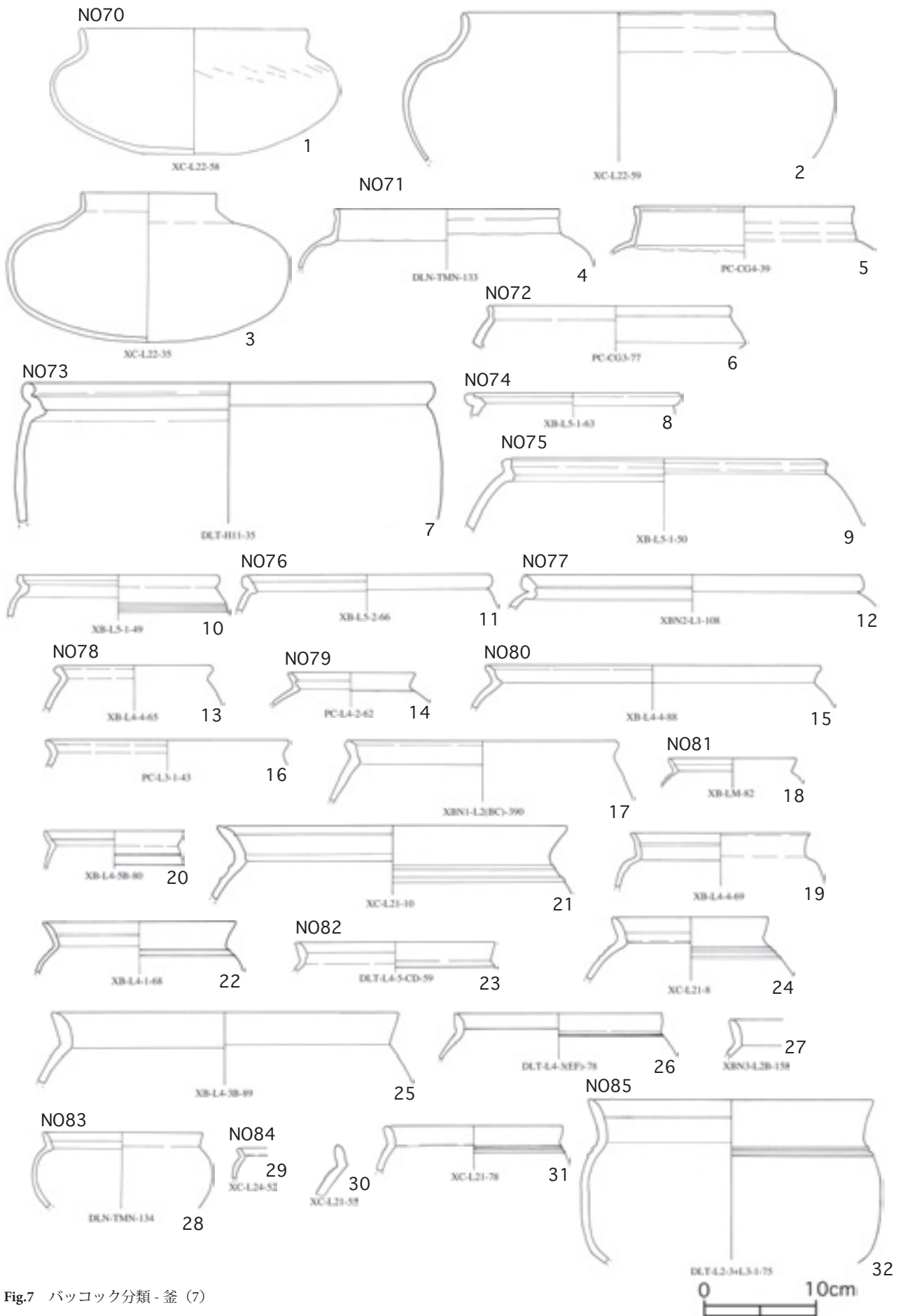


Fig.7 バッコク分類-釜 (7)

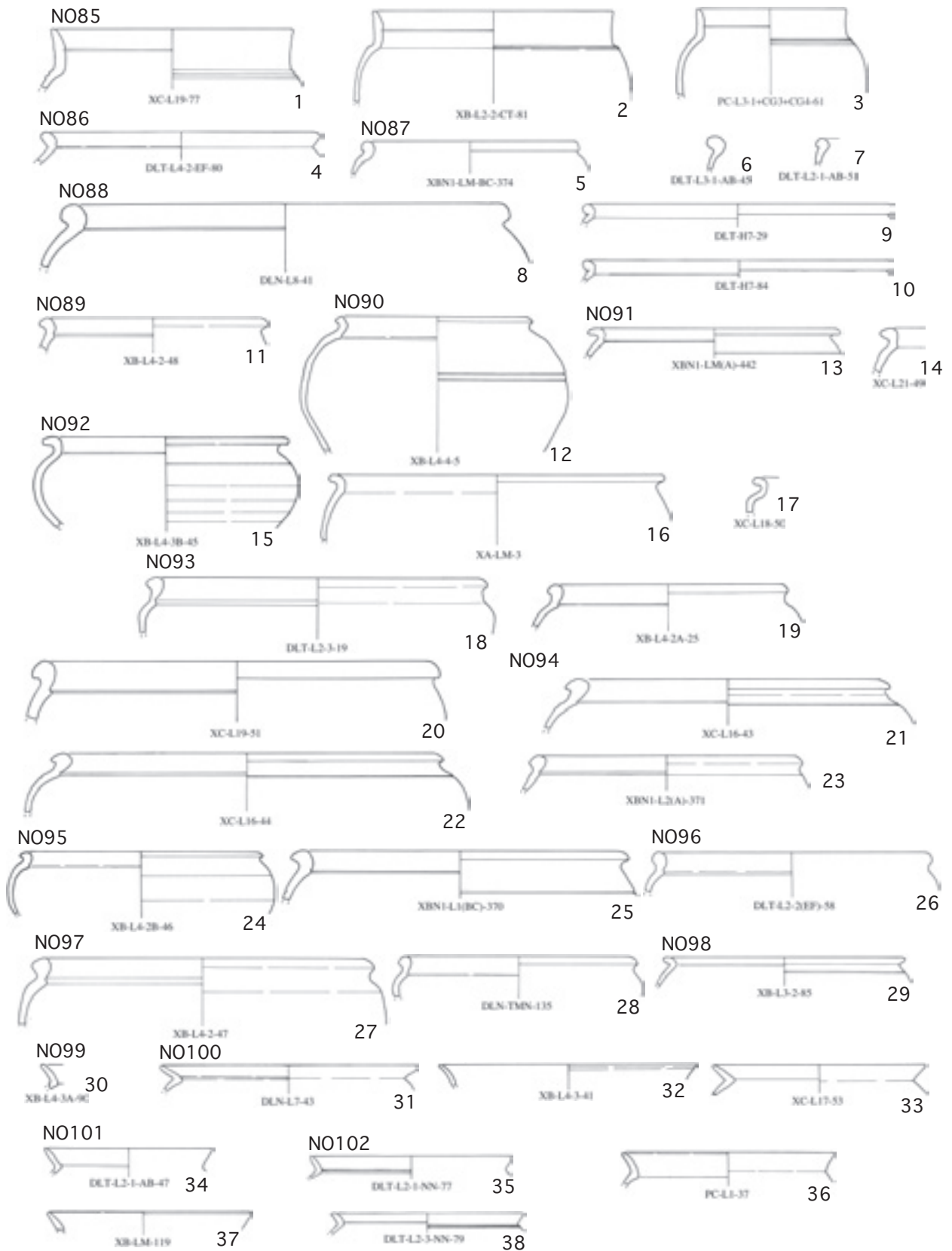
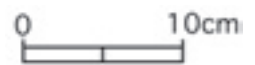


Fig.8 バッコック分類-釜 (8)



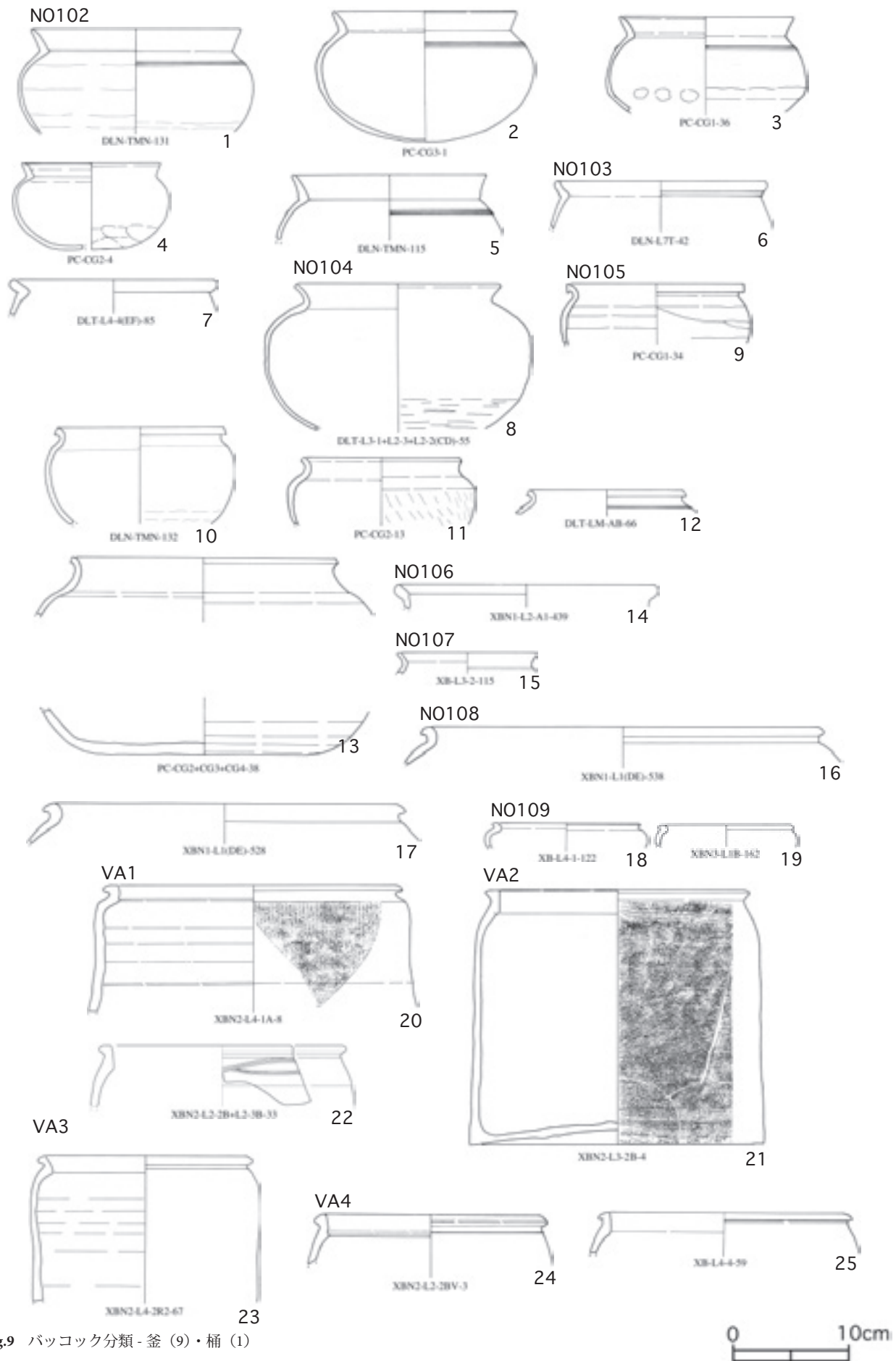


Fig.9 バッコック分類 - 釜 (9)・桶 (1)

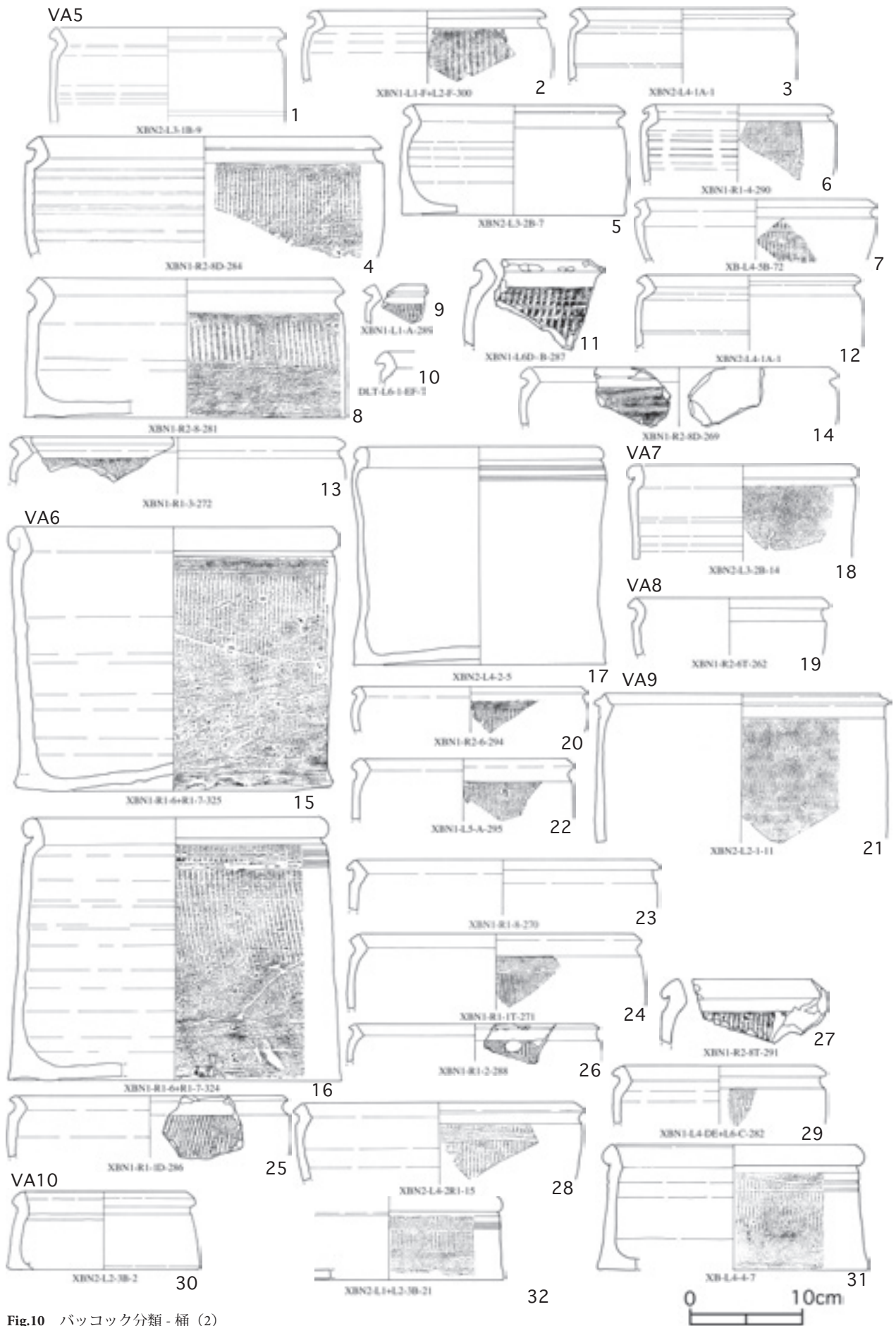


Fig.10 バッコク分類 - 桶 (2)

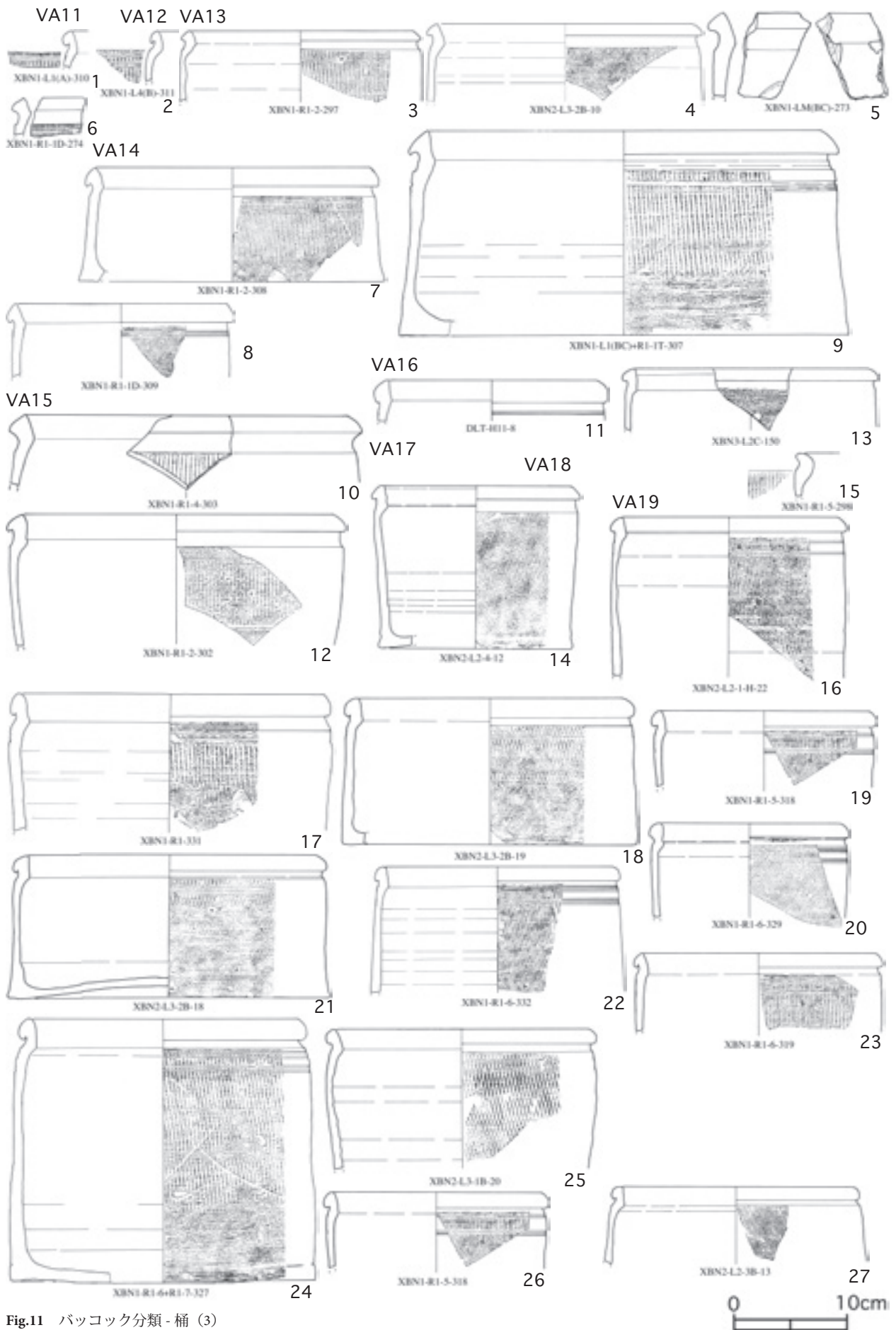


Fig.11 バッコク分類 - 桶 (3)

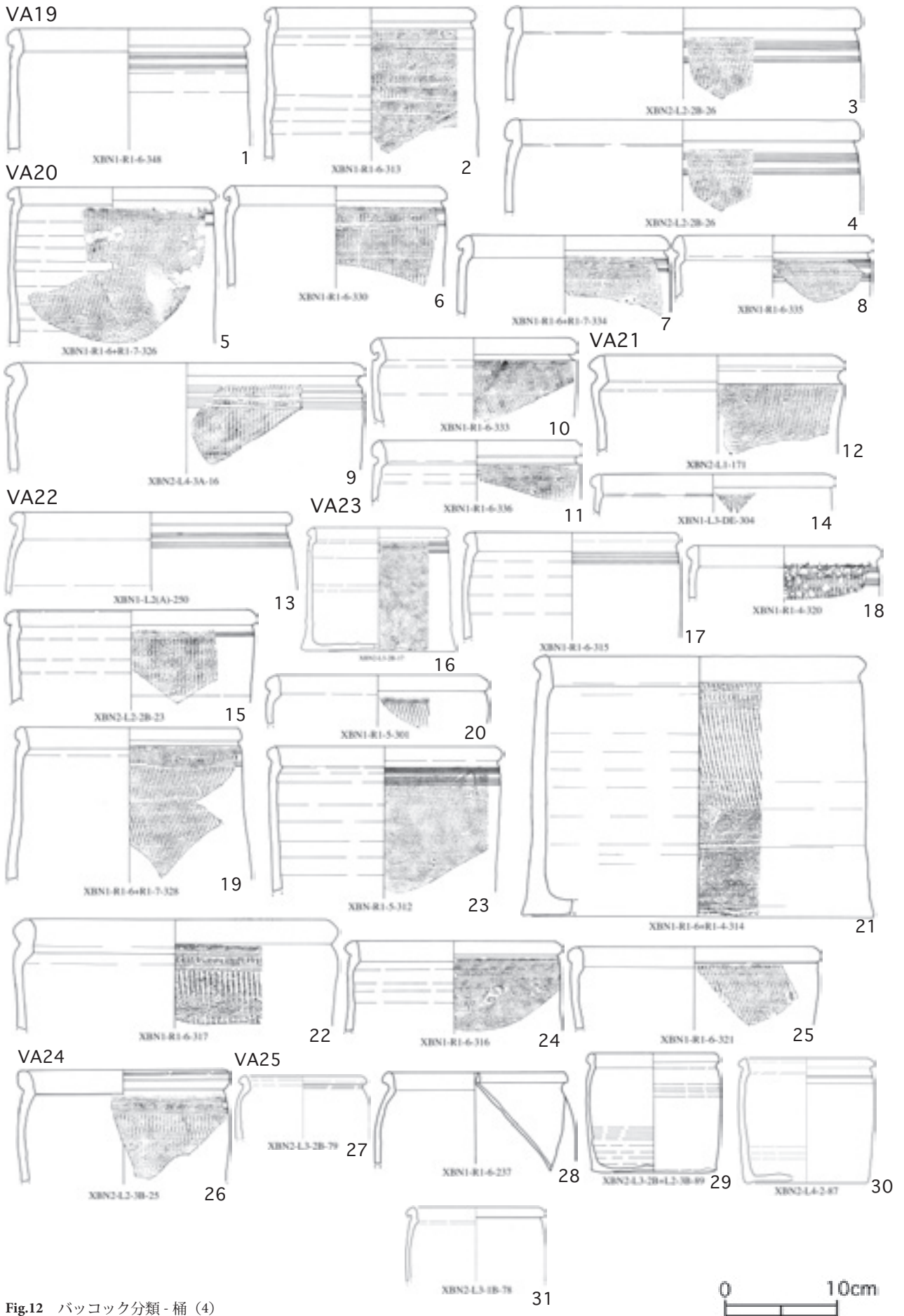


Fig.12 バッコック分類 - 桶 (4)

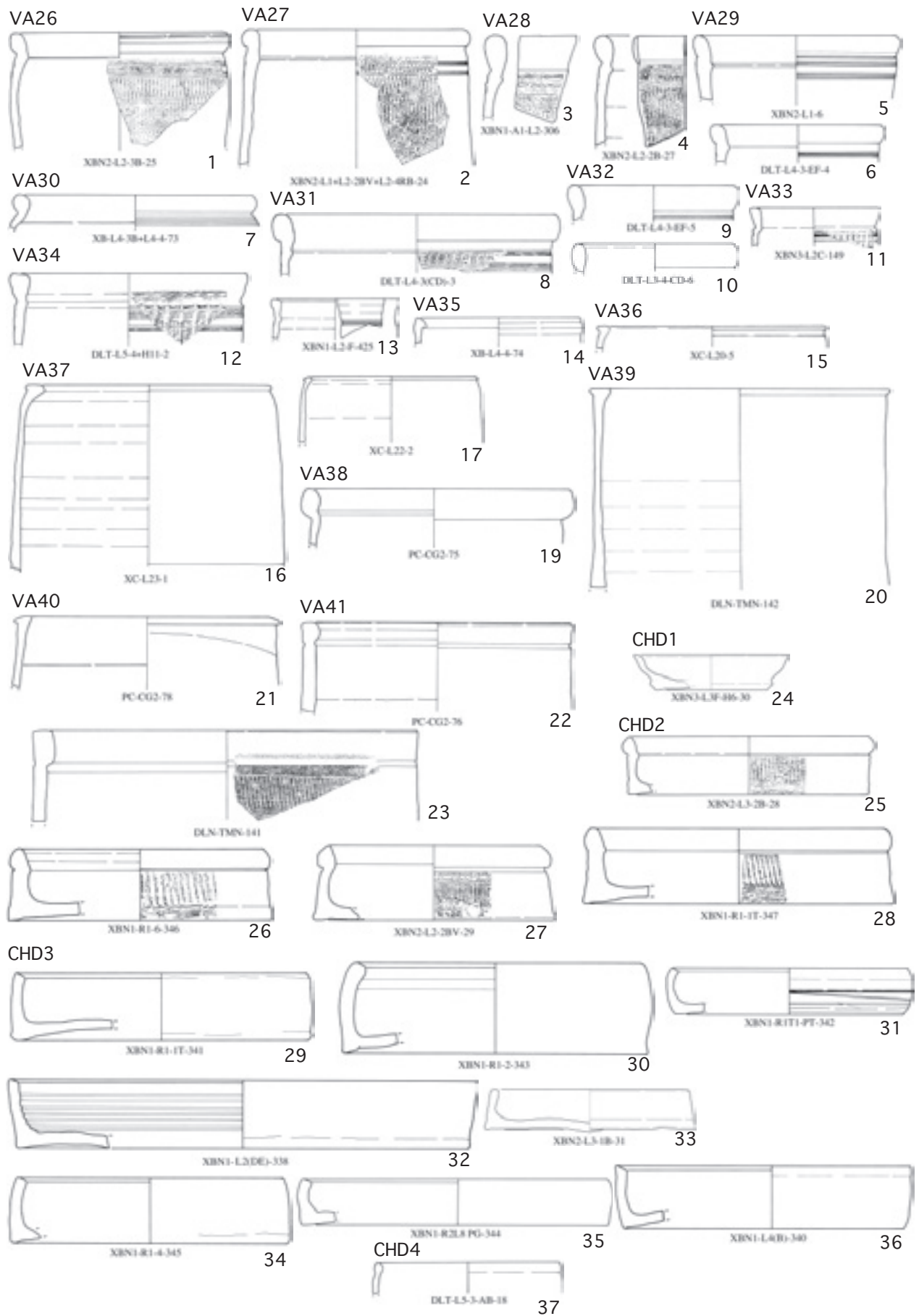


Fig.13 バッコック分類 - 桶 (5)・平鉢

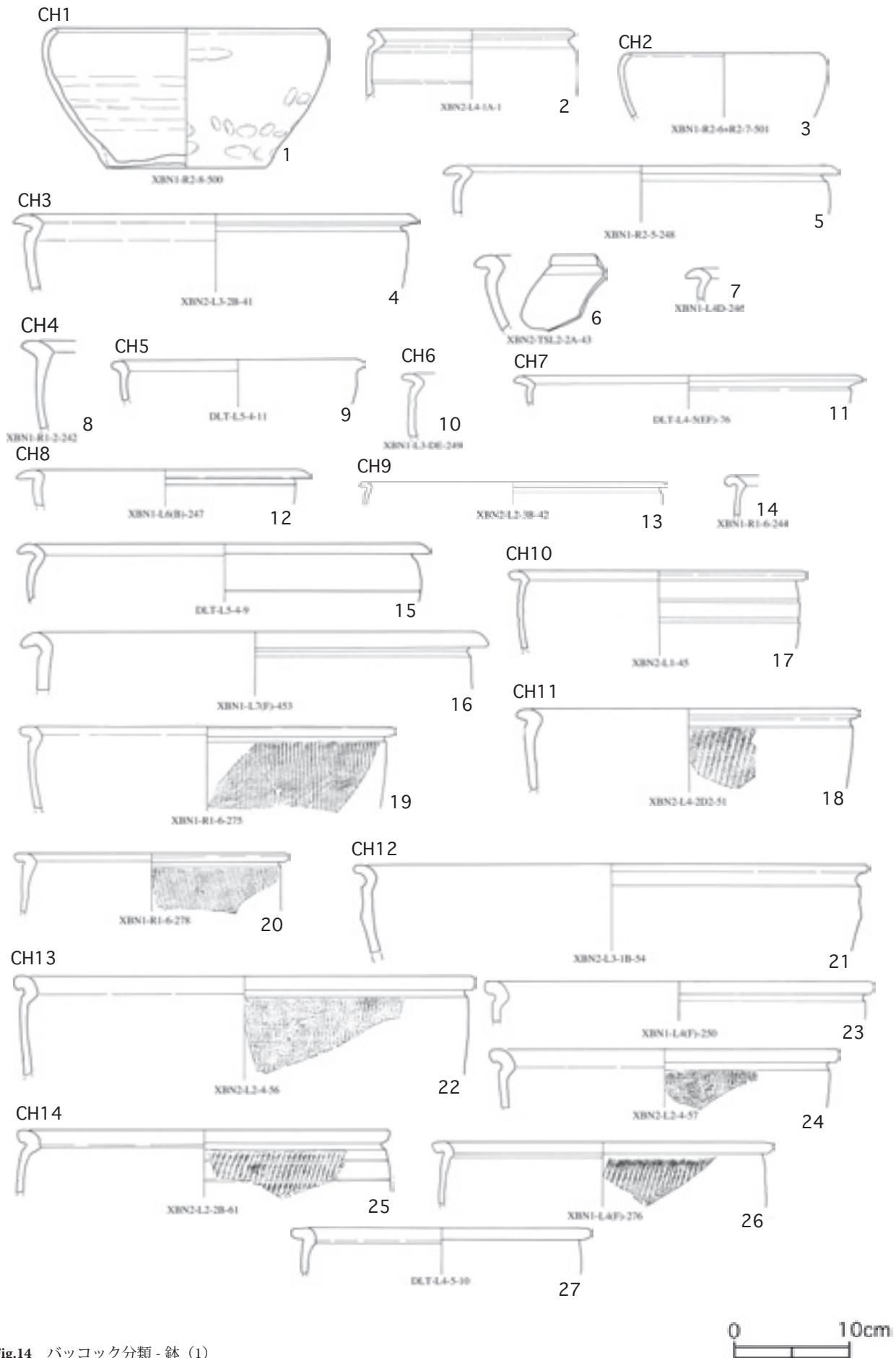


Fig.14 バッコック分類 - 鉢 (1)

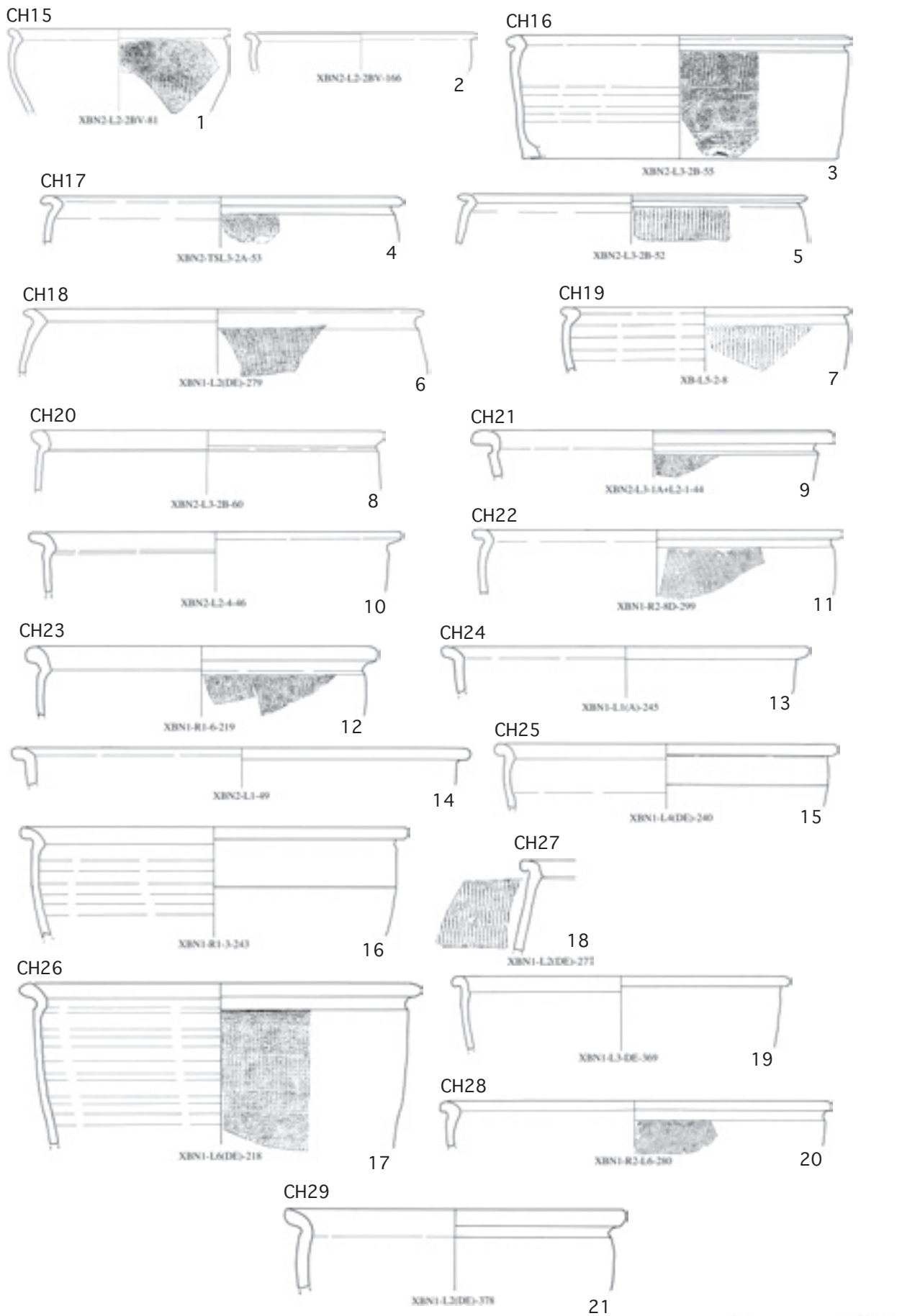


Fig.15 バッコック分類 - 鉢 (2)

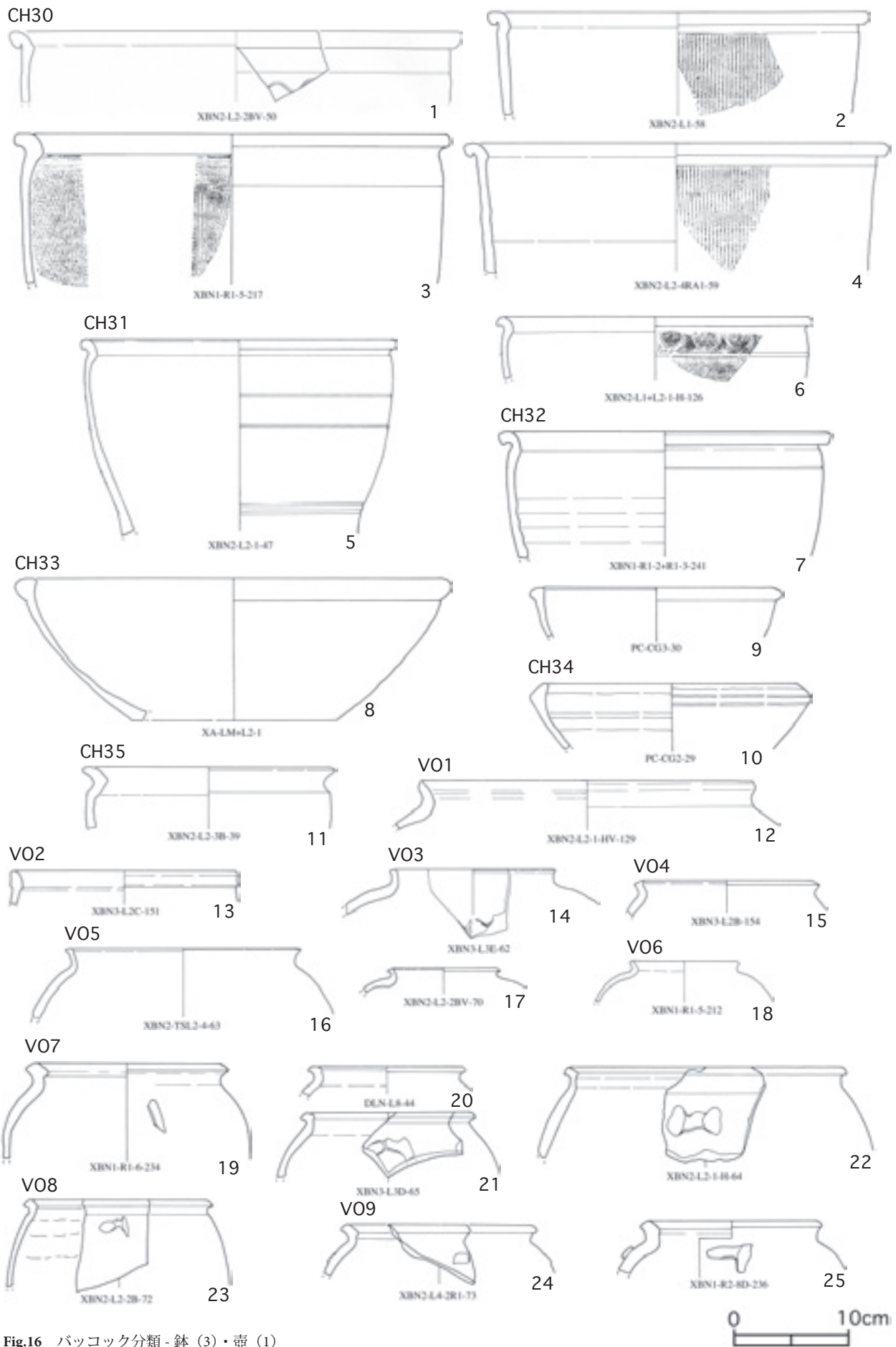


Fig.16 バッコック分類-鉢 (3)・壺 (1)

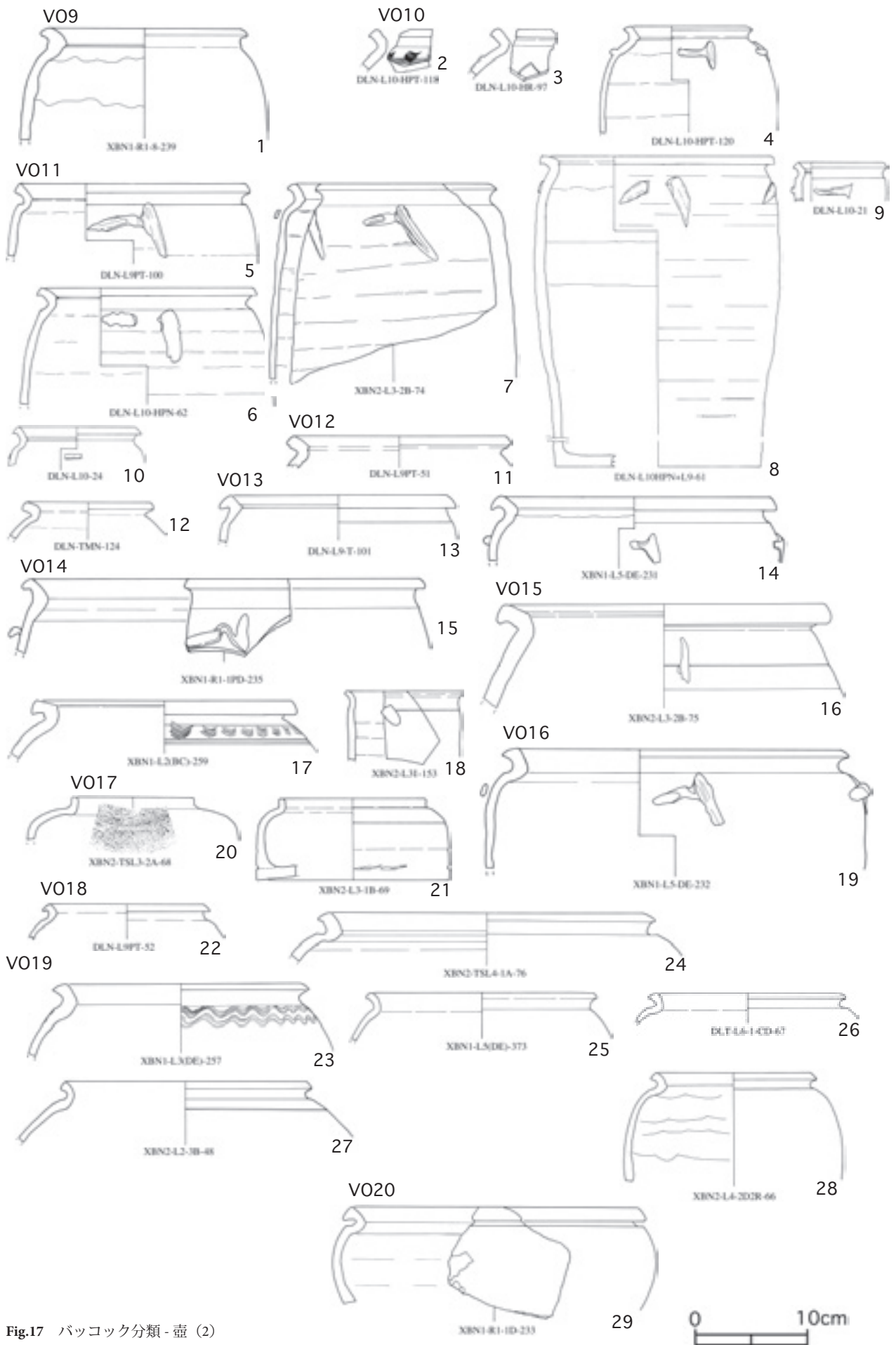


Fig.17 バッコク分類 - 壺 (2)

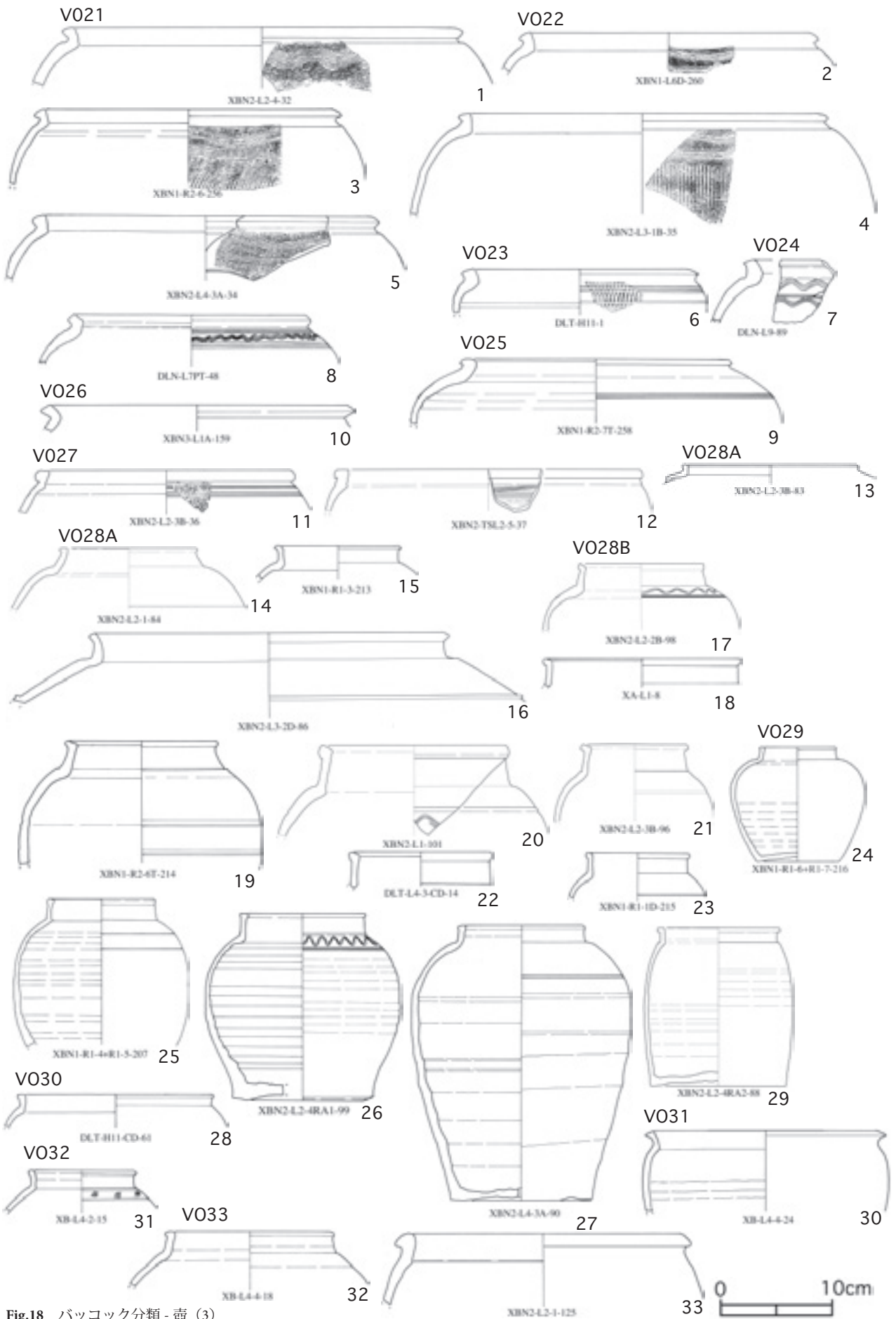


Fig.18 バッコック分類-壺 (3)

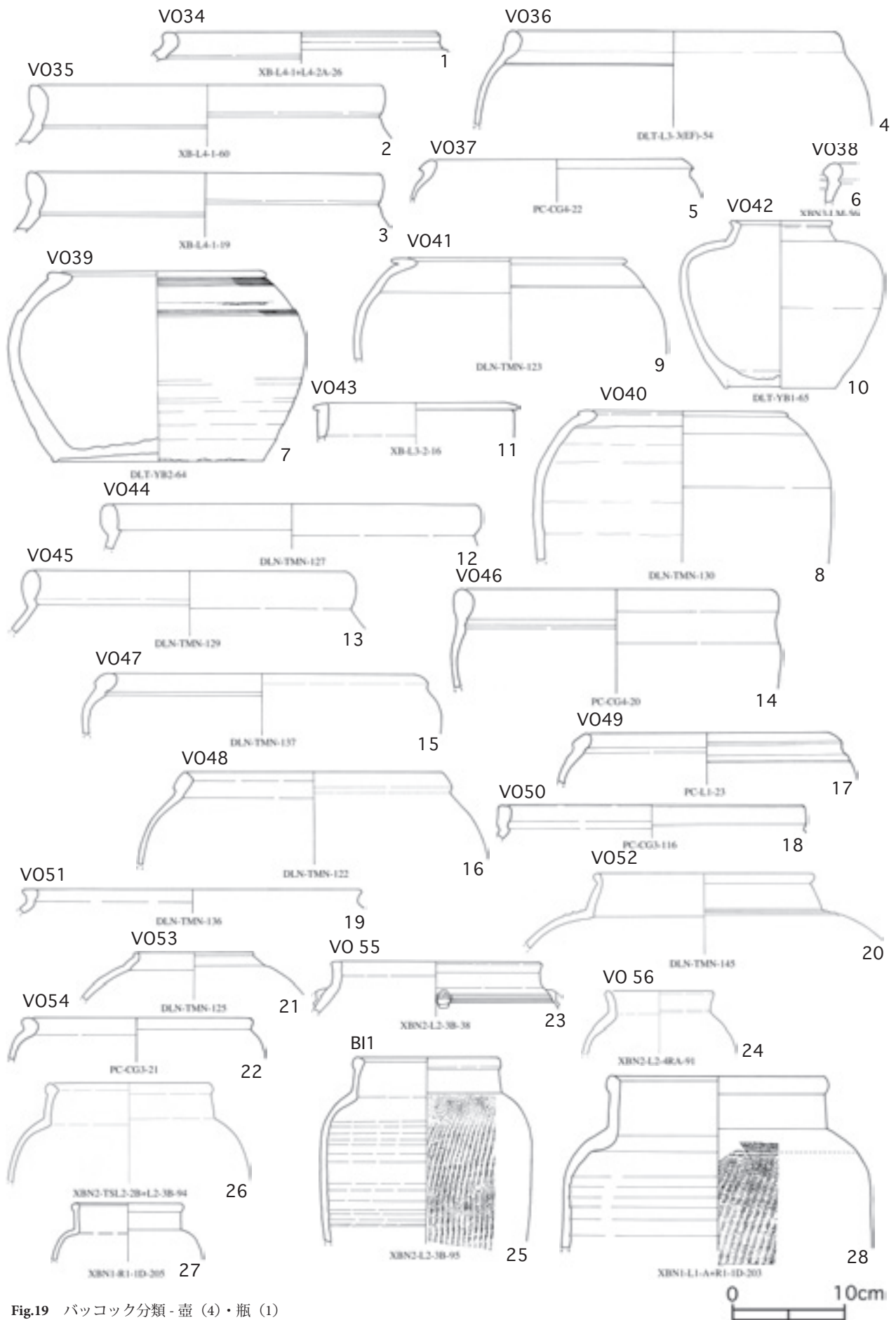


Fig.19 バッコック分類-壺(4)・瓶(1)

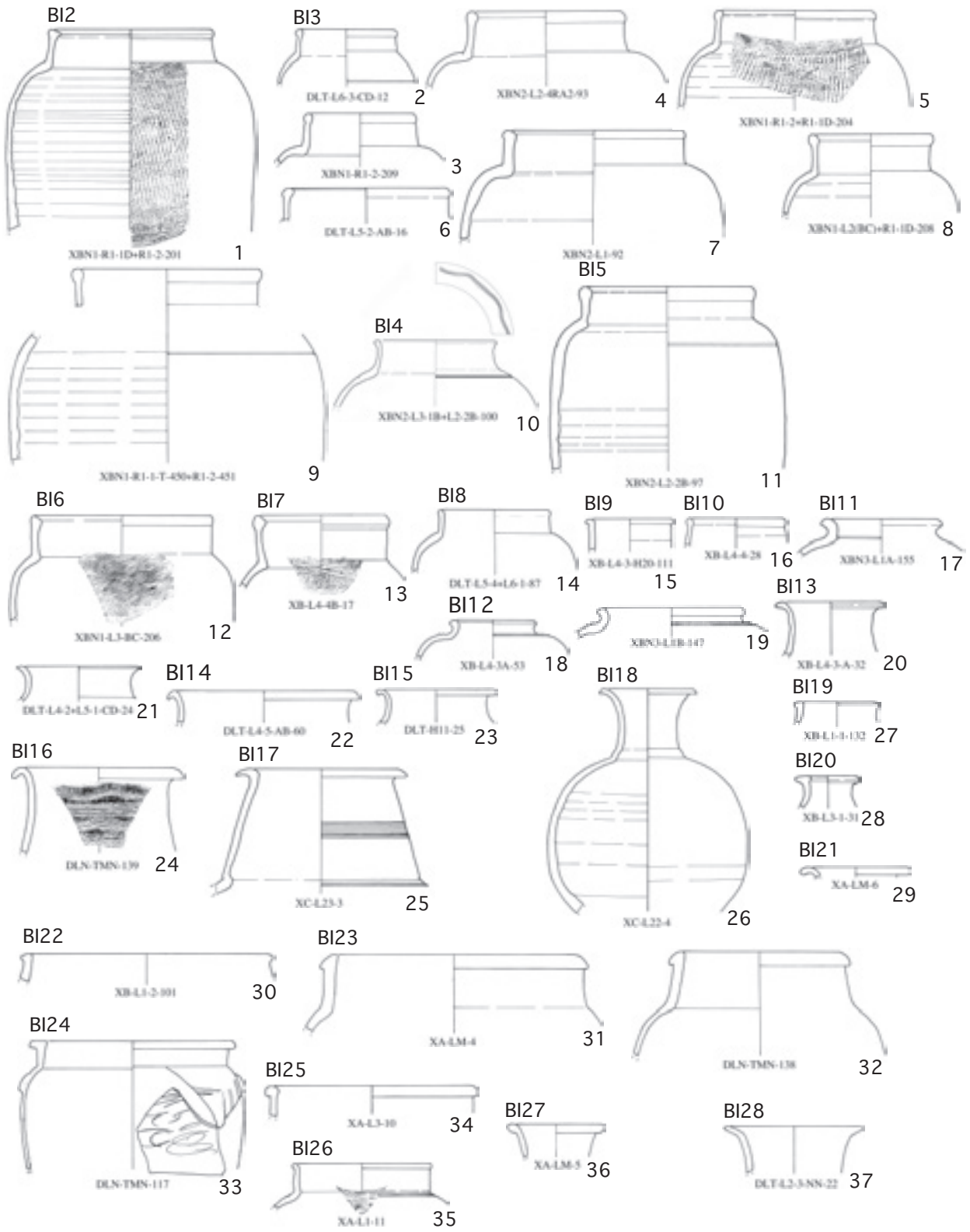
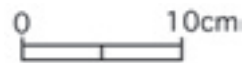


Fig.20 バッコック分類 - 瓶 (2)



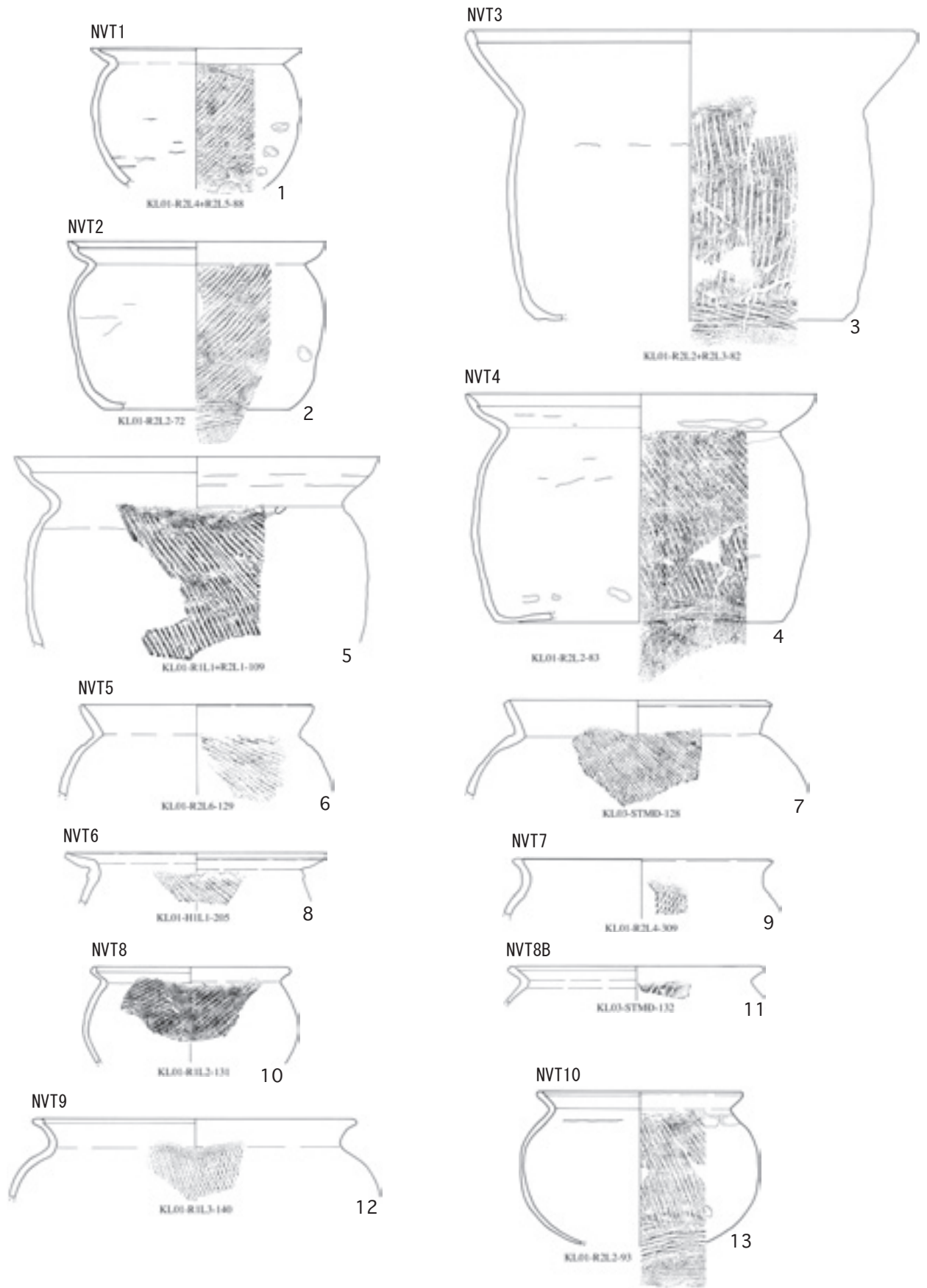


Fig.21 キムラン分類 - 縄滯文釜 (1)

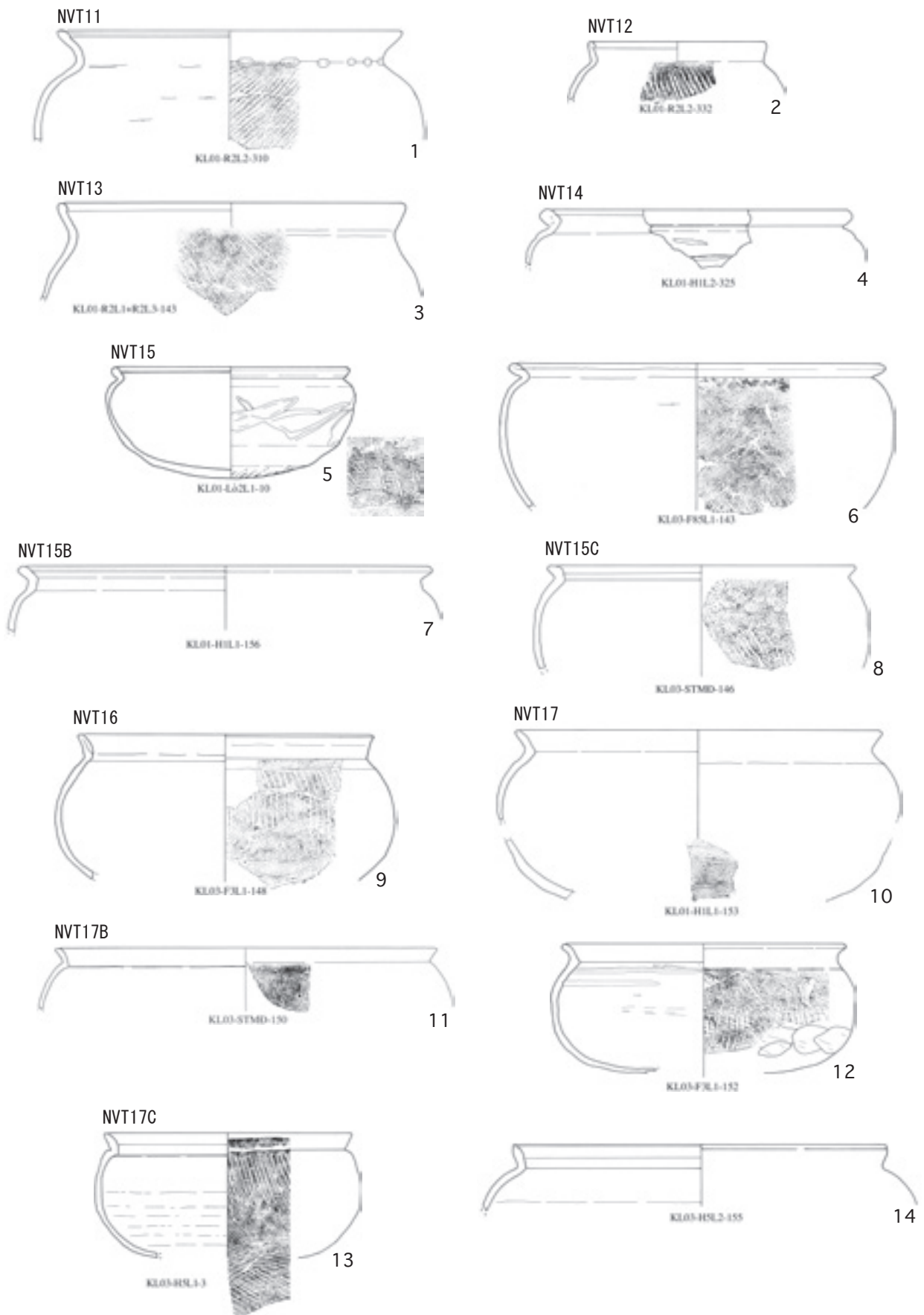
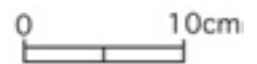


Fig.22 キムラン分類 - 縄蓆文釜 (2)



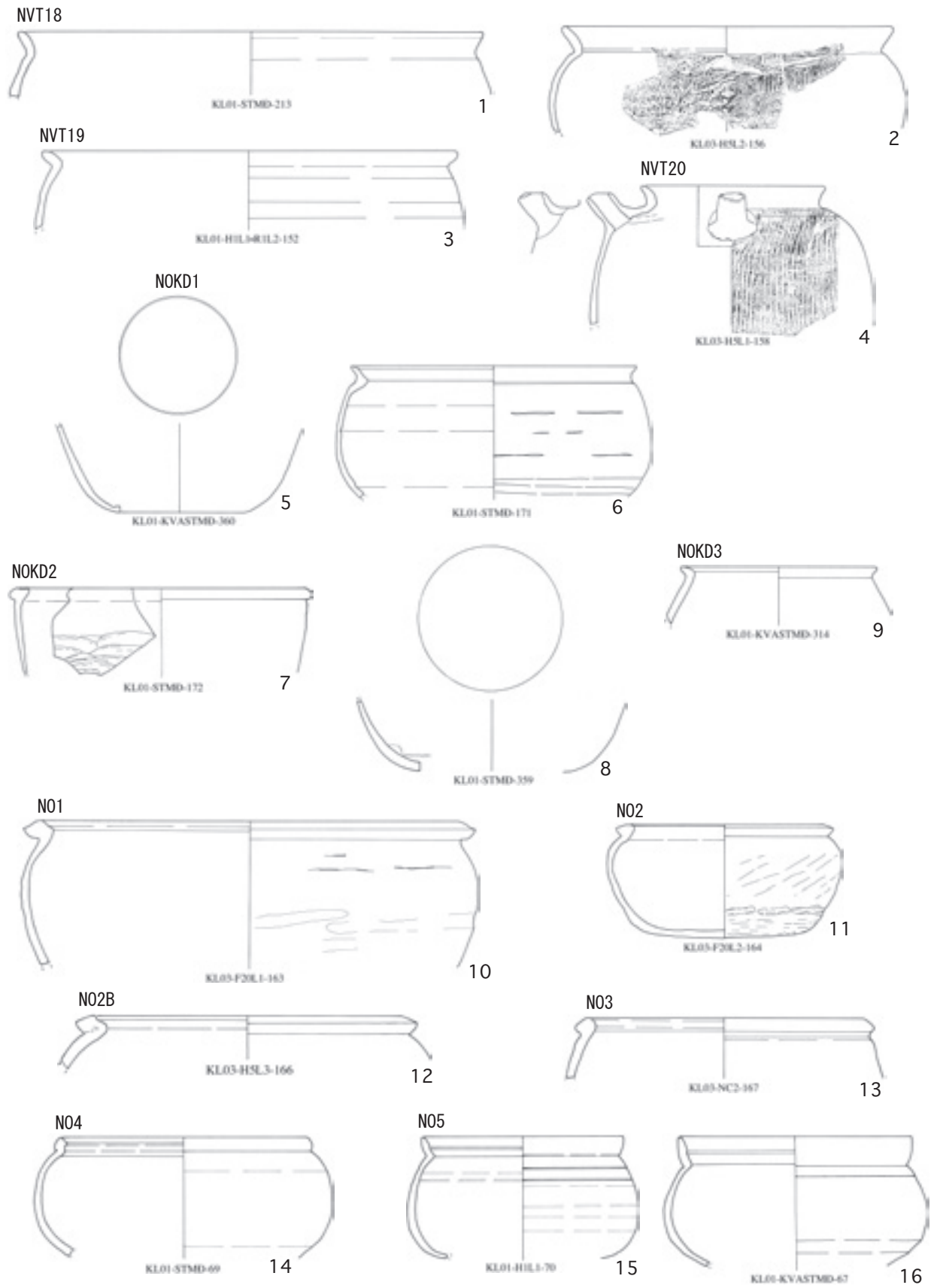


Fig.23 キムラン分類 - 縄蒭文釜 (3)・底なし釜・釜 (1)



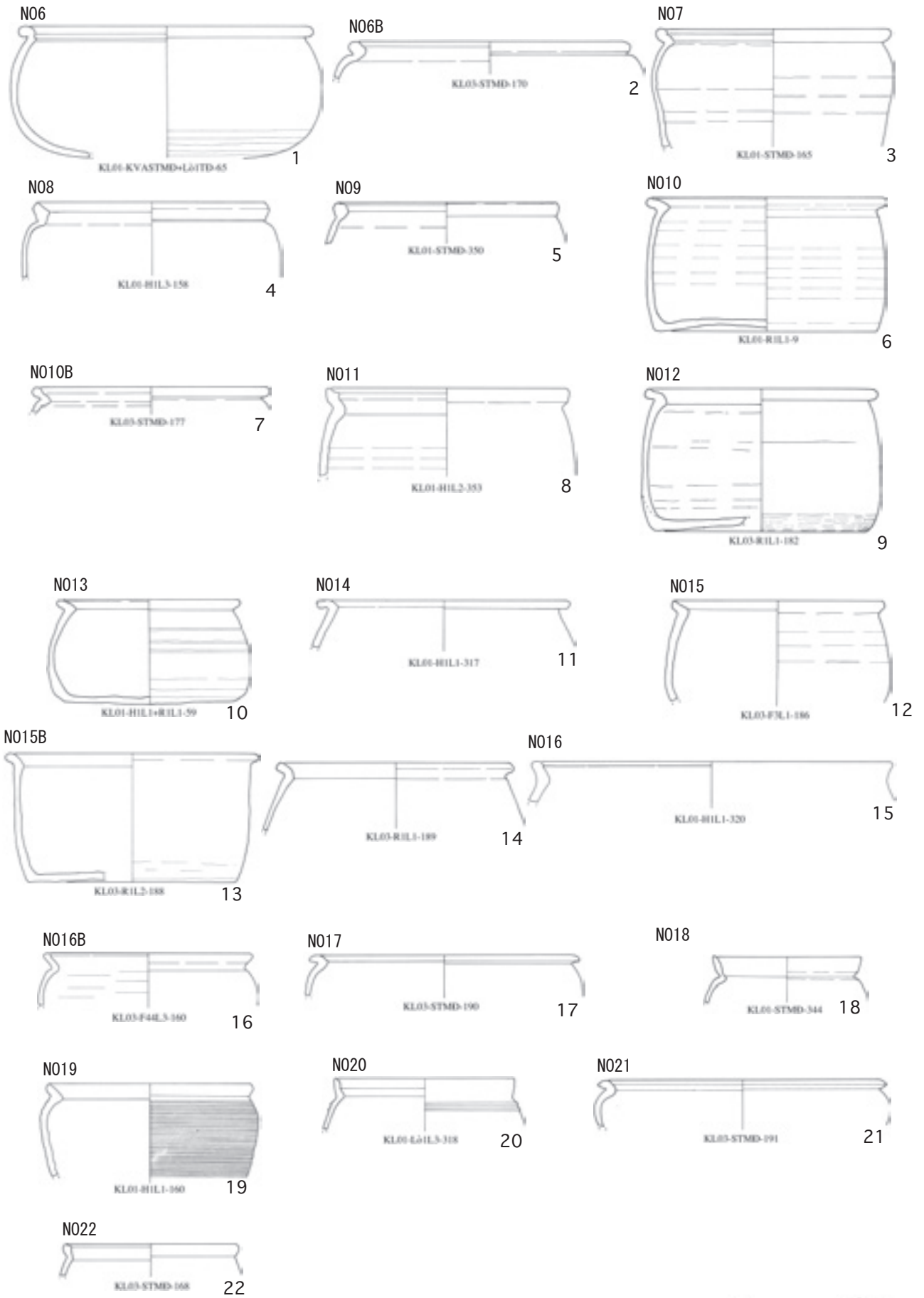


Fig. 24 キムラン分類 - 釜 (2)



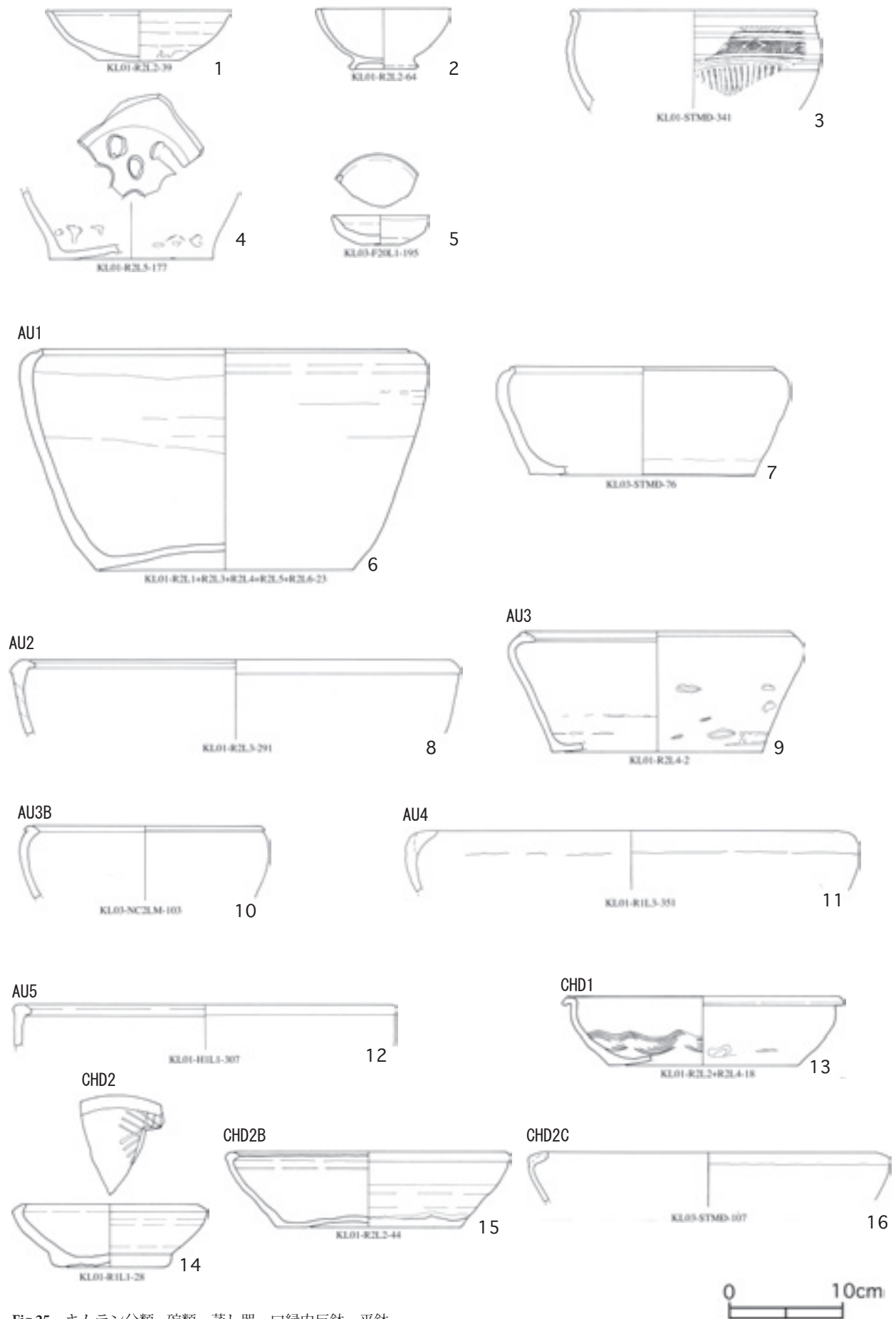


Fig.25 キムラン分類 - 碗類・蒸し器・口縁内反鉢・平鉢

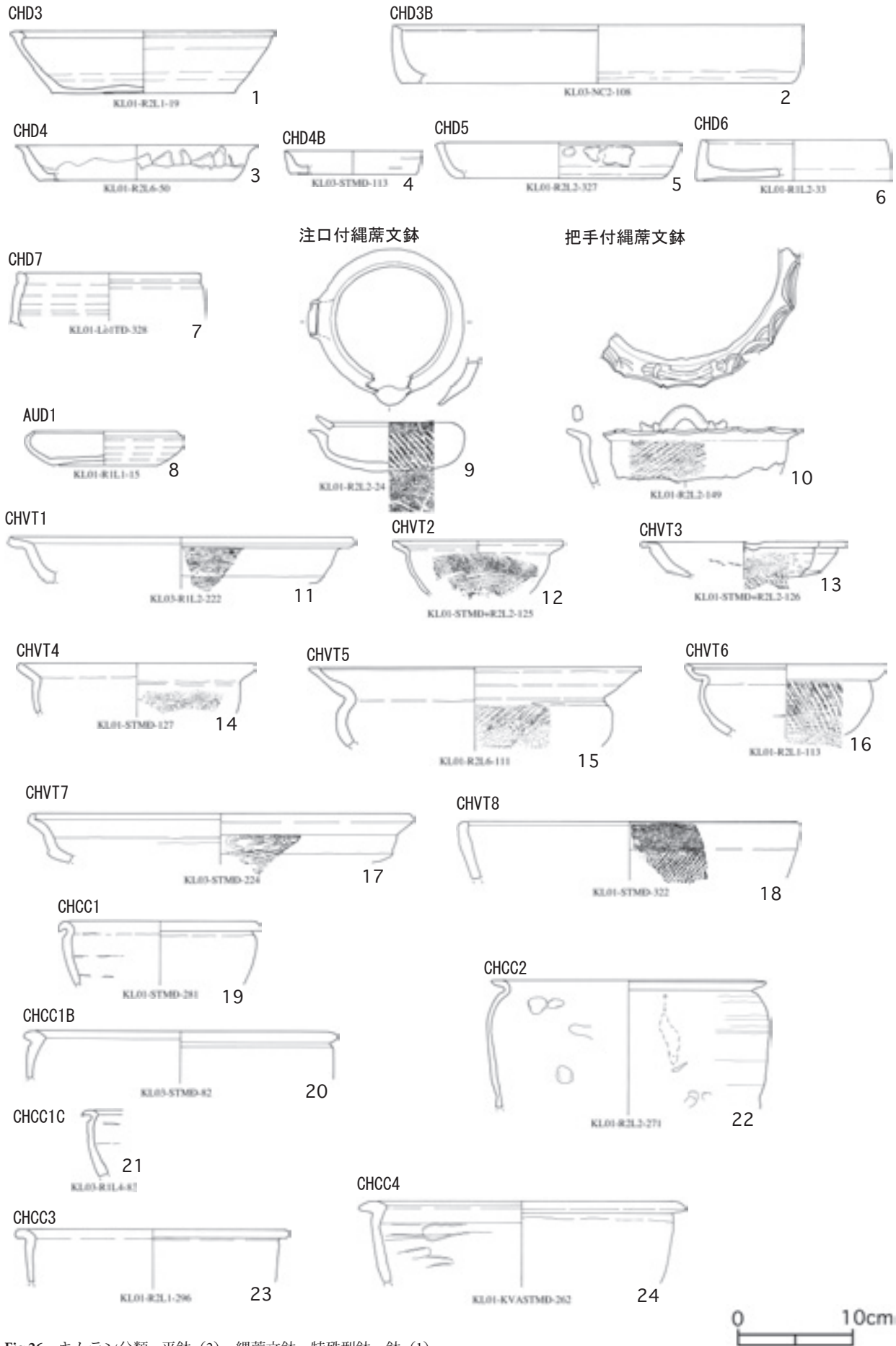


Fig.26 キムラン分類 - 平鉢 (2)・縄蓆文鉢・特殊型鉢・鉢 (1)

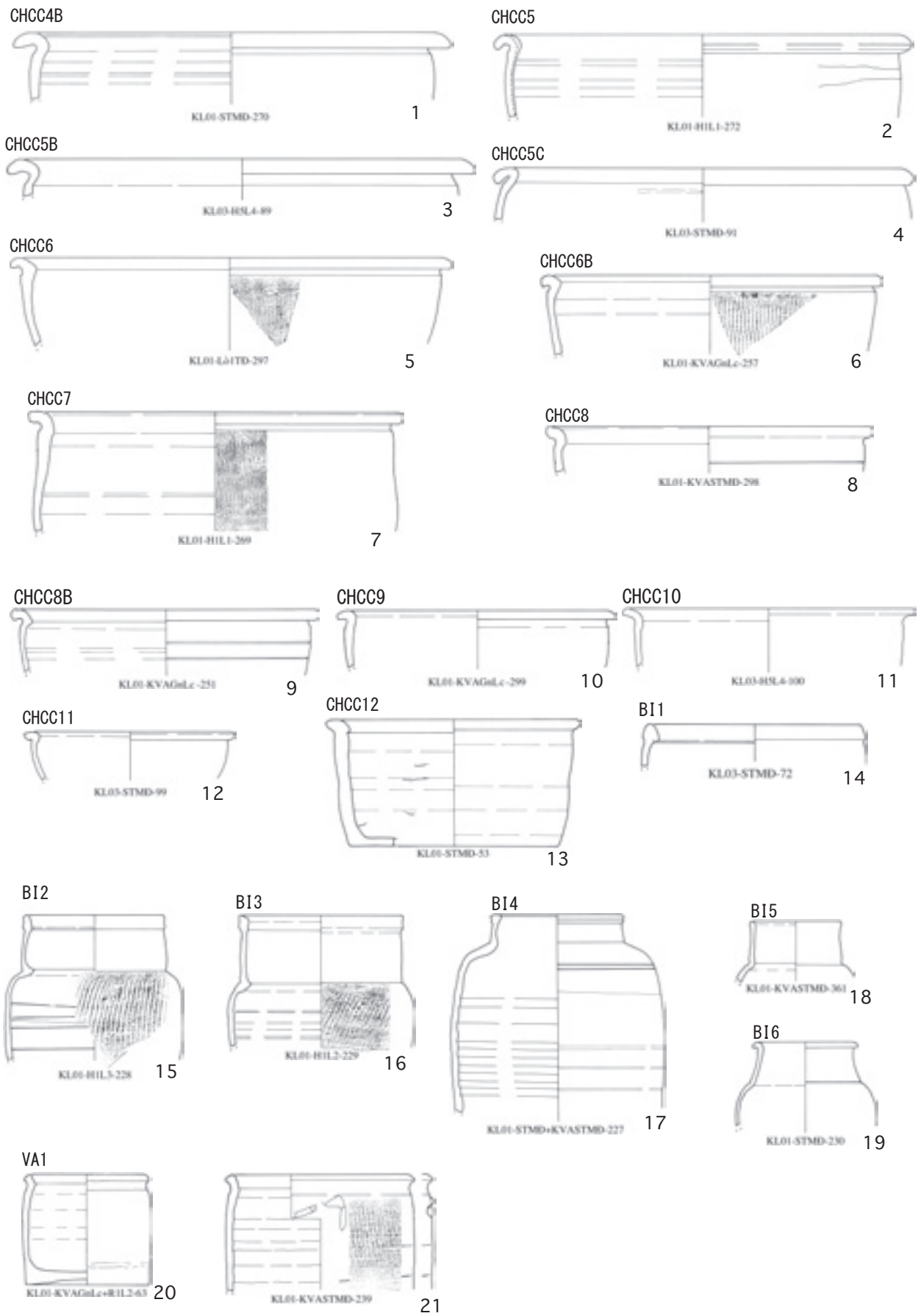


Fig.27 キムラン分類-鉢 (2)・瓶・桶 (1)

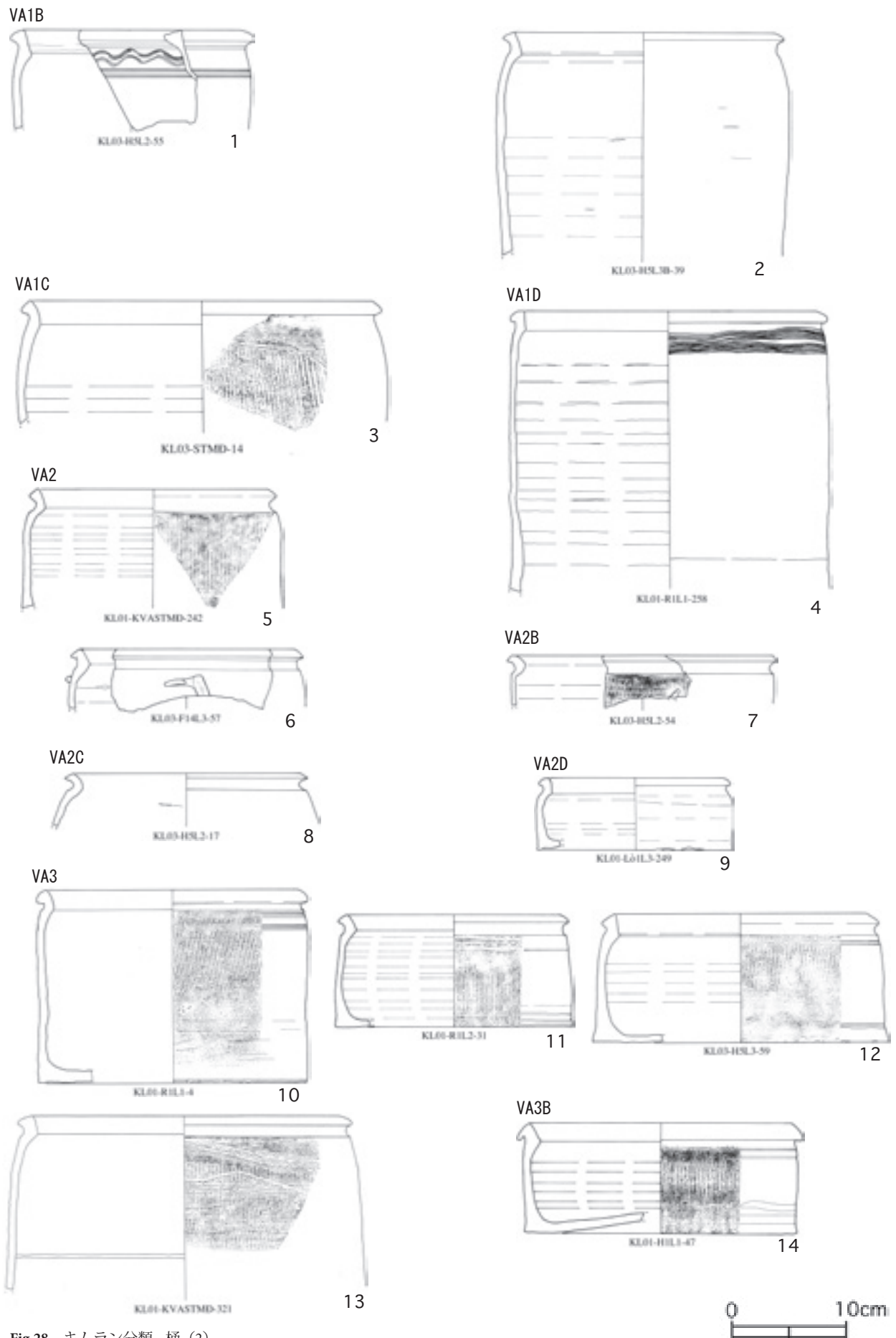


Fig.28 キムラン分類 - 桶 (2)

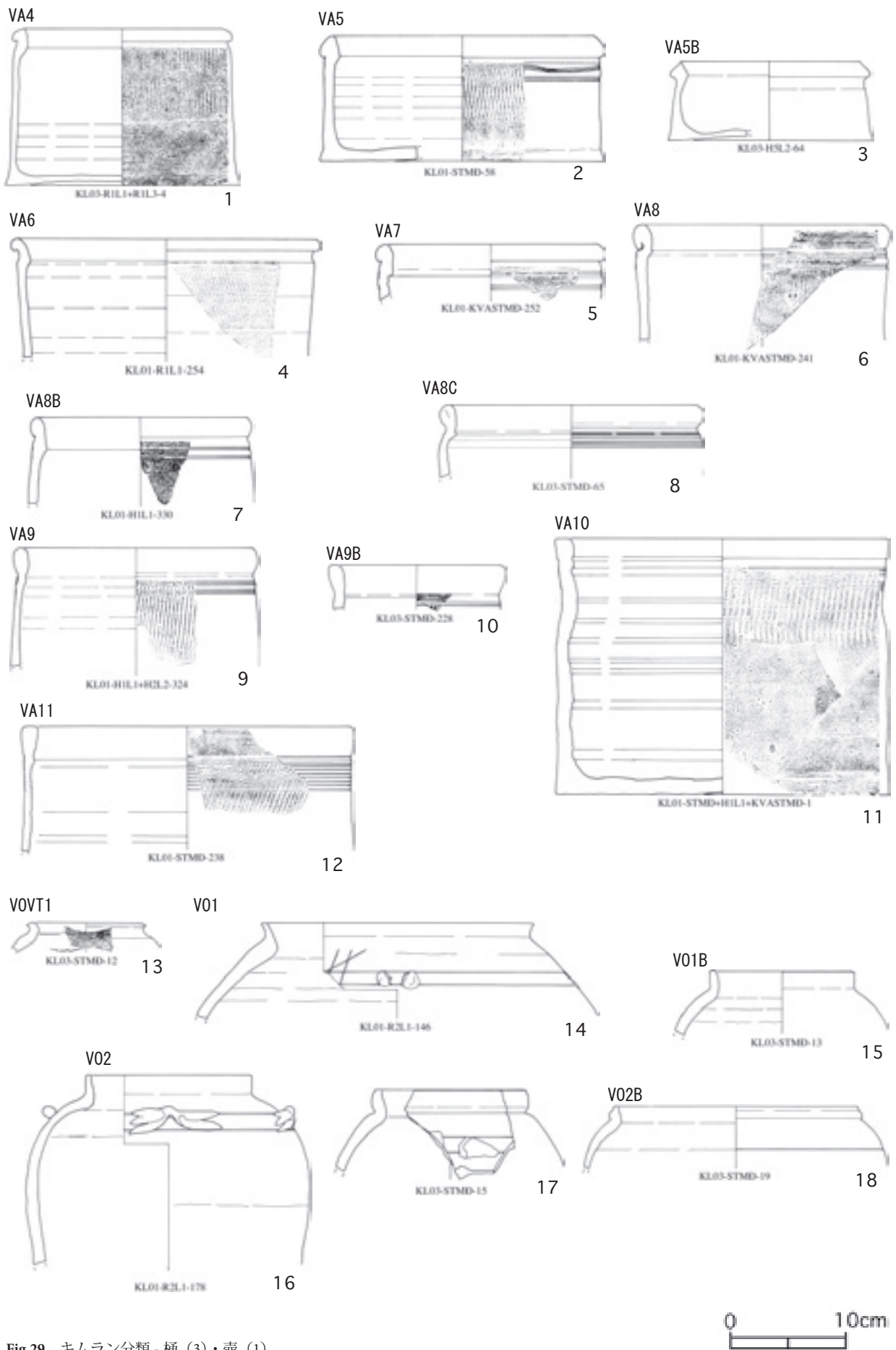


Fig.29 キムラン分類 - 桶 (3)・壺 (1)

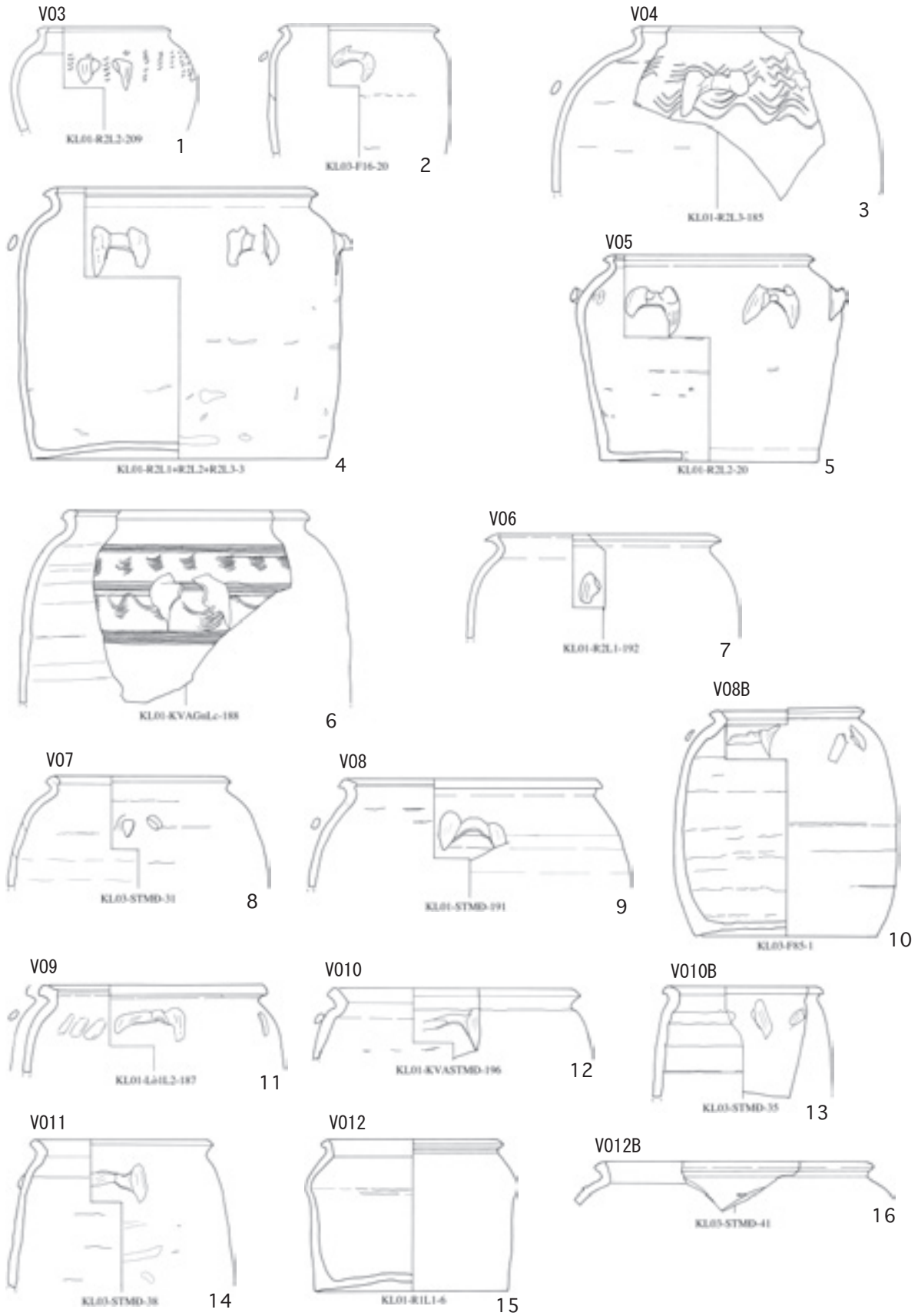


Fig.30 キムラン分類-壺(2)



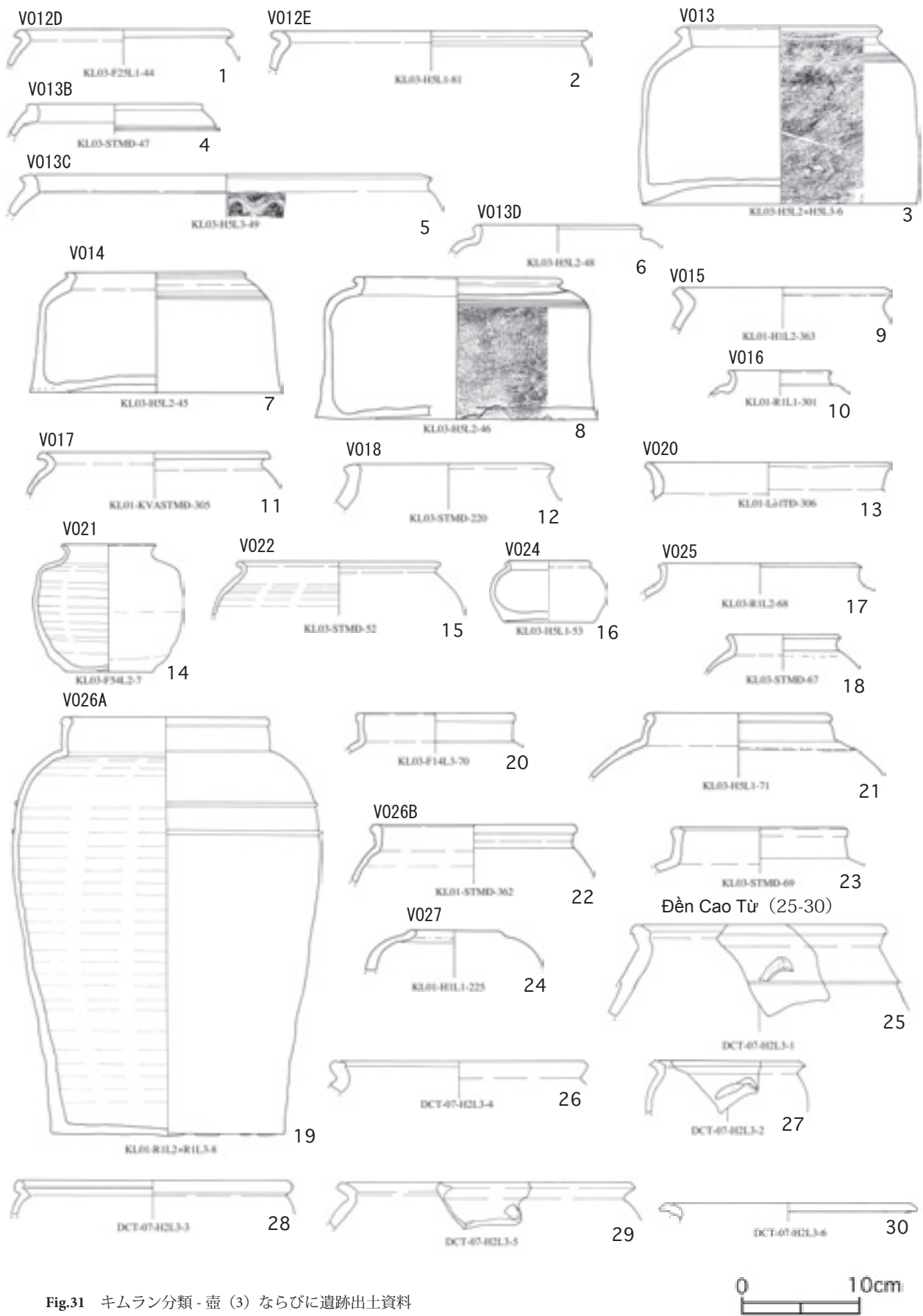
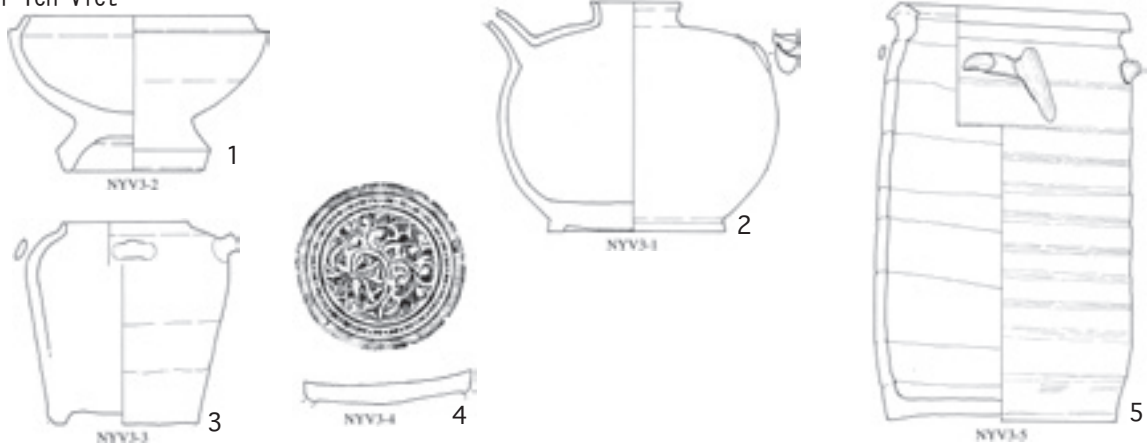
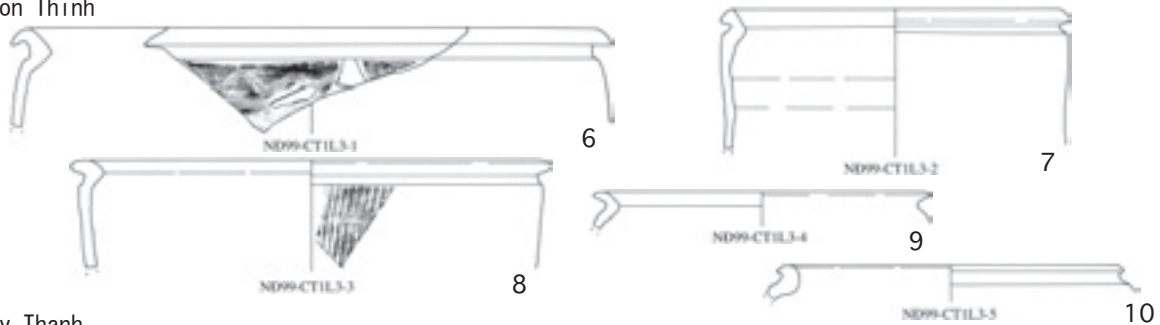


Fig.31 キムラン分類 - 壺 (3) ならびに遺跡出土資料

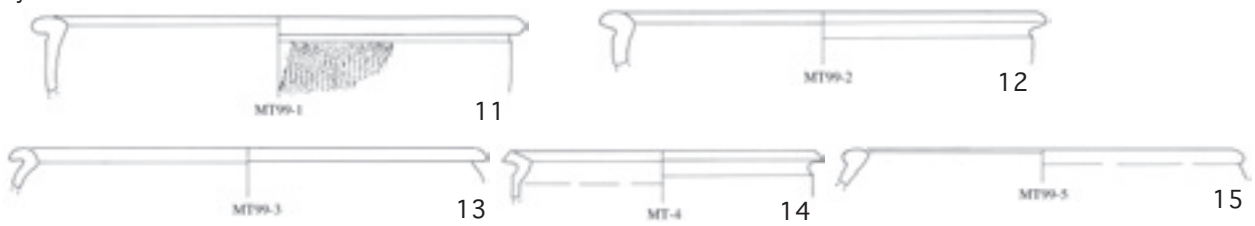
Nui Yen Viet



Con Thinh



My Thanh



Bai Ha Lan

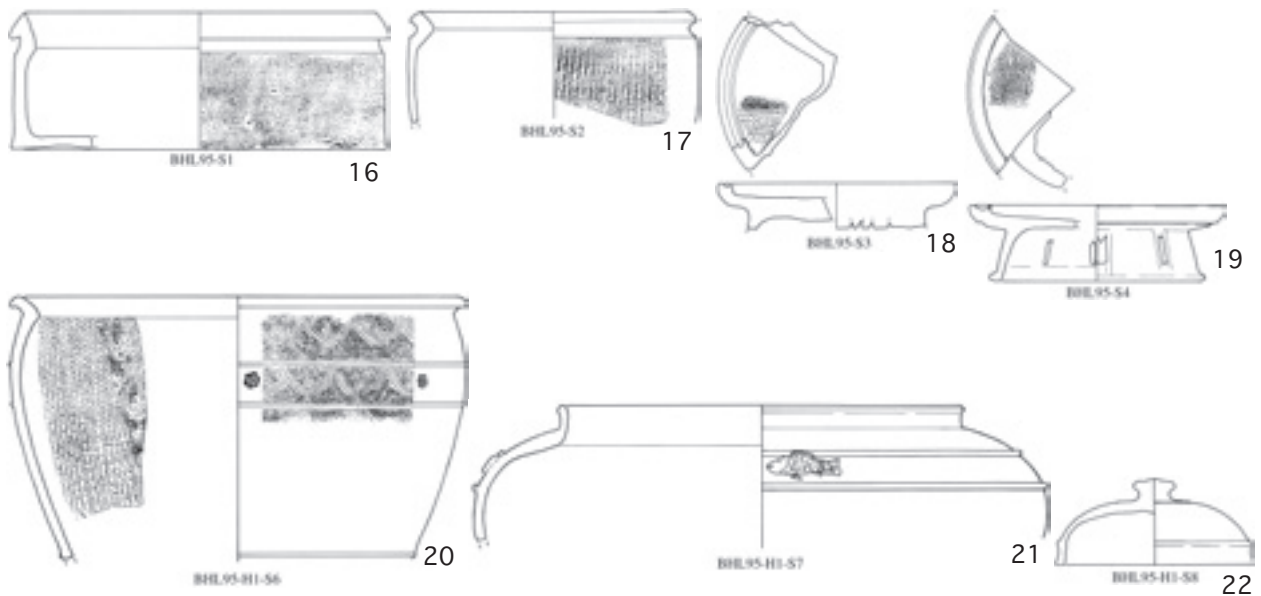
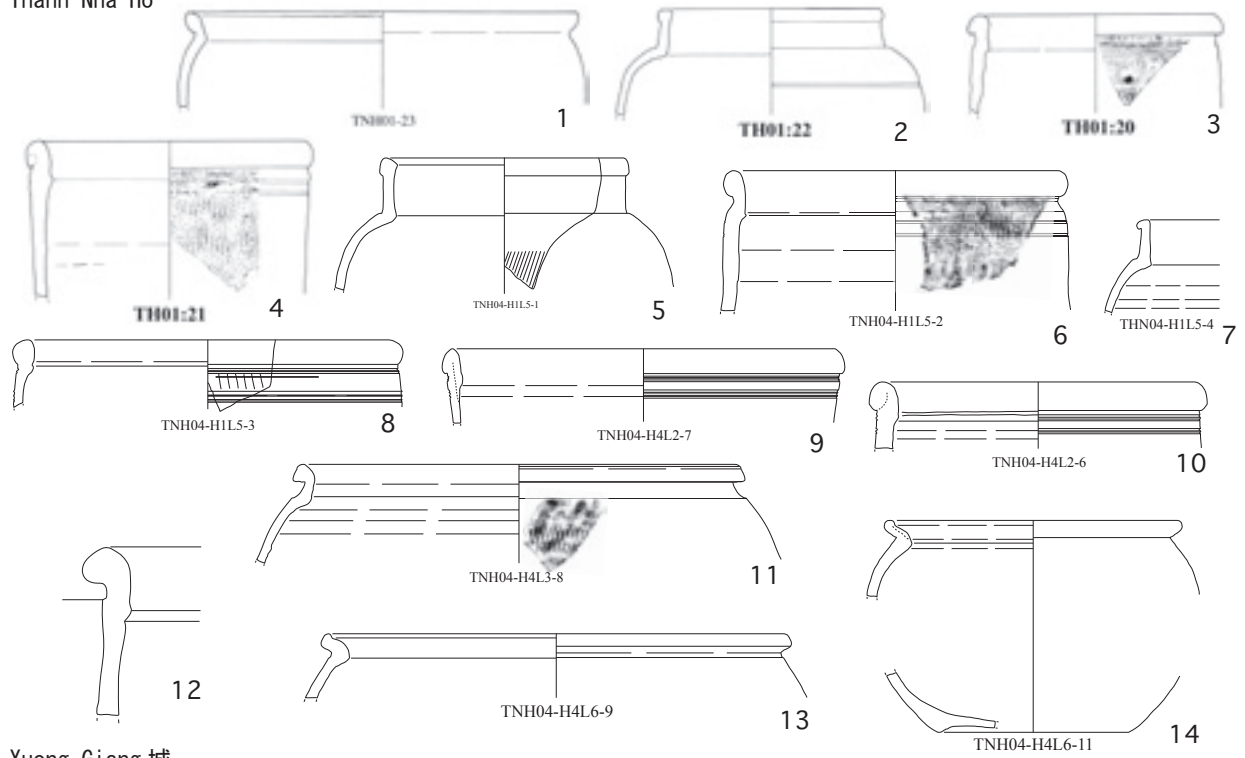
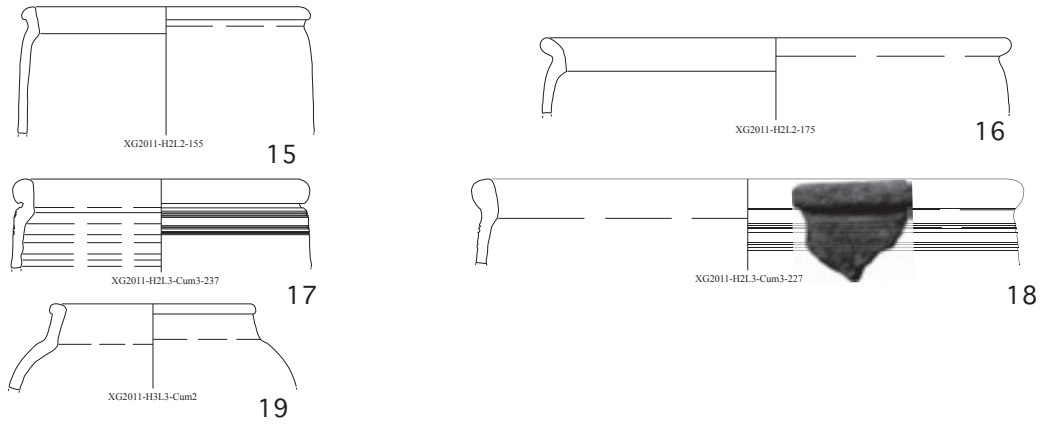


Fig.32 各遺跡出土・一括表採資料 (1)

Thanh Nha Ho



Xuong Giang 城



Ngoi



Chu Dau

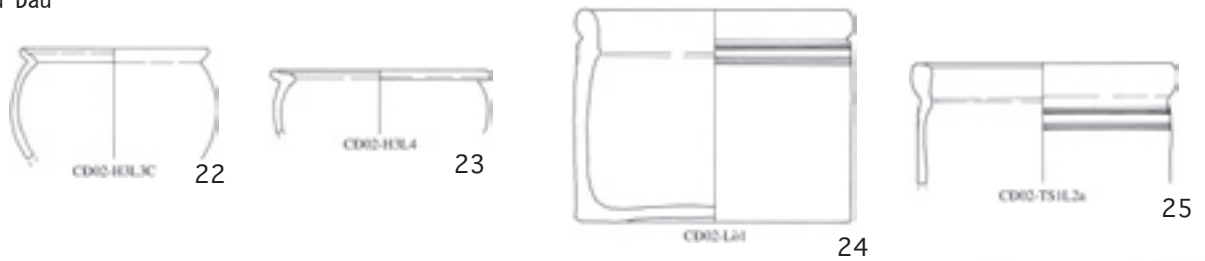
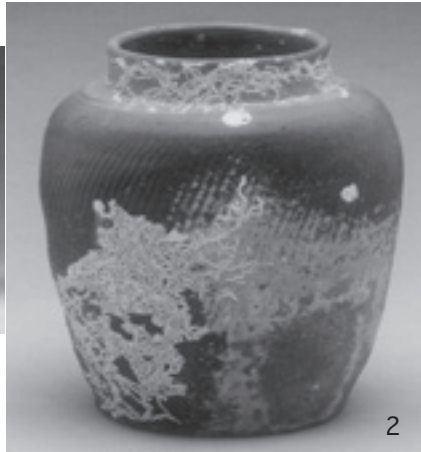


Fig.33 各遺跡出土・一括表採資料 (2)

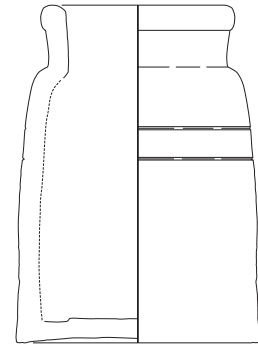
Hoi An 沖沈船



1



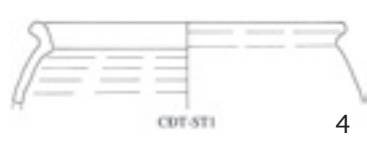
2



BTGSMD74-GM64

3

Chua De Tu



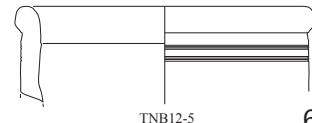
CDT-ST1

4



CDT-ST2

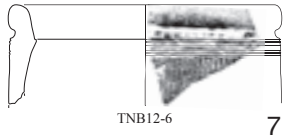
5



TNB12-5

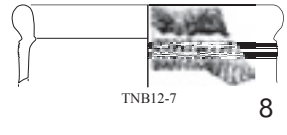
6

Thanh Nha Bau



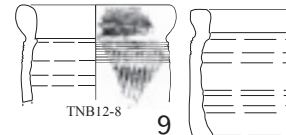
TNB12-6

7



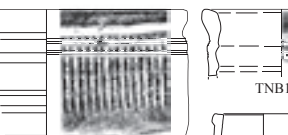
TNB12-7

8



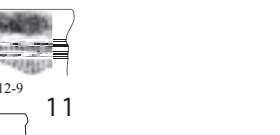
TNB12-8

9



TNB12-9

11



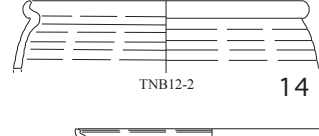
TNB12-10

10



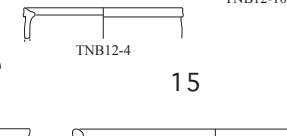
TNB12-1

13



TNB12-2

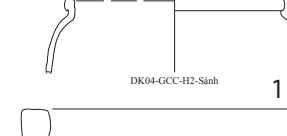
14



TNB12-4

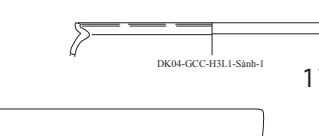
15

Dương Kinh



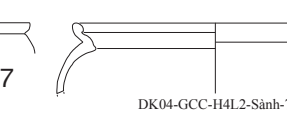
DK04-GCC-H2-Sánh

16



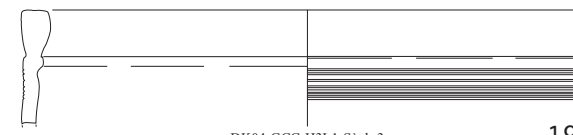
DK04-GCC-H3L1-Sánh-1

17



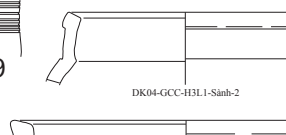
DK04-GCC-H4L2-Sánh-7

18



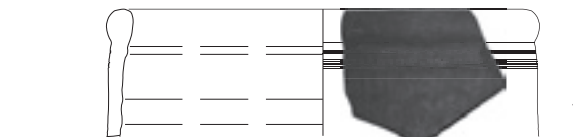
DK04-GCC-H3L1-Sánh-3

19



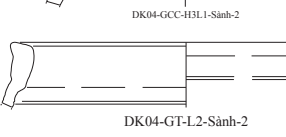
DK04-GCC-H3L1-Sánh-2

20



DK04-GCC-ST-Sánh-7

22



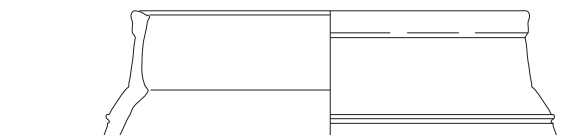
DK04-GT-L2-Sánh-2

23



DK04-GCC-ST-Sánh-8

21



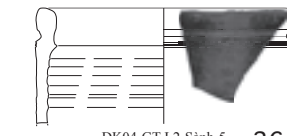
DK04-GT-L2-Sánh-3

24



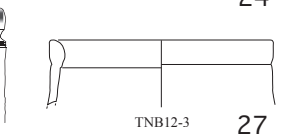
DK04-GT-L2-Sánh-4

25



DK04-GT-L2-Sánh-5

26



TNB12-3

27



DK04-GT-L2-Sánh-6

28



DK04-GT-L2-Sánh-1

29



Fig.34 各遺跡出土・一括表採資料 (3)

Huong Canh

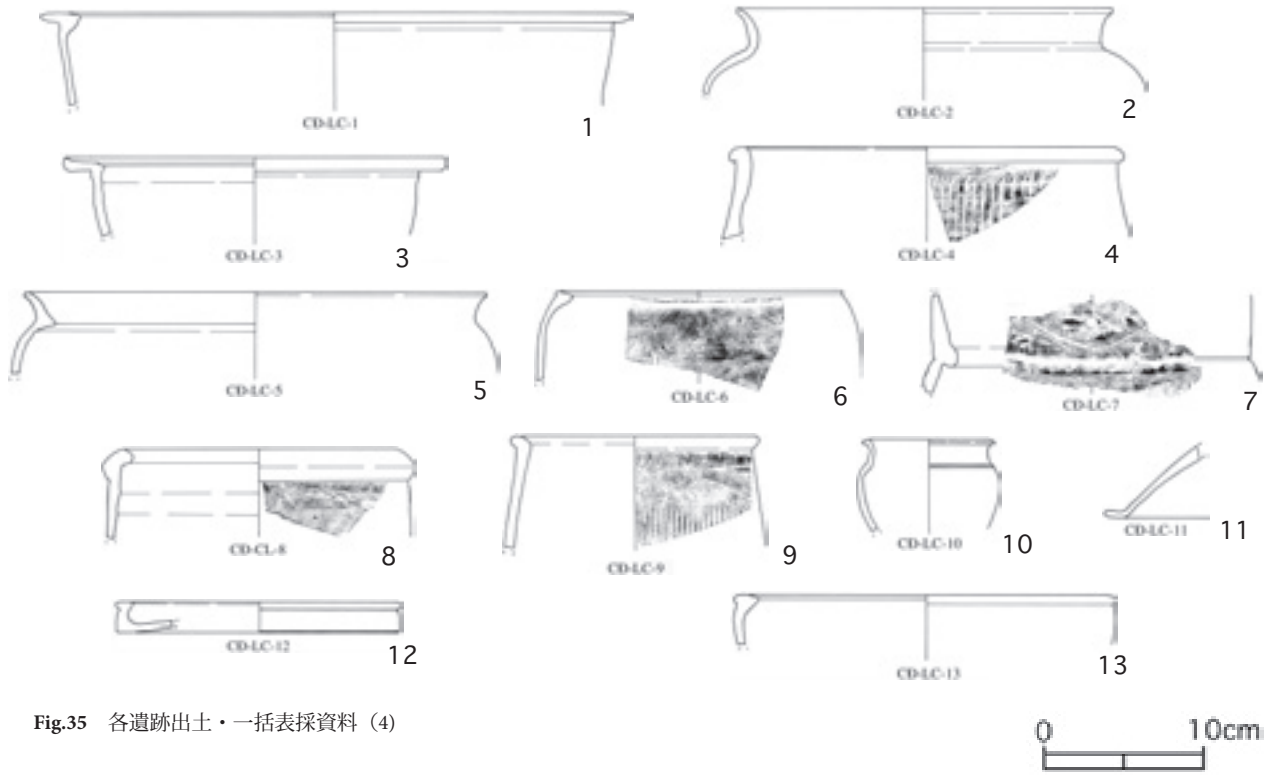


Fig.35 各遺跡出土・一括表採資料 (4)

10 世紀

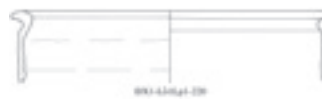
四耳・六耳壺



11 世紀



鉢



口縁内湾鉢



平鉢



繩蓆文釜

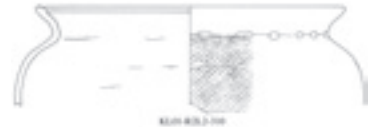
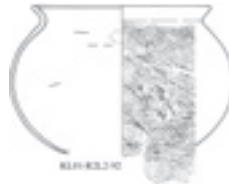
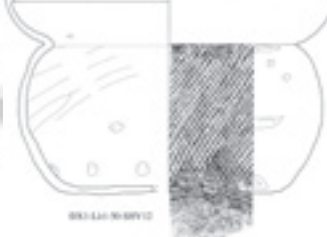
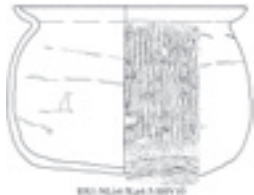


Fig.36 無釉陶器編年試案 (1)

12 世紀

四耳・六耳壺



短胴壺



鉢



繩蓆文釜



釜



13 世紀

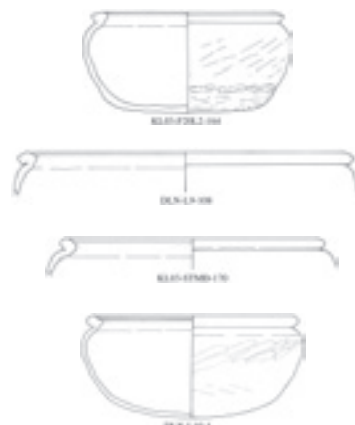
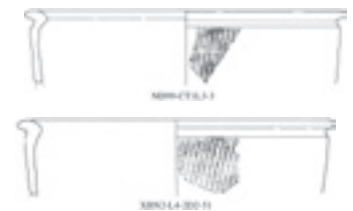
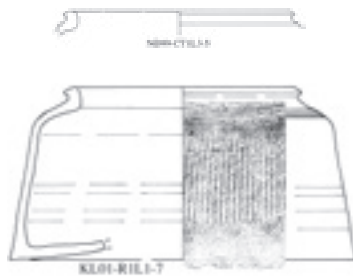
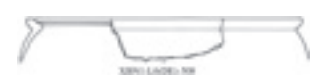
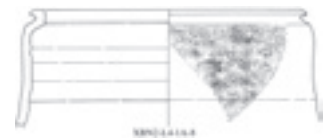
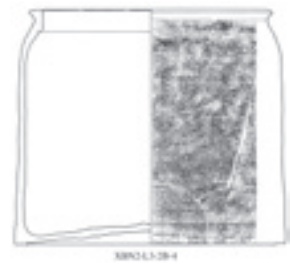
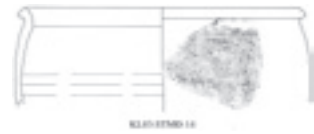
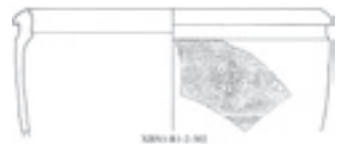
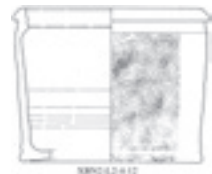
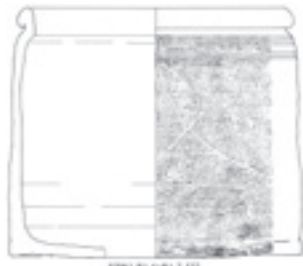
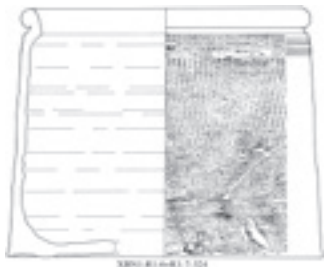


Fig.37 無釉陶器編年試案 (2)

14 世紀

桶



鉢



壺



繩蓆文釜



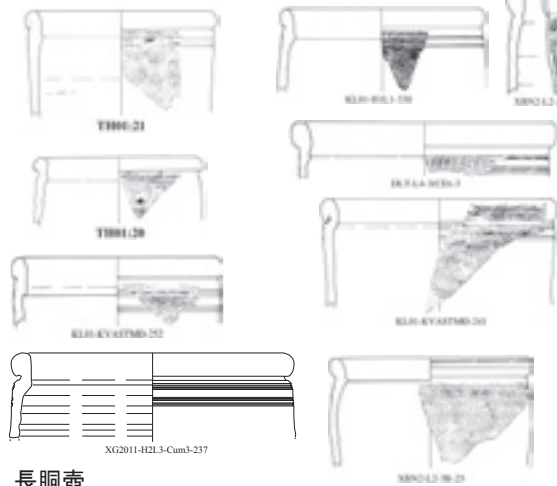
釜



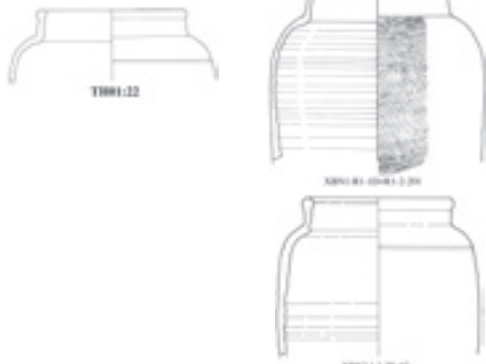
Fig.38 無釉陶器編年試案 (3)

15 世紀

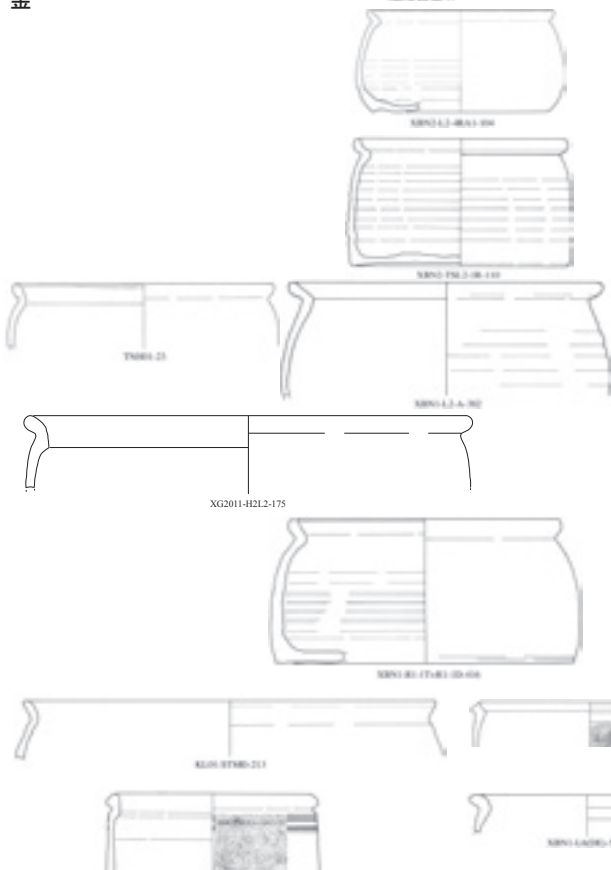
桶



長胴壺



釜



16 世紀

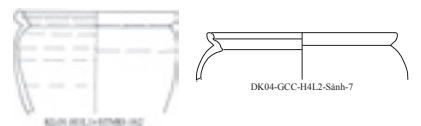
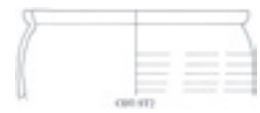
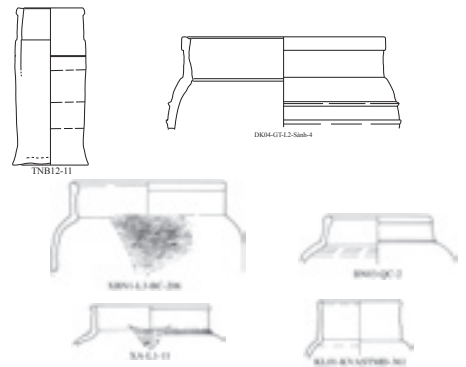
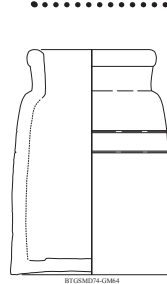
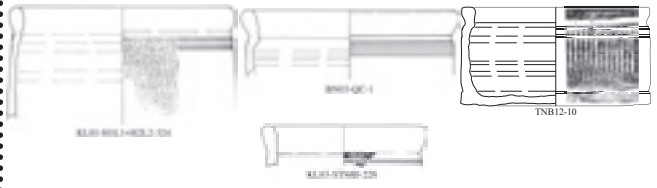
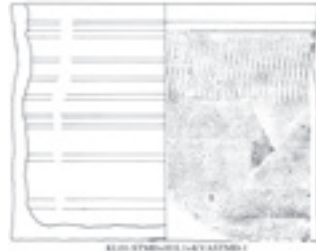


Fig.39 無釉陶器編年試案(4)

17 世紀

桶



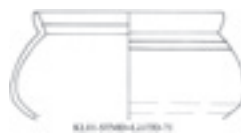
長胴壺



球形壺



釜



18 世紀

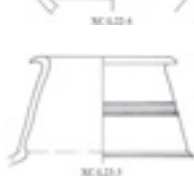


Fig.40 無釉陶器編年試案 (5)

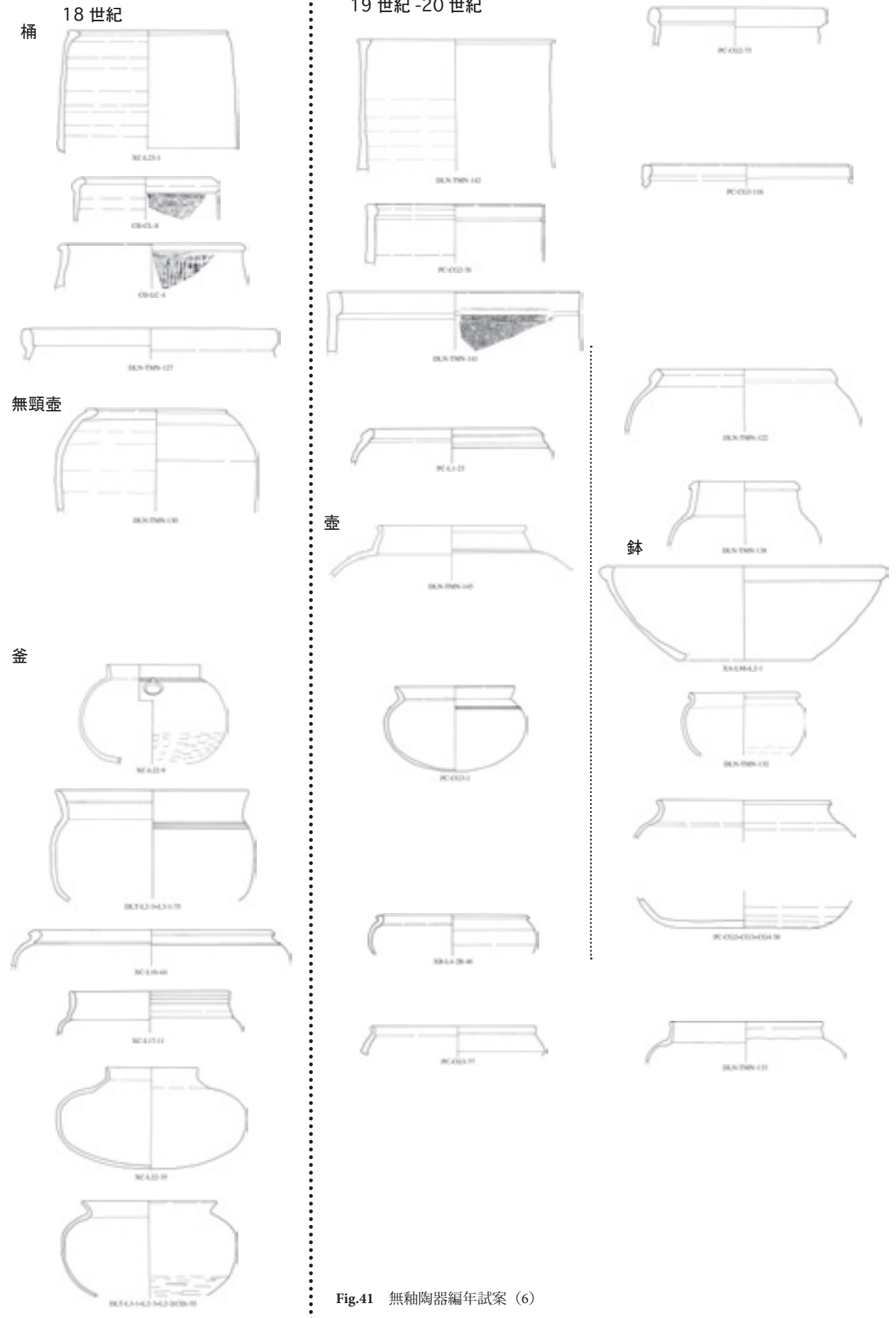


Fig.41 無釉陶器編年試案 (6)

層・遺構形成時期	層・遺構記号	BC-DLN-L10HPN	BC-DLN-L10	DCT	NYV	DX4	KL-F85	KL-F54	CCh/CTh	DLT-H14	KL-L02	XBN-R1+R2下	BHL	KL-R1+H5	TNH	TXG	XBN-R1+R2上	NG-TS3	TDHA	CD02	CDT	TNB	DK	XB-L5	XB-L4-5-L4-4	XB-L4-3	DLT-H11	KL-H1+Lo1	DLT-YB	XB-XBL4-2-L3	HCLC	XCSC-cum	XCSC-L1 5-L23	DLN-TMN	PC-L1+L2	20世紀末製品			
900末-100	DX1-3																																						
100末-110初	KL-R2																																						
110後半-120	BC-DLN-L10HPN																																						
120・130前半	BC-DLN-L10																																						
12世紀	DCT																																						
12世紀	NYV																																						
DX4																																							
120	KL-F85																																						
120	KL-F54																																						
130	CCh/CTh																																						
130	DLT-H14																																						
120・130	KL-L02																																						
140後半	XBN-R1+R2下																																						
130後半-140前半	BHL																																						
140末	KL-R1+H5																																						
140末-150初	TNH																																						
150新1四半期	TXG																																						
150	XBN-R1+R2上																																						
150前半	NG-TS3																																						
150後半	TDHA																																						
150-160	CD02																																						
160前半	CDT																																						
160半ば	TNB																																						
160前半-160末	DK																																						
160後半	XB-L5																																						
170	XB-L4-5-L4-4																																						
170後半-180	XB-L4-3																																						
170初	DLT-H11																																						
170後半	KL-H1+Lo1																																						
180	DLT-YB																																						
180	XB-XBL4-2-L3																																						
180	HCLC																																						
180	XCSC-cum																																						
180	XCSC-L1 5-L23																																						
200前半	DLN-TMN																																						
200前半	PC-L1+L2																																						
200末	20世紀末製品																																						

Table.5 BC-KL分類表 - 桶 (vai) -2

